
遊戯王5D's After ～子蟹冒険記～

キューマル式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王5D's After ～子蟹冒険記～

【Nコード】

N2883Y

【作者名】

キューマル式

【あらすじ】

かつて、この街：いや、世界は滅びの危機に瀕していた。

だが、英雄と呼ばれる男、不動遊星とその仲間たちによって世界は救われた。

そして：時は流れた。

平和な日々と幸せな日常を生きる一人の少年。

その名は、不動遊輝^{ふでうめうき}。

英雄・不動遊星とその妻アキとの間に生まれた、まさにデュエリストになるべくして生まれた少年である。

この物語は少年と彼を取り巻く少女たちの、平和な、そして時に危険な冒険の物語である。

※注意…作者は初投稿なうえ、デュエルタクティクスは驚くほど低く文才ありません。

さらにテンプレな部分も多く面白くない部分も多々あるかもしれませんが、どうか生温かい目で見てください。

第00話 不動さんちの日常（前書き）

初投稿ですがよろしくお願いします。

第00話 不動さんちの日常

かつて、この街…いや、世界は滅びの危機に瀕していた。だが、英雄と呼ばれる男、不動遊星とその仲間たちによって世界は救われた。

そして…時は流れた。

平和な日々と幸せな日常を生きる一人の少年。

その名は、不動遊輝^{ふでうゆうき}。

英雄不動遊星とその妻アキとの間に生まれた、まさにデュエリストになるべくして生まれた少年である。

この物語は少年と彼を取り巻く少女たちの、平和な、そして時に危険な冒険の物語である。

早朝の閑静な街を一人の少女が走る。その少女の視線は住宅街の奥の家へと注がれていた。

豪邸というわけではないが、普通よりは明らかに大きなその家。

少女は呼び鈴を鳴らすとドアを開けた。

「…おはようございます」

少女の決して大きくはない、だが良く通る声が響く。

すると奥の台所から、一人の女性が顔を出した。

「あら恵ちゃん、おはよう。 いつもごめんなさいね」

「…おはようございます、アキおばさま」

そういつて少女——レイン——恵はぺこりと頭を下げる。

ここはあの英雄、不動遊星一家の住む不動家だ。

今声をかけてきた女性は、不動アキ。不動遊星の妻である。

「…ユウはまだ寝てますか？」

「ええ、さつきゆまちゃんが来て起こしに行ってくれたんだけど、まだ起きてこないのよ…」

そう言つてアキは呆れたようにため息をつく。

「また夜更かししてたみたいで…まったく、誰に似たんだか…」

そんな風に愚痴るアキを尻目に、恵は靴を綺麗に揃えると不動家に上がり込む。

「…私が起こしてくる」

「ええ、お願いね」

そう言つて恵は迷うことなく一階の奥まった部屋のドアへとたどり着く。

「…ユウ、すでに起床時間を過ぎている」

そしてノックを数回するとドアを開けた。

部屋はパソコンが電源が入ったままで放置されており、ところどころに機械の部品が置いてある。

そしてベッドが一つに、さらに奥へと続くドアが一つ。奥のドアからは独特の機械油の匂いが鼻についた。

「…ユウ、起きて」

ベッドに近付き声をかけるがいつこうにベッドから起き上がる気配はない。

恵はため息をつくど、ふとおかしなことに気が付いた。ベッドの膨らみがどうにも一人分とは思えない。それに、さっきアキは何て言っていた？

「…まさか」

気付いた恵はバツと布団を跳ね上げる。そこにいたのは一人の少年、そして…

「ふにゃ…ユウくん…」

何やら幸せそうな顔で眠る一人の少女がいた。それを見て恵は眉をひそめる。

「…ゆま、何をしているの？」

「ふえ…あ、メグちゃんおはようございますう」

肩を揺さぶると、ゆまと呼ばれた少女は眠そうな目を擦りながら焦点の合っていない視線を恵に向けた。

「…ユウを起こしに行ったはず。なにをやってるの？」

「あー、それはユウくんを起こしにきたら…なんだか私も眠くなつてしまつて…。」

こう、つられるように温かいユウくんの布団に入っちゃつてましたあ」

「……」

「い、いはいれすメグひゃん！」

恵が無言でバカなことをほざく幼馴染の頬を引っ張ると、ゆまは涙目になりながらばんぱんと恵の手を叩く。

どうやらギブアップということらしいが、無慈悲にも恵はそのまま捻りを加えようとしたときだった。

「ううん…」

眠っていた少年がゆっくりと目を覚ます。

無駄なものなど無いように引き締まった身体に、ちょっとワイルドな感じの茶色い髪。

そんな外見にも関わらず、いかつい印象を与えない柔和そうな顔立ち。

「あ、おはよう。 ゆま、恵」

笑顔と共に少年が少女たちへ朝の挨拶をする。

この少年こそ、あの英雄不動遊星とその妻アキの間に生まれた一人息子、不動遊輝である。

「おはようございますう、ユウくん」

「おはよう、ユウ：」

少女たちはそんな遊輝に挨拶を返す。

ゆまはニコニコ満面の笑みで。

恵はいつも通りの落ち着いた佇まいに微笑を乗せて。

これが不動家の朝の日常だった。

第00話 不動さんちの日常（後書き）

今回は、デュエル無しの導入のみです。

次回からはデュエルが始まります。

第01話 新人生代表デュエル（前書き）

今回からやつとデュエルシーンがあります。

対戦デッキは、デュエルアカデミアと言えはやつぱりアレ。

第01話 新入生代表デュエル

Side 遊輝

校長先生の長い話を、僕は直立不動で聞いていた。

周りには僕と同じ制服の生徒たちが、同じように直立不動で壇上に注目している。

ここはデュエルアカデミア・ネオドミノシティ校。

その高等部の入学式の真っ最中だ。

僕は今日からこの学校に入学になる。

「うう…」

長い話と緊張で喉はカラカラだ。

というのも、僕はこの入学式で『あること』をすることになっている。

それを思うと、緊張で胃が痛い。

（早く終わってくれないかなあ…）

そんなことを思いながら、僕は周囲に視線を巡らせるとゆまと恵の姿を見つけた。

ゆまからは寝る一步手前みたいな雰囲気がある。確実に話が左から右に抜けていってるんだろうなあ。

逆に恵は直立不動で、真面目に話を聞いているみたいだ。

ただ、いつも通り表情が変わらないからどう思ってるのか分からないけど。

そんな風に思っていると、長かった校長先生の話は終わったみたいだ。

進行役の先生の声が響く。

「では式の最後に、新入生代表によるデュエルを行う！」

…来た、出番だ。

「新入生代表、不動遊輝^{ふどう ゆうき}！！」

「はいっ！！」

緊張のしすぎか、返事の声が少し震えた。

ともすれば右足と右手が一緒に前に出そうな、ぎこちない足取りで僕は壇上へと向かって行く。

『あれが噂の…？』

『不動遊星の息子…』

微かに聞こえてくるヒソヒソ話が、さらに僕の心を重くする。

そんな中ちらりとゆまと恵を見ると、ゆまは小さくガッツポーズ、恵は小さく頷いて僕を送り出してくれた。

…おかげで少しだけ緊張がほぐれた。二人には感謝だ。

壇上では、デュエルアカデミアの実技担当教官が待っていた。

「新入生代表、不動遊輝！」

「は、はい」

改めて校長に呼ばれた名前に僕が答える。

「これより入学式の代表デュエルを行う！ 新入生代表として恥ずかしいくないデュエルを行うように！！」

校長の宣言が終わり、実技担当教官が僕に話しかけてきた。

「君のことは聞いているよ、不動遊輝くん。君とはぜひデュエルしてみたかった。」

お手柔らかに頼むよ」

「はい！ おねがいします！」

そう僕が返すと実技担当教官は笑顔でデュエルディスクを構えた。それに合わせ、僕も構える。

「デュエル！！」

遊輝↓LP4000
教官↓LP4000

デュエルは教官の先攻で始まった。

「先行は私が貫う！ ドロー！！ 私は《グリーン・ガジェット》を攻撃表示で召喚！」

《グリーン・ガジェット》 星4／地属性／機械族／攻1400／
守 600

「その効果によって私はデッキから《レッド・ガジェット》を手札に加える。さらに手札からフィールド魔法《ギア・タウン歯車街》を発動！」

《ギア・タウン歯車街》：アンテイク・ギア系モンスターをサポートするフィールド魔法。

となれば教官のデッキはアンテイク・ギアデッキなのかな？

「私のデッキはこのアカデミア教員に伝わる由緒正しきデッキだ！さらに手札からフィールド魔法《ギア・タウン歯車街》を発動！」

その言葉に会場がざわつく。

同じカードを使ってフィールドを張りなおしたのだから普通は無駄な行動だ。

ただ《ギア・タウン歯車街》とアンテイク・ギアデッキに関してはこれは無駄でも何でもない。

「《ギア・タウン歯車街》が破壊されたことによって私はデッキから『アンテイク・ギア』と名のついたモンスター1体を特殊召喚する事ができる！」

現れる！ 《アンテイク・ギアガジェルドラゴン古代の機械巨竜》！！」

《アンテイク・ギアガジェルドラゴン古代の機械巨竜》 星8／地属性／機械族／攻3000／守2000

いきなりの最上級モンスターの出現に会場がざわめく。

「まだまだ！ 再び《ギア・タウン歯車街》を発動！！ 二体目の《アンティーク・ギアガジェルドラゴン古代の機械巨竜》を特殊召喚！！」

私は二枚のカードを伏せる！ ターンエンドだ！！」

「「おお！！」」

1ターン目にして最上級モンスター2体を呼び出した教官の戦術に会場から歓声が上がった。

「どうだ遊輝くん、これが私の全力だ！ さあ、全力でかかってきたまえ！！」

「はい！ 僕のターン、ドロー！！」

ドローしたカードと手札…。

あ、これって…。

「僕は手札から魔法カード《大嵐》を発動！」

発動した《大嵐》の効果で、《ギア・タウン歯車街》と二枚の伏せカードが砕け散った。

「《ギア・タウン歯車街》が破壊されたことによって私はデッキから『アンティーク・ギア』と名のついたモンスター1体を特殊召喚する！
アンティーク・ギアガジェルドラゴン現れろ！ 《古代の機械巨竜》！！！」

3体目の《アンティーク・ギアガジェルドラゴン古代の機械巨竜》が召喚されるが、僕にとってはどうでもいい。

「僕は魔法カード《おろかな埋葬》を発動！ デッキから《ゾンビキャリア》を墓地に送る！

そして手札の《ジャンク・シンクロン》を通常召喚！」

現れる《ジャンク・シンクロン》。

父さんとずっと一緒に戦ってきた相棒であり、僕にとってもかけがえのない相棒。

僕のデッキを支える頼もしい仲間だ。

「《ジャンク・シンクロン》の効果発動。墓地の《ゾンビキャリア》を復活させます。

同時に、墓地からの特殊召喚が成功した場合、《ドッペル・ウォリアー》を手札から特殊召喚！」

僕の間には一気にチューナーを含む3体のモンスターが出そろった。

「チューナー…シンクロ召喚か！！」

「行きます！ レベル2の《ドッペル・ウォリアー》にレベル3《ジャンク・シンクロン》をチューニング！」

☆2+☆3=☆5

光の中で、モンスターの姿が輝く光へと変わっていく。

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！シンクロ召喚！

いでよ、《ジャンク・ウォリアー》！」

《ジャンク・ウォリアー》 星5／闇属性／戦士族／攻2300／
守1300

現れたのは鋼鉄の拳を持った戦士。僕や父さんが信頼をよせる歴戦の戦士だ。

「だが、攻撃力は2300。それでは《古代の機械巨竜》は倒せまい！」

それは分かっている。

でも、《ジャンク・ウォリアー》の効果なら！

「《ジャンク・ウォリアー》の効果発動！

《ジャンク・ウォリアー》のシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする。

さらに《ドッペル・ウォリアー》の効果発動！

《ドッペル・ウォリアー》がシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた場合、自分フィールド上に「ドッペル・トークン」2体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

《ドッペル・ウォリアー》、《ジャンク・ウォリアー》の順で効果は発動します！」

場に現れる2体のドッペル・トークン。

ドッペル・トークン 戦士族・闇・星1・攻／守400

「パワー・オブ・フェローズ！」

そして2体のドッペル・トークンとゾンビキャリアから光が《ジャンク・ウォリアー》へと吸収されていく。

《ジャンク・ウォリアー》 攻撃力2300↓3500

「《古代の機械巨竜》の攻撃力を超えた！」

教官は驚いた様な声を上げるけど、まだ終わりじゃない。

「さらに場の2体のドッペル・トークンにレベル2 《ゾンビキャリア》をチューニング！」

来い《アームズ・エイド》！！」

☆1+☆1+☆2=☆4

《アームズ・エイド》 星4／光属性／機械族／攻1800／守1200

「《アームズ・エイド》の効果発動！」

装備カード扱いとしてモンスターに装備、装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップ。

《アームズ・エイド》を《ジャンク・ウォリアー》に装備！！」

《ジャンク・ウォリアー》 攻撃力3500↓4500

「こ、攻撃力4500だと!?!」

「行け、《ジャンク・ウォリアー》! 《古代の機械巨竜》に攻撃
!!

パワーギア・フィスト!!」

(ハァ!!)

雄叫びと共に飛びかかった《ジャンク・ウォリアー》が、《古代の機械巨竜》に拳を叩きつけた。

機械の身体にひびが入り、《古代の機械巨竜》が砕け散る。

「くっ!?!」

教官

LP4000↓2500

「さらに《アームズ・エイド》の効果発動!

装備モンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与えます!」

「何!?!」

「《古代の機械巨竜》の攻撃力は3000。 3000ダメージを受けてもらいます!」

「う、うわあああ!!」

教官

LP2500↓0

デュエル終わると、入学式場は大歓声に包まれていた。
とはいえ、実は僕の方が驚いていたりする。

手札が良くて一撃必殺、1ターンキルしてしまった…。
心なしか落ち込んでる教官を見ると、ちょっと悪いことしたかなと心の片隅で思う。

「君は強いな。 私の完敗だ」

「いえ、運が良かっただけです」

「いや、君の実力だよ。

さすが、あの不動遊星の息子だ」

「…」

教官の賞賛の言葉に僕は、『ああ、またか』…と思ってしまった。
この人は僕とデュエルしたんじゃない。

『英雄・不動遊星の息子』とデュエルしたのだ。
いつものこととはいえ…嫌な気分になってしまう。

僕はひそめた眉を気付かれないようにしながら、ゆっくりと席へ戻っていく。

『さすが不動遊星の息子』

『すっごーい、デュエルの腕も親譲りなのね』

「……」

そこかしこで囁かれるヒソヒソ話。

さっきまでのデュエルの興奮は僕の中には無く、僕は努めて無表情で席に戻った。

つつがなく式が終わりすでに解散の時刻になった頃、僕は校庭側の芝生に寝転がってゆまと恵のことを待っていた。

さっきまで父さんや母さんと記念写真を撮ったけど、どうやら父さんたちは他の人たちと話をするらしく、帰りは僕たちだけだ。しばらくするとゆまと恵が手を振りながらやってきた。

「おまたせです、ユウくん」

「おまたせ、ユウ……」

「ううん、全然待ってないよ」

そう言って立ち上がろうとしたら、二人が僕の顔をじっと見つめてきた。

「な、何？ 何か僕の顔についてる？」

「ユウくん、なんだか『満足できねえぜ！』って顔してますです！」

いや、僕は鬼柳おじさんじゃないから。

「…ユウ、さっきのデュエルは楽しめなかった？」

恵の言葉に僕は首を振った。

「とんでもない。あの教官は立派なデュエリストだった。そんな人と、全力を出すデュエル自体には満足してるよ」

「…やっぱり周りが不満？」

そう言って恵は心配そうに、幼馴染の僕にしか分からないくらいほんの少し眉をひそめる。

みると、同じようにゆまも僕を見ていた。

…やっぱりずっと一緒にいた幼馴染だ。すっかり僕の心なんてバレている。

「いつものことだけど…僕の名前は不動遊輝であって、『不動遊星の息子』とか『英雄の子』とか言う名前じゃないんだけどね。なんで…みんな分からないんだろうね」

それは僕の物心ついたところからの悩みだった。

僕は『英雄・不動遊星』の一人息子だ。

父さんが立派なのはよく知っているし、僕だってそんな父さんを尊敬し憧れてる。

でも、誰もかれもが父さんを通してしか僕を見てくれないということには忸怩たる思いがあるのも隠せない事実だった。

そんな風に考えていたら、僕はいつの間にか手を取られていた。

右手はゆまに、左手は恵に。

そして二人は僕に、優しく語りかけるように言う。

「大丈夫、ユウくんはユウくんです！」

「ユウは私たちの幼馴染、不動遊輝。それ以外の誰かでは決していない…」

「ゆま…恵…」

そうだ、この二人はいつだって僕、不動遊輝を見てくれる。

他の誰でもないこの僕を…。

そう思うと、スウッと胸のつかえが取れていくように軽くなる。

「帰ろっか？」

「はい！」

「うん…」

二人は頷くと、僕たちは連れだって家路へとつく。

こうして、僕のデュエルアカデミアへの入学初日は過ぎていった。

不安はあるけれど、この二人と一緒になら大丈夫…そんな風に、僕は

思った。

これからの騒がしい日常と、非日常のことなど夢にも思わずに…。

…To be continued

ゆま「ゆまと！」

恵「恵の…」

ゆま・恵「今回の最強カード」

ゆま「ここでは今回もっとも活躍したカードを紹介するんです！」

恵「今回のカードは…これ」

《ジャンク・ウォリアー／Junk Warrior》

シンクロ・効果モンスター

星5／闇属性／戦士族／攻2300／守1300

「ジャンク・シンクロン」＋チューナー以外のモンスター1体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、
このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在する
レベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする。

ゆま「始まりのシンクロカードであり、遊星おじさんの相棒ですね
！」

恵「《ジャンク・シンクロン》が使いやすいため、とても出やすい
…。

特にユウのような『ジャンクドッペル』に属するデッキだ
と、今回のように攻撃力3100になることが多い。

3100…この数値は重要」

ゆま「最上級モンスターの攻撃力基準値3000を100上回って
ます。

攻撃力3000のモンスターを一方的に戦闘破壊でき
るのは凄いですう！」

恵「効果なしでも《A・O・Jカタストル》を一方的に倒せるのも
いい。

もつとも、それだけなら《TGハイパー・ライブラリアン
《の方がいいけど…」

ゆま「今回はここまでです！」

恵「また次回…」

第01話 新人生代表デュエル（後書き）

ごめんなさい、ワンキルです。

LP4000の戦いは難しい…今後もっと精進が必要ですね…。

第02話 結成、ライディングデュエル同好会（前書き）

今回の対戦デッキは、プロなデッキ。

自分で作って、まわすのが難しくてびっくりしました。

第02話 結成、ライディングデュエル同好会

S i d e 遊輝

僕は今、アカデミア内のデュエルスペースに立っている。

「さあ、来な。 ボウズ！」

そして目の前に立っているのは、このアカデミアの教師であり元プロデュエリストのケイトⅡモヘア先生だ。

「…どうしてこうなるの？」

僕は小さくため息をついた。

事の次第は数時間前のことだ。

入学してからすでに1週間、学園生活にも慣れ始めた僕たち3人はかねてからの希望を叶えようとしていた。

それは部活動、ライディングデュエルの部活だ。

父さんの影響もあって、僕はライディングデュエルに興味があった。父さんが戦ったスピードの世界、いつかそこに飛び込んでみたい…そんな思いを僕は持っていた。

ゆまや恵もライディングデュエルには興味があるらしい。

そこがかねてから高校に入ったら一緒にライディングデュエルをやろうと約束をしていたのだ。

そのための準備は万全。

僕と恵はすでにライセンス取得済で、ゆまは勉強中。

僕はこの間の誕生日に父さんからDホイールを貰ったし、恵は僕と一緒にジャンクからDホイールを一台完成させた。

ゆまが一步出遅れてる感じだけど、ゆまのDホイールだって今ジャンク品をかき集めて作ってる真っ最中。

休日は三人で教習所で練習用のDホイールを動かし、特訓にも余念がない。

そう、全ては万全のはずだったんだけど…。

「…ない。ライディングデュエル部が無くなってる!?!」

僕は愕然としながら、部活動の案内をまじまじ見つめる。

でも、どこをどう見てもライディングデュエル部は見つからない。

おかしい、確か3年前の学園祭の時にはあったはず。

その時のライディングデュエル部の公開デュエルを3人で見たから間違い無い。

「部員さんが居なくなっって廃部になっちゃったんでしょか?」

「うーん…」

ゆまの言葉に僕は首をひねる。

ライディングデュエルは世界的に人気があるんだし、入部希望者が少ないとは思えないんだけど…。

「どちらにしろ、無いことは事実。ユウ、どうするの…?」

「そんなこと言われたって、無いものはどうしようもないよ…」

恵の言葉に、僕は肩を落とした。

学外のライディングデュエルチームに入るというのは正直避けたい。以前、僕の『不動遊星の息子』というネームバリューを欲しがったチームに勧誘され、手ひどい目にあっているからだ。そうなれば部活が一番なんだけど…。

「はあ…」

何だか学園生活の第一歩にしかけられた奈落の落とし穴にはまった感じだ。

すると、ゆまが突然大きな声を出した。

「そうです！ 逆に考えるんです！ 無くたっていいさって考えるんです！」

「…ゆまが何をいつてるのか僕にはわからないよ」

「えーと、とどのつまりですね…別に無いなら無いで、作っちゃえばいいんです！！」

びしりと指さしながらゆまが言う。

どうでもいいことだけど、人を指さすのはあんまりお行儀がいいことじゃないよ、ゆま。

「そんな無茶苦茶な…」

「…待って。 ゆまの意見、あながち間違いではない…」

恵は何やら考えながら、部活動の案内を見はじめる。

「…やはり。部としては無理でも、同好会としてなら立ち上げは可能…」

「本当!？」

僕の言葉に、恵はコクンと頷く。

「新規同好会立ち上げの条件は、希望生徒3名以上。そして…顧問となる教師の存在…」

「顧問の先生か…」

この学校、部活動は結構盛んだから顧問になってない先生なんているのかな…？

すると、隣でPDAを操作していた恵が言ってくる。

「該当者が一人だけいる…。

実技担当ケイトⅡモヘア先生…。」

「そうと分かれば全速前進、ですう!!」

言うが早いのか、ゆまは僕の手を引いて職員室へと走り始めた。

「はぁ？ アタイに顧問になってくれって？」

「はい：」

うう：なんか睨むみたいに僕のこと見てくるよ。
僕なんかやったかな？

「オマエら、ライディングデュエル同好会を作ろうって？」

「はい！ 私たちライディングデュエルをしたいんですう！！」

ゆまの答えに、ケイト先生は何やら頭をぽりぽりと掻きながら思案顔だ。

やがてケイト先生が口を開く。

「それじゃ、ボウズ。 アタイとデュエルだ。
お前がアタイに勝ったら、顧問になってやるよ。 それでどうだ
い？」

「って僕ですか？」

「オマエ以外に誰がいるってんだ？
それに：デュエルに強くなきゃ、ここでライディングデュエルな
んて出来はしないよ」

え？

ケイト先生、いましんみりとした雰囲気で妙なことを言ったよ。
強くないとライディングデュエルが出来ないって、一体…？

「とにかく、だ！ 顧問になって欲しけりやアタイにデュエルで勝つことだね！！」

そして冒頭へと戻ると言う訳だ。

「「デュエル！！」」

遊輝↓LP4000

ケイト↓LP4000

先攻は僕だ。

「僕のターン、ドロー。 モンスターを裏守備表示で召喚、伏せカードを1枚伏せてターンエンド」

「アタイのターン、ドロー！ まず手札から魔法発動。サイクロン 伏せカードを破壊する！」

「ミラーフォースが…」

「アタイは《俊足のギラザウルス》を召喚」

《俊足のギラザウルス》 星3／地属性／恐竜族／攻1400／
守 400

「さらにアタイは《俊足のギラザウルス》を手札から特殊召喚。
こいつを特殊召喚する場合、相手は墓地に存在するモンスター1
体を選択して特殊召喚する事ができる。

でも今あんたの墓地はゼロ。復活はできないよ」

実質ノーコストで特殊召喚をされてしまった。

「バトルだ。 《俊足のギラザウルス》で攻撃」

「このカードは《ライトロード・ハンター ライコウ》。

効果によって僕は攻撃前の《俊足のギラザウルス》を破壊し、自
分のデッキの上からカードを3枚墓地へ送ります」

落ちたカードは《ダーク・アームド・ドラゴン》と《ライトロード・
マジシャン ライラ》に《グローアップ・バルブ》。

《グローアップ・バルブ》が落ちたのは嬉しい。

「ちい、アタイはカードを3枚伏せてターンエンドだ」

「僕のターン、ドロー！」

ケイト先生の場合は攻撃表示の《俊足のギラザウルス》1枚に伏せカ
ードは3枚：守りとしては鉄壁だ。

僕の手札に除去系カードは無い。

除去系カードが来るまで待つか：いや、ケイト先生の手札はゼロ。
ここは臆せず攻めよう！

「手札から魔法発動、《死者蘇生》。墓地の《ライトロード・マジシャン ライラ》を特殊召喚」

《ライトロード・マジシャン ライラ》 星4／光属性／魔法使い
族／攻1700／守 200

「さらにデッキトップのカードを一枚墓地へ送ることで墓地の《グローアップ・バルブ》を特殊召喚」

《グローアップ・バルブ》 星1／地属性／植物族／攻 1000／
守 100

墓地に送られたのは2枚目の《ライトロード・ハンター ライコウ》。
よし、これで父さんの友達のカードが召喚できる。

「レベル4の《ライトロード・マジシャン ライラ》に、レベル1の《グローアップ・バルブ》をチューニング！」

☆4＋☆1＝☆5

「集いし英知が、未来へ続く懸け橋となる！ 光さす道となれ！
シンクロ召喚、《TG ハイパー・ライブラリアン》！！」

《TG ハイパー・ライブラリアン》 星5／闇属性／魔法使い族／
攻2400／守1800

「おっと、トラップ発動！ 《奈落の落とし穴》！」

ああ、《TG ハイパー・ライブラリアン》が…やっぱりそんなに甘くはないよね。

でもこれで場の伏せカードは2枚、臆せず攻める。

「手札から《ジャンク・シンクロン》を通常召喚。

《ジャンク・シンクロン》の効果発動。墓地の《ライトロード・ハンター ライコウ》を復活させます。

レベル2の《ライトロード・ハンター ライコウ》にレベル3 《ジャンク・シンクロン》をチューニング！」

☆2＋☆3＝☆5

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！ シンクロ召喚！

いでよ、《ジャンク・ウォリアー》！」

《ジャンク・ウォリアー》 星5／闇属性／戦士族／攻2300／
守1300

「バトル！ 《ジャンク・ウォリアー》で《俊足のギラザウルス》

を攻撃！」

「くっ！」

ケイト

LP 4000↓3100

攻撃が通った？

てっきり伏せカードはミラーフォースか何かだろうと踏んでいただけど…。

攻撃反応型のトラップじゃないとしたら、あのカードは一体？

「僕は一枚カードを伏せて、ターンエンド」

「おっとそっちのエンドフェイズ時に伏せカードを発動させてもらうよ。速攻魔法《終焉の焰》！」

ケイト先生の場合に黒い焰のトークンが2体現れた。

あのトークンは呼び出したターンはリリース出来ない。

だが今のタイミングで発動なら、次のケイト先生のターンリリース要員として活用できる。

なら…次のターン最上級レベルのモンスターが出せる。

でも、大丈夫。

今伏せたカードは《次元幽閉》。どんなモンスターでも次元の彼方に吹き飛ばしてやれる。

《ジャンク・ウォリアー》だっているんだ、そう簡単には貫けないはず。

それにケイト先生の手札はゼロ。そうそう都合よく切り札を引けるとは…。

「アタイのターン！ ふっ…」

カードをドロ―した先生が、笑った。

ということは切り札を引いたんだろうか。

「やっぱり勝利の運命はいつだってアタイの手の中に来るもんだね！
アタイは手札から《E・HERO エアーマン》を召喚！

効果によりアタイはデッキから「HERO」と名のついたモンス
ター1体を手札に加える。

アタイが手札に加えるのは…《D―HERO BLOOD》！
」

S i d e o u t

38

S i d e ゆま

「アタイが手札に加えるのは…《D―HERO BLOOD》！
」

はう、あのカードは！

昔、おじいちゃんから聞いたことがあります！

おじいちゃんの友達の大事なエースカードで、その友達が大きなデュエル大会で入賞した際に僅か数枚だけ量産されたとんでもないレアカードですう！
あんなレアカードがケイト先生のエースだなんて…。

「あれは不味い…」

メグちゃんが隣で渋い顔で呟きます。

私も同じ気持ちです。だってあのカードの効果は強力なんだから。

「場の黒焰トークン2体と《E・HERO エアーマン》の合計3体をリリースし、手札から《D-HERO Blood》を特殊召喚！

来な、Blood！！」

《D-HERO Blood》 星8／闇属性／戦士族／攻19
00／守 600

（オオオオオオオ）

悪魔のような羽をもったHEROがユウくんに威嚇するように雄叫びを上げます。

「《D-HERO Blood》の効果発動！

相手モンスター1体を指定してこのカードに装備し、装備したモンスターの攻撃力の半分の数値分アップする。

《ジャンク・ウォリアー》を吸収、クラプティ・ブラッド！」

ユウくんの《ジャンク・ウォリアー》が《D-HERO Blood》の羽の中に吸収されちゃいました。

蠢く羽が…うう…なんだか気持ち悪いですう…。

《D—HERO B l o o —D》 攻撃力1900↓3050

「バトル！ B l o o —Dでダイレクトアタック！！
ブラッディ・フィアーズ！！」

「トラップ発動！ 《次元幽閉》！！」

B l o o —Dの前に次元の割れ目が現れて、B l o o —Dを吸い込もうとします。

さすがユウくん、しっかり防御のカードを伏せてたんですね。そう私がホツとしたその時です。

「させるかい！ カウンタートラップ発動、《神の宣告》！！」

ケイト

LP3100↓1550

B l o o —Dを吸い込もうとしてた次元の割れ目がパリンと言う音とともに割れちゃいました。

これでユウくんを守るものは何ありません。

「うわああ！！」

遊輝

LP4000↓950

大きくライフを削られて仰け反るユウくん。

「く…でも、この瞬間僕は手札から《冥府の使者ゴーズ》を特殊召喚する」

《冥府の使者ゴーズ》 星7／闇属性／悪魔族／攻2700／守2500

ユウくんはこの状況でも強力なモンスターを呼び出しました。

でも、本来なら一緒に現れるはずの「冥府の使者カイエントークン」は出てきません。

これがBlooーDのもう一つ的能力、存在するだけで相手のモンスター効果を無効にする能力です。

似たような効果に罫の《スキルドレイン》があるけど、BlooーDは相手の効果だけを無効にすることができます。

つまりユウくんはモンスター効果が使えず、ケイト先生はモンスター効果が使いたい放題なんです。

「不味い…ユウのデッキはモンスター効果に多くを依存している。それが使えないとなると、BlooーD1体に場を制圧されかねない…」

メグちゃんが言う通りだ。

「ユウくん…」

私は戦うユウくんの勝利を祈ることしかできないです…。

S i d e o u t

S i d e 遊輝

マズい。本当にマズい。
モンスター効果封じとなれば、トラップや魔法で戦うしかない。
でも今の僕の手札にはそれは無い。いるのはモンスターカードのみだ。

このままだと負ける。

負けたら…3人で一緒にライディングデュエルをしようって約束が守れない!?

「僕のターン!」

カードたちよ、僕に勝利のカードを!

「ドロオオー!!」

引いたカードをゆっくりと見る。それは…。

「行きます、ケイト先生!!」

「来な、ボウズ! アタイの勝利の運命、打ち砕いて自分の力を見せてみる!!」

それぐらい出来なきゃ、認めてはやれないよ!」

なら、このカードで認めてもらいます!

「僕は魔法カード《禁じられた聖杯》を発動! 対象は: 《D—HERO BLOOD》!!!」

《禁じられた聖杯》はエンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力を400ポイントアップし、効果を無効化できる。

これでエンドフェイズまで僕もモンスター効果を使えるようになった。

それに、効果によって装備されていた僕の《ジャンク・ウォリアー》は破壊され攻撃力が落ちる。

《D—HERO BLOOD》 攻撃力3050↓2300

「くっ…効果封じかい。

でも、それだけじゃアタイのBLOODをぶち抜いてライフをゼロにはできないよ!」

確かにその通り、BLOODはゴーズで倒せる範囲内に入ったがそれでもライフは1000以上残る。

通常召喚でそれ以上の攻撃力のモンスターを出せればそれでいいが、生憎そんなモンスターは手札にいない。

なら、BLOODを倒すだけか?

答えは否!

ケイト先生は強力なデュエリストだ。

1ターンでも与えたらそれこそまた起死回生の一手を打ちかねない。このターンで、間違い無く決着をつける!!

「僕は手札から《スポーア》を召喚！」

《スポーア》 星1／風属性／植物族／攻 400／守 800

「レベル7の《冥府の使者ゴーズ》にレベル1《スポーア》をチュ
ーニング！」

☆7＋☆1＝☆8

「集いし鋼が、新たな命となって動き出す！ 光さす道となれ！！
シンクロ召喚、生誕せよ、《スクラップ・ドラゴン》！！！」

《スクラップ・ドラゴン》 星8／地属性／ドラゴン族／攻280
0／守2000

そこに現れたのはガラクタを継ぎ合わせた龍だった。

父さんや母さんのドラゴンのような綺麗さはない。

でも：僕はこいつが大好きだった。大事な僕の相棒の1枚だ。

「墓地の《スポーア》の効果を発動、《グローアップ・バルブ》を
除外し《スポーア》のレベルをその分だけ上げて特殊召喚。

そして《スクラップ・ドラゴン》の効果発動！1ターンに1度、
自分及び相手フィールド上に存在するカードを1枚ずつ選択して互
いに破壊する事ができる！

選択するのは《スポーア》もちろん《D－HERO BLOO
－D》だ！

ダストブレイズ！」

《スクラップ・ドラゴン》からくず鉄混じりのブレスに巻き込まれ、
《スポーア》と《D－HERO BLOO－D》が砕け散る。

これでケイト先生を守るものは何もない！

「《スクラップ・ドラゴン》でダイレクトアタック！ スクラップ
デスバーナー！！」

《スクラップ・ドラゴン》からブレスが吐き出される。
放っている《スクラップ・ドラゴン》の方が吹き飛んでしまうんじゃないかと思えるほどの勢いだ。

「うわああああ！！」

ケイト

LP1550↓0

「アタイの負けだ。 約束通り、アンタたちのライディングデュエル同好会の顧問になってやるよ」

それから一週間後、僕たちは部室棟の一番隅に看板をたてかけていた。

『ライディングデュエル同好会』と書かれたその看板に嬉しさがこみ上げる。

本来、同好会はまともに部室など与えられないらしいけど、ケイト

先生が色々掛け合ってくれたそうだ。

ただ、そのことでお礼をした時にケイト先生は不思議なことを言っていたのを覚えている。

「ボウズがデュエルで勝ったんだから、礼はいいさ。

アタイも楽しいデュエルが出来たしね。

全く、こういうのがあるから教師ってのはプロより面白い。

それに…顧問は『2度目』だしね」

『2度目』って、一体何が2度目なんだろう？

それに『強くないとライディングデュエルが出来ない』って言っていたのは一体…？

色々考えることはあるけど、僕たちは目標の第一歩を踏み出したのだった。

…To be continued

ゆま「ゆまと！」

恵「恵の…」

ゆま・恵「今回の最強カード」

ゆま「今回は色んな強力カードが出てきました！ 私、興奮しっぱなしですよ！！」

恵「ゆま、落ち着いて。 今回のカードは…これ」

《スクラップ・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター

星8／地属性／ドラゴン族／攻2800／守2000

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度、自分及び相手フィールド上に存在するカードを1枚ずつ選択して発動する事ができる。

選択したカードを破壊する。

このカードが相手によって破壊され墓地へ送られた時、シンクロモンスター以外の自分の墓地に存在する

「スクラップ」と名のついたモンスター1体を選択して特殊召喚する。

ゆま「作者の好きなカードで、ユウくんの頼もしい相棒、切り札の1体ですね！」

恵「《スターダスト・ドラゴン》と並んでレベル8シンクロの代表格に上げられるこのカード…。とても強力…」

ゆま「攻撃力も頼もしい2800、効果は案外コスト高いように見えるけど各種トークンや《レベル・ステイラー》などの蘇生可能モンスター、

さらにシンクロして場に残った 《リビングデッドの呼び声

《などで効果発動には案外困らないです!》

恵「単純に手札のカードが単体除去に変換できると考えると、その優秀さが分かる…」

ゆま「後半の効果は専用のスクラップデッキを組んでいないとあんまり発動しないです。

これで《ギガンテック・ファイター》さんみたいに『シンクロモンスター以外』の一言が無ければ最高だったんですが…」

恵「ゆま、それはただの壊れカードになる…」

ゆま「今回はここまでです!」

恵「また次回…」

第02話 結成、ライディングデュエル同好会（後書き）

友人に指摘されましたが、一部プレイングおかしいですね。
ライラ出したとき、効果使えばもっと簡単だったと後で気付きました。

2011／11／9

デュエルでの間違いを訂正。

Bloodのあたりで勘違いをしていました。

第03話 風の中にある太陽（前書き）

今回は試験的な内容のデュエルですが…先に謝ります、ワンキルです。

本当にあのカードは鬼だ…。

第03話 風の中にある太陽

Side ゆま

今日は休日、私はユウくんのところに行ってみるとユウくんはガレージでDホイールを組み立ててる真っ最中でした。

「こんにちわです、ユウくん」

「ああ、ゆま」

顔を上げたユウくん。少し疲れたように見えるところをみるとまた夜更かししたんですね。

それでも心底楽しそうな笑顔を見せてくれて、ドキッとしちゃいます。

「また夜更かししたですね。駄目ですよ、ユウくん」

「あはは…ちょっと作業に熱が入っちゃって」

ユウくんの頬についた機械油の汚れをハンカチで拭いてあげながら言うと、ユウくんは照れたように笑いました。

「ゆまは何しに？」

「私も作業見たいなって思って来ました」

「そうだね。なんだって…ゆまのDホイールなんだし」

そう、今ユウくんが組み立ててくれるのは私のDホイールです。私一人Dホイールがないって話をしてたら、ユウくんが手作りしてくれることになったんです。

アルバイトで、こつこつためたお小遣いも大盤振る舞い。でも普通のDホイールと比べたら格安で…本当にユウくんには感謝です！

「でも、これ以上は作業はできないよ」

「？ どうしたんですか？」

「必要なパーツがないんだ。 だからこれからサテライト地区のジャンク市まで買い出しに行こうかと思って…」

「あ、それなら私も行きたいですよ！」

こうして、私はユウくんと一緒に出かけることになりました。

エンジンをスタートさせたDホイール——ユウくんの誕生日に遊星おじさんから贈られたDホイールと一緒に乗り込みます。

これってちょっとしたデートですよ、うれしいです！

ジャンク市場での買い物を済ませ、遅めの昼食をとハイウェイのサービスエリアへ入った時でした。

「これでゆまのDホイールも完成に近付くね」

「はい！ うれしいです！！」

今日買ってきたパーツで私のDホイールがまた完成に近づきました。ユウくんとメグちゃんと一緒にDホイールで走るのが今から楽しみです。

今思えば…そんな風に浮かれていたのが悪かったんです。

ドンッ

「きゃっ!?!」

浮かれた私は誰かにぶつかって尻もちをついちゃいました。

「いたた…」

「おいっ！」

「ひう!？」

腰をさすりながら立ち上がろうとすると、怖い顔の2人組に睨まれてしまいました。

見ると手にしていた飲み物がこぼれて、怖い顔の人にかかっちゃってます。

「てめえのせいで服がよごれたじゃねえか、どうしてくれるんだよ」

「ご、ごめんなさいですう！」

慌てて立ち上がった私は怖い顔の人たちに謝ります。

「あの、汚れた服はクリーニングしますから…」

「ああ、足りねえよ。それじゃ…」

そう言ってニヤリと笑うと、怖い顔の人たちは私に手を伸ばしてきました。

その時です。

スッ

「ユウくん！」

ユウくんが私を庇うように間に割り込んできました。

「なんだてめえは」

「この子の友達です。あ、ゆまが服を汚しちゃったことは謝ります。」

服もしっかり洗ってお返ししますから…」

「だからそれじゃ足りねえって言ってるんだよ」

「じゃあ、何をすればいいんですか？」

「なあに、その嬢ちゃんにちよつと付き合ってもらえればいいんだよ」

そう言ってニヤニヤ笑いながら、すごく嫌な視線で私を見ます。

「あう…」

その粘つくような視線から逃げるように、私はユウくんの背中に隠れちゃいました。

そんな私に、ユウくんは囁きます。

（大丈夫だよ）

そのたった一言が、怖くて震えそうだった心を支えてくれました。

「さあ、わかったらとつとその嬢ちゃんをこっちに渡しな！」

「嫌だ、っていったらどうなります？」

「なんだと？」

「確かに不注意で服を汚したのはゆまですが、それでゆまを連れていく理由にはなりません。

この行為、下手をしなくても脅迫ですよ」

「…おい、小僧。女の前だからって見栄張ってんじゃねえぞ！」

今にも飛びかかって来そうな雰囲気怖い人たちに、ユウくんはデュエルディスクを構えました。

「おい…デュエルしろよ」

「「なにい？」」

「あなたたちもDホイラーなんですよ？」

ならデュエルで決めましょう。僕が勝ったら、僕たちの謝罪を受け入れて服のクリーニングで許して下さい」

「あはは、おもしれえ！ならアンティはお前のデッキとその女だ！」

ユウくんが私に振り返りました。

ユウくんは私は頷きます。

私は…ユウくんのことを信じます！

「…わかりました」

「じゃあ、ルールはバトルロイヤル形式。俺たちは二人で行かせ

てもらうぜ!」

「…いいでしょう。そのかわり、先攻は貰います」

ルール

- ・LPは全員4000。
- ・場、墓地、除外ゾーンはお互いに独立。干渉しない。
- ・全員1ターン目は攻撃できない。
- ・順番は遊輝↓不良1↓不良2

「「デュエル!!」」

遊輝↓LP4000

不良1↓LP4000

不良2↓LP4000

「僕のターン、ドロー。手札から《光の援軍》を発動。デッキの上からカードを3枚墓地へ送って、手札に《ライトロード・ハンター ライコウ》を加えます。

モンスターを裏守備表示で召喚。

さらに手札から《おろかな埋葬》を発動。デッキから《グロー

アップ・バルブ》を墓地に送りターンエンド」

「俺のターン、ドロー！」

《切り込み隊長》を召喚。そして効果により手札からもう一枚《切り込み隊長》を召喚！

永続魔法《強者の苦痛》発動。カードを一枚伏せてターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー。」

《切り込み隊長》を召喚。そして効果により手札からもう一枚《切り込み隊長》を召喚！

カードを一枚伏せてターンエンドだ」

「うわあ…」

私は思わず呻いてしまいました。

二人とも、《切り込み隊長》によるロック効果を発動しています。これでユウくんはどちらにも攻撃が出来なくなっていました。よしんばロックを碎いても《強者の苦痛》があります。生半可なモンスターでは太刀打ちが出来ません。

そして2枚の伏せカード…まさに鉄壁の布陣です。

私は少しだけ不安になってユウくんの方を見ました。

すると…ユウくんはただ静かに、目の前だけを見つめていました。

そこにいつもの優しい顔はありません。

戦いに臨むデュエリストの顔、私の大好きなユウくんがそこにはいませんでした。

それを見て私は安心していました。

大丈夫、ユウくんは絶対に勝つ。だってあんなに本気になっているユウくんが、一度だって負けたことはないんだから。

「僕のターン、ドロー！」

：僕は手札から《大嵐》を発動します」

《強者の苦痛》と2枚の伏せカードが砕けていきます。

伏せカードは《奈落の落とし穴》と《グラヴィティ・バインド―超重力の網―》でした。

危なかったですう。

すると、ユウくんはニヤリと笑いながらこんなことを言いました。

「悪いけれど…このターンで少なくとも一人は脱落してもらいますよ！」

「なにぃ！」

この言葉には私も驚きました。

未だ《切り込み隊長》のロックは健在の上、二人とも無傷の状態。ここから一気にライフを削りきるなんて…。

そんな私たちの前でユウくんは動き出します。

「手札から《ジャンク・シンクロン》を通常召喚

《ジャンク・シンクロン》の効果発動。墓地の《グローアップ・バルブ》を復活させます。

同時に、墓地からの特殊召喚が成功した場合、《ドッペル・ウォリアー》を手札から特殊召喚！

そして場のモンスターをリバース、《ライトロード・ハンター・ライコウ》の効果発動。

効果によって僕は《切り込み隊長》を破壊し、自分のデッキの上からカードを3枚墓地へ送ります」

これで一人目のロックは崩れました。

「レベル2の《ライトロード・ハンター ライコウ》とレベル2の《ドッペル・ウォリアー》に、レベル1の《グローアップ・バルブ》をチューニング！」

☆2＋☆2＋☆1＝☆5

「集いし英知が、未来へ続く懸け橋となる！ 光さす道となれ！シンクロ召喚、《TGハイパー・ライブラリアン》！！」

《TGハイパー・ライブラリアン》 星5／闇属性／魔法使い族／攻2400／守1800

「《ドッペル・ウォリアー》の効果発動！」

《ドッペル・ウォリアー》がシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた場合、自分フィールド上に「ドッペル・トークン」2体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる」

ユウくんの場合にドッペル・トークンが2体現れた。

「デッキトップのカードを一枚墓地へ送ることで墓地の《グローアップ・バルブ》を特殊召喚」

《グローアップ・バルブ》 星1／地属性／植物族／攻100／守100

「レベル1ドッペル・トークンにレベル1の《グローアップ・バルブ》をチューニング！」

☆1＋☆1＝☆2

「集いし願いが新たな速度の地平へ誘う。光さす道となれ！シンクロ召喚！希望の力、シンクロチューナー、《フォーミュラ・シンクロン》！」

《フォーミュラ・シンクロン》 星2／光属性／機械族／攻 20
0／守1500

「《フォーミュラ・シンクロン》と《TGハイパー・ライブラリアン》の効果によってカードを2枚ドロロー！」

さらにレベル1ドッペル・トークンにレベル3の《ジャンク・シンクロン》をチューニング！来い《アームズ・エイド》！！！」

☆1＋☆1＋☆2＝☆4

《アームズ・エイド》 星4／光属性／機械族／攻1800／守1200

「《TGハイパー・ライブラリアン》の効果によってカードを1枚ドロロー！」

すごい、あっという間にシンクロモンスターを3体も召喚した。
加えて3枚のドローで手札も万全。でもユウくんはまだ止まらない。

「続けてレベル5《TGハイパー・ライブリアン》にレベル2の
《フォーミュラ・シンクロン》をチューニング！」

☆2+☆5=☆7

「集いし鋼が、悪魔となって呪いを降らす。光さす道となれ！シン
クロ召喚！降誕せよ、《スクラップ・デスデーモン》！」

《スクラップ・デスデーモン》 星7/地属性/悪魔族/攻270
0/守1800

「まだまだ！ 手札から魔法カード《ワン・フォー・ワン》を発動。
手札からモンスター1体を墓地へ送って、手札またはデッキから
レベル1モンスター1体を特殊召喚する。

手札の《黄泉ガエル》を墓地に送り、デッキから《スポーア》を
特殊召喚。

レベル7の《スクラップ・デスデーモン》に、レベル1の《スポ
ーア》をチューニング！」

☆7+☆1=☆8

「集いし鋼が、新たな命となって動き出す！ 光さす道となれ！！
シンクロ召喚、生誕せよ、《スクラップ・ドラゴン》！！！」

《スクラップ・ドラゴン》 星8／地属性／ドラゴン族／攻280
0／守2000

「墓地の《スポーア》の効果を発動、《グロリアップ・バルブ》を除外し《スポーア》のレベルをその分だけ上げて特殊召喚。

そして《スクラップ・ドラゴン》の効果発動！1ターンに1度、自分及び相手フィールド上に存在するカードを1枚ずつ選択して互いに破壊する事ができる！

選択するのは《スポーア》と《切り込み隊長》！
ダストブレイズ！」

《スクラップ・ドラゴン》からくず鉄混じりのブレスに巻き込まれ、《スポーア》と《切り込み隊長》が砕け散りました。
やった！ これで二人ともロックが解けた！

「そして…これが最後！」

墓地の闇属性モンスター《ジャンク・シンクロン》と、光属性モンスター《ライトロード・ハンター ライコウ》を除外し、《カオス・ソルジャー》一開闢の使者―《を特殊召喚！》

《カオス・ソルジャー》一開闢の使者― 星8／光属性／戦士族
／攻3000／守2500

「あ、ああ…」

すでに不良の二人は声もありません。私だって同じ心境です。

ユウくんの場合では目まぐるしくモンスターたちが召喚されていき、最終的に《スクラップ・ドラゴン》に《アームズ・エイド》、そして《カオス・ソルジャー》―開闢の使者―と高レベルモンスターが大量に並んでいるんですから。

「《アームズ・エイド》の効果発動！

装備カード扱いとしてモンスターに装備、装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップ。

《アームズ・エイド》を《カオス・ソルジャー》―開闢の使者―《に装備！！》

《カオス・ソルジャー》―開闢の使者― 攻撃力3000↓4000

「こ、攻撃力4000！？」

「バトル！ カオス・ソルジャーで《切り込み隊長》を攻撃！ 開闢双破斬！」

カオス・ソルジャーの剣戟が衝撃波となって《切り込み隊長》を襲いました。

不良1

LP4000↓1200

「さらに《アームズ・エイド》の効果発動！

装備モンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与えます

！
」

「何、それじゃあ！？
」

「残り1200ダメージを受けてもらいます！」

「う、うわあああ！！
」

不良1

LP1200↓0

「そして《カオス・ソルジャー 一開闢の使者》の効果発動。このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、もう1度だけ続けて攻撃を行う事ができる。
つまり…」

「ひい！？
」

ユウくんの視線を感じ、もう一人の不良が後ずさる。

「バトル！ 時空突刃・開闢双破斬！！」

「ぎゃああああ！！
」

不良2

LP4000↓1200↓0

「わ、ワンターン2キル…」

目の前のユウくんの戦いに言葉も出ません。

「ふう…勝ったよ、ゆま」

「ユウくん」

そう言ってユウくんは私にほほ笑みます。それに釣られるように、私はユウくんに駆け寄りました。

ユウくんはゆっくりとデッキとデュエルディスクをしまい2人組に向き合います。

「…約束です。クリーニング代はお支払しますから、どうかそれで許して下さい」

腰を抜かした2人組に、ユウくんはぺこりと頭を下げました。すると、その言葉で2人は我に返ったように飛び起きます。

「ふ、ふざけんな！ あんなのは無効だ！！」

「…でも約束したはずですよ。デュエルで僕が勝てば謝罪を受け入れて終わりにするって」

「知るか、そんなもん無効だ！ 分かったらこっちに来やがれ！」

「!?!」

そう言って私を捕まえようと一人が迫ってきました。
怖くなって私はぎゅっと目を瞑ります。
その時です。

「でりゃ!!」

一瞬のことでした。

私を捕まえようとしていた手をユウくんが掴み、巧みにバランスを崩させて投げ飛ばす：それが流れるようになめらかに、一瞬の間に起こったのです。

あまりに一瞬のことに、周りの誰も、投げられた人も含めてぼかんとしてしまいました。

そんな呆けていた私の手を取って、ユウくんが走りだします。

「逃げるよ、ゆま!」

その言葉に私も我を取り戻して走り出しました。

「ま、待ちやがれ!!」

私たちが走りだし、やっと我に返った2人組が迫って来ます。

ユウくんと私はDホイールに飛び乗ると、アクセルを一気に廻しDホイールをスタートさせました。

「まだ追ってくるよ…」

ユウくんの眩きにちらりと後ろを見ると、あの2人組がDホイールに乗って私たちを追ってきていました。

「振り切るよ！ ゆま、しっかりつかまって!!」

「は、はい!!」

言われて、私は力いっぱいユウくんの背中に抱きつきました。

同時にユウくんがアクセルを一気に全開にして、スピードが上がっていく。

スピードの風の中、私はユウくんの背中の中をぬくもりを感じながらギュッと目を閉じたのでした。

結局、私たちはあの人たちと2時間ほど追いかけてこをする羽目になってしまい、逃げ切った時にはもうヘロヘロ、ユウくんが家まで送ってくれることになりました。

「とんでもない休日になっちゃったね」

「あうう…ごめんなさいです、ユウくん」

私のドジのせいでせつかくの休日が潰れちゃいました。

「謝らなくていいよ。それに…ゆまと一緒に過ごせて楽しかったしね」

そう言って夕日を背にユウくんはほほ笑みました。

その姿はとってもカッコ良くて、顔が赤くなっています。

「それじゃまたね、ゆま」

そう言ってユウくんは帰っていきました。

ご飯を食べて、お風呂に入って、私はベッドに寝転びながらデッキを眺めます。

私のデッキ、それはおじいちゃんも使っていたというカッコいいHEROたちのデッキです。

でも、今日のユウくんはそんなどのHEROよりもカッコよくって。

「えへへっ」

ユウくんを抱きしめていた時のあの温もり、スピードの風の中ですぐそばにあった太陽のように優しい温もりを思い出して、私の顔はだらしなく緩んじやいます。

今夜は、いい夢が見れそうです。

……To be continued

ゆま「ゆまと!」

恵「恵の…」

ゆま・恵「今回の最強カード」

ゆま「今回もすごいデュエルでした…って、メグちゃん、部屋の隅で何やってるんですか？」

恵「私…今回除け者だった。やる気出ない…」

ゆま「あはは、安心して下さい。 次回の第四話はメグちゃんの話らしいですよ」

恵「ゆま、早くコーナーを進めるべき…」

ゆま「何と言うか、メグちゃん分かりやすすぎです…今回のカードはこれですう！！」

《カオス・ソルジャー ―開闢の使者―》

効果モンスター（制限カード）

星8／光属性／戦士族／攻3000／守2500

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の光属性と闇属性モンスターを1体ずつゲームから除外して特殊召喚する。

自分のターンに1度だけ、次の効果から1つを選択して発動する事ができる。

●フィールド上に存在するモンスター1体をゲームから除外する。
この効果を発動する場合、このターンこのカードは攻撃する事ができない。

●このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、もう1度だけ続けて攻撃を行う事ができる。

ゆま「何て言うか…問答無用ですう！」

恵「いくら考えても制限に復帰した理由が分からない、まさに壊れカード…。」

比較的ゆるい召喚条件に除外能力に連続攻撃…バランスという言葉を知っているのか小一時間ほど聞いただしたくなる…」

ゆま「光属性というのも曲者ですう！ 《オネスト》って言われた時点でほぼ死亡確認状態ですう！」

恵「破壊耐性はないから比較的簡単に処理できることは嬉しい…。
ただ、召喚された時点で次のターンがある可能性は低いのだけ
ど…」

ゆま「今回はここまでです！」

恵「また次回…」

第03話 風の中にある太陽（後書き）

ワンタートウキル：はつきり言えばこれがやりたいだけの話でした。

ワンタートスリーキルは現実には難しすぎる…。

第04話 親の存在（前書き）

今回は本編キャラとTFキャラの繋がりについて。
当然、独自設定です。

第04話 親の存在

No side

「遊星、あなたは生きなければならない…!」

「Z―ONE!?!」

もう20年以上も前のこと。

未来のため、約束のため、今を壊そうとした者。

絆のため、今と未来を守ろうとした者。

どちらも、まぎれもなく英雄と呼ばれるべき2人の男の激突。

その戦いの果てに、一人は死に、一人は託された未来のために生き続ける。

だが…この二人の間にある約束があったことを知るものはいない。

「遊星、最後にお問い合わせがあります。私の、私たちのただ一つの我が儘を聞いてください…。」

それは…」

それは散りゆく英雄が、未来のために生き続けた英雄が、最後に見せた自分のための我が儘。

その内容は…。

Side 恵

本日は日曜日、私は不動家へとやってくると即座に目標を発見。
裏のガレージにてユウはDホイールを弄っていた。

顔色を確認。あまり寝ていないことがありありとわかる。

「おはよう、ユウ」

「おはよう、恵」

「ユウ、顔色が優れない。睡眠不足の兆候が見られる…」

「あはは、わかつちゃう？」

昨日、ゆまとDホイールのパーツを買いに行ってね。その組み込みをやったらかういつの間にか朝に…」

そう言ってあははとユウが笑う。それを聞いて私は軽いめまいを覚えた。

「それで、恵は今日どうしたの？」

「ユウには不平等の是正を要求する…」

「不平等の是正？」

訳が分からないと言った顔のユウに、私は言葉を続ける。

「昨日、ゆまとデートをしたことは、ゆまからのメールで知っている」

「いや、ただの買い物でデートじゃないんだけど…不良に追いかけてられて散々だったし」

困った顔で反論してくるユウを無視して、会話を続行。

「これから私は用事がある。でも、私一人では手が足りない。

そこでユウに協力を要請する…。ユウの力が必要、昨日ゆまに付き合ったように、今日一日私に付き合って欲しい」

「協力？ いいよ、恵の頼みだもん。僕に出来る事だったらなんでもするよ」

そう言ってほほ笑みながら返してくるユウ。その笑顔に、私の胸はドキリと高鳴る。

…どうしてこうユウは無自覚に、私の心を揺さぶるのだろうか？

「ありがとう、ユウ。早速、出発を」

そう言って私の乗ってきた、まるで骨のように病的に白い私のDホイール——メメントモリーを指した。

「場所は旧サテライト地区…用意をして…。

一度、シャワーを浴びてくることを推奨する…。」

「わかったよ」

そう言ってユウは不動態に戻っていく。残された私は、ガレージの

椅子に腰かけてユウを待つ。
日頃、使いもしない手鏡で、髪と服に乱れが無いことを確認しながら…。

ユウと共に私がやってきたのは旧サテライト地区の孤児院、マーサハウスだ。

私にとっては、ここは古巣となる。

私は孤児として、ここで暮らしていた。

私は3歳以前の記憶が曖昧だ。気が付いた時には、身元不明の捨て子としてこのマーサハウスに身を寄せていた。

そんな私に、ある時現れた遊星おじさまが私を引き取りたいと申し出てくれた。

聞けば、どうやら私は遊星おじさまの知り合いの娘らしい。

そこで私を養子にと言ってくれたが、私はその話を断った。

他の姉妹たちの手前、自分だけ家族を手に入れると言うことには抵抗があったからだ。

それに…遊星おじさまは巧みに真実を言ってはくれないが、私は自分の親について心当たりがある。

よく私は夢を見る。

砕けた瓦礫の街に4人の老人、仮面に覆われた顔に金属の冷たい、それでも優しい手…そんな夢…。

素性不明の我が身、物心ついたときから備わっている人並み外れた知識、そしてこの街の記録…それらを合わせれば自分自身の出自の

予測は立てられる。

その出自ゆえ、どうしても遊星おじさまに甘えきることが出来ない。

それなら、と遊星おじさまは私の後継人と保護者に名乗り出てくれた。

おかげで今、私はシティの不動産の近くで何不自由なく一人暮らしが出来ている。

だが、私の故郷はあくまでここ、マーサハウスだ。

そのため、頻繁に時間を作ってはマーサハウスを訪れ、手伝いなどを行っている。

「恵、遊輝！　よく来たね！！」

少し太めの老女が私たちを力いっぱい抱きしめて迎えてくれた。

この人はマーサ母さん。この孤児院の主であり、遊星おじさまの親代わりだった人だ。

私にとっては母であり、ユウにとっては祖母と言えるだろう。

「あはは、久しぶりです。　マーサおばあちゃん」

「ただいま、母さん…」

そう言って挨拶する私たちを迎え入れてくれた。

だが、ここで私は異常に気付くことになる。

私たちの姿を認めるとすぐに駆け寄ってくる私の妹や弟たちが寄ってこない。

それにマーサ母さんも表情がかたく、どうも雰囲気重い。

「何か、あった…？」

「恵姉さんに遊輝お兄さん…」

答えたのは私の妹の一人、瀬良あゆみである。泣き腫らした眼が痛々しい。

「どうしたの…?」

「そ、それが…」

聞けばあゆみは学校帰りに、最近この周辺に出没する悪質な不良グループによって大切なカードを巻き上げられてしまったようだ。

さらに悪いことに、そのことを知ったあゆみと同じ年の私の弟…戦士手島が出て行ったきり戻ってこないそうだ。

居なくなった手島のこと、皆相心配している。

治安警察（旧セキュリティ）に連絡をして手島を探してもらっているが、未だ連絡は無いらしい。

その話を聞いた途端、私はユウを見た。

ユウは私の意図を知ったように頷くと、私たちは連れだってマーサハウスから出て行こうとする。

「あんたたち、どこに行くつもりだい!!」

「…その不良グループのところ。手島の性格なら、間違い無く取り返しに行ってる…」

「お待ち！ そんな危険なことは治安警察に…」

私たちは最後までマーサ母さんの話を聞かず、表に止めてあったDホールに飛び乗る。

「どうするの？」

「場所は分かる。 あゆみのカードと手島を取り戻す…」

ユウの問いに私は簡潔に答えると、メモントモリーのエンジンをスタートさせた。

あゆみの奪われたカードは大切なものだ。

両親が蒸発し、その両親が唯一残してくれたカードだ。

あゆみがそのカードを見ながら、いつか両親が迎えに来てくれると信じているのを私は知っている。

言ってみればあゆみにとって、家族の絆の象徴たるカードなのだ。そして

戦士手島…短気でケンカばかりの手のかかる弟。

でも、周りの友達が傷つけられたら誰よりも怒り、いの一番に動き出す優しい弟。

「取り戻す…必ず…！」

私はそう呟き、メモントモリーを発進させた。

「ハハ…」

私たちが着いたのは旧サテライトB地区にある廃工場群の一画だった。

こういった場所がまだ多いこの地区は、不良たちの格好の隠れ家になっている。

「う、うあああ…!!」

私たちの後ろでは、すでに無力化された不良たちが蜘蛛の子を散らすように逃げ出している。

全員、私とユウの二人でデュエルで制圧した。あとはこの扉の向こう、リーダー格の不良だけだ。

すると、扉の向こうから声が聞こえてきた。

「う、うう…ちくしょう…」

呻くような声、間違い無く手島の声だ。

私はドアを思い切り開け放った。

「誰だ!？」

「め、メグ姉に遊兄…!」

部屋の中の不良は3人、意外に数が多い。

私は倒れた手島に駆け寄って抱き起こした。

私の隣では、ユウが油断なく不良たちに睨みを利かせている。

「メグ姉…」

「…ひどい」

私は不良たちを睨みつける。

「へ、ガキが！俺たちにたてつこうなんて10年早えんだよ！」

「うるせえ！そのガキからカード巻き上げてて、何偉そうにしてんだ！」

返せよ、あゆみのカード返せよ！！」

私の腕の中で、手島が叫んだ。

「何言ってるんだ？ガキには過ぎたカードだから俺たちが有効活用してやろうってんだ、なあ？」

ゲラゲラと耳障りな不良たちの笑い。

「それによお、お前の言う瀬良あゆみって、あの悪党どもの娘だろ？」

その言葉に、私はピクリと反応した。

あゆみの両親が、悪行の数々を行っていたのは有名だった。

人生を終わらされた人間は数知れず、そうやって他人の屍の上に地位を築いていた人間だ。

だが、そんな栄華は長くは続かない。結局は復讐を恐れ、雲隠れ。後に残ったのは事情を知らず、他者からの憎悪の対象にされてしまったあゆみ唯一人だった。

「悪党の娘なんだからどうせ悪党に決まってる。

そんな悪党からカードを取り上げたんだから逆に俺たちは正義の味方ってわけだ」

悪の娘は悪…そんな不良の言葉が私の心に小さな楔を打ち込む。だが…それを二つの声が打ち消した。

「親は関係ねえだろ、親はよお!!」

あゆみはよお、いつだって一生懸命で、いつだって笑顔で、辛いとか苦しいとか言わねえ!!

でも、いつだかお前らの奪ったカードを見ながら一人で寂しそうに泣いてたんだよ!!

お前らの持ってたのは、あゆみの親との大事なカードなんだよ! あゆみはいい奴だ、親なんか関係ねえ!!

そんないい奴から大切なカードを奪ったお前らが正しいはずねえだろ!!」

「その子の言う通りだ!

親が何であれ、子供には関係ない。子供の人生は子供のものだ!! それを勝手な屁理屈をこねて、子供の未来を決めつける!

そんなの、正しいはずが無い!!」

そう言ってユウはデュエルディスクを構えた。

「デュエルだ! 僕が勝ったらあなたたちが今まで巻き上げたカードを返してもらう!!」

すると不良たちのリーダーらしき男はニヤリと笑う。

「ほう、モヤシのお坊っちゃんが俺とデュエルかよ。

ならお前もそれ相応のものを賭けてもらうぜ! お前らのデッキと、その女だ!!

さあ、賭けろよ!」

「私は構わない、ユウ…私はユウを信じてる…」

私の言葉にユウが頷いた。

「わかった、そのアンティルルールを受ける！」

「よし、それじゃちよつくら遊んでやらあ!!！」

リーダー格の不良がデュエルディスクを構える。

「「デュエル!!！」」

遊輝↓LP4000

不良リーダー↓LP4000

「俺のターン、ドロ―！俺は手札から《ジェネラルデーモン》を墓地に捨て、《万魔殿―悪魔の巣窟―》パンデイモニウムを手札に加える。そしてフイールド魔法、《万魔殿―悪魔の巣窟―》パンデイモニウムを発動。そして手札の《デーモン・ソルジャー》を攻撃表示で召喚。カードを2枚伏せターンエンドだ」

《デーモン・ソルジャー》 星4／闇属性／悪魔族／攻1900／守1500

バンデイモニウム

《万魔殿》：恐らく相手のデッキは『チェスデーモン』デッキ。維持にライフコストを要求するが、強力な効果をもつ下級モンスター軸のビートダウンデッキだ。

「僕のターン、ドロー！ 手札から《サイクロン》を発動。伏せカード一枚を破壊！」

「ちい！」

砕け散ったカードは《奈落の落とし穴》、いいカードを破壊出来た。

「裏守備表示でモンスターを召喚。 ターンエンド」

ユウは伏せカード無し：どうも初手は良くないようだ。

「俺のターン、ドロー！ 《インフェルノクインデーモン》を攻撃表示で召喚！」

《インフェルノクインデーモン》 星4／炎属性／悪魔族／攻 9
00／守1500

「さらに手札から装備魔法発動！ 《デーモンの斧》を《デーモン・ソルジャー》に装備！」

《デーモン・ソルジャー》 攻撃力1900↓2900

「行くぜ、バトルだ!!」 《デーモン・ソルジャー》で裏守備モン
スターに攻撃!

切り裂け、デーモンスラッシュ!!」

「このカードは《ライトロード・ハンター ライコウ》。効果に
よって僕は攻撃してきた《デーモン・ソルジャー》を破壊!」

ライコウの効果で墓地に落ちて行く3枚のカード…。

《サイクロン》に《ライトロード・マジシャン ライラ》、そして
《ダーク・アームド・ドラゴン》…ユウの運があまり良くない。

「ならば《インフェルノクインデーモン》でダイレクトアタック!」

「くう」

遊輝

LP 4000 ↓ 3100

「でもこの瞬間、僕は手札から《冥府の使者ゴーズ》を特殊召喚し
ます!」

《冥府の使者ゴーズ》 星7／闇属性／悪魔族／攻2700／守2
500

「さらに効果によって「冥府の使者カイエントークン」を召喚!」

「冥府の使者カイエントークン」 星7／光属性／天使族／攻90
0／守900

バトルは終了、ユウはライフにダメージを受けたが切り札の一つ《冥府の使者ゴーズ》が場に召喚出来た。これならいける。
そう私が考えた時、不良はニヤリと笑った。

「待ってたぜ、お前が強力なモンスターを召喚するのを！
装備魔法発動、《フォーリン・ダウン墮落》！」

黒いオーラのようなものがゴーズを覆い、ゴーズが苦しみに悶える。

「ライフを800払ってお前の《冥府の使者ゴーズ》に装備、その
コントロールを得る！

ゴーズ、こっちに来い！」

不良リーダー

LP4000↓3200

…不味い、攻撃力の高いゴーズのコントロールが奪われた。

「これでターンエンドだ」

ユウ…どうする？

そう思って見てみれば、ユウの顔が笑っている。

これは…行くの？

「僕のターン、ドロー！」

「おっと、お前がスタンバイフェイズに移ったことで《インフェルノクインデーモン》の効果発動！」

「デーモン」という名のついたモンスターカード1体の攻撃力をエンドフェイズまで1000ポイントアップする。

俺は《インフェルノクインデーモン》の攻撃力をアップ！」

《インフェルノクインデーモン》 攻撃力900↓1900

「僕は手札から魔法カード《ワン・フォー・ワン》を発動。

手札からモンスター1体を墓地へ送って、手札またはデッキからレベル1モンスター1体を特殊召喚する。

手札の《ドッペル・ウォリアー》を墓地に送り、デッキから《グローアップ・バルブ》を特殊召喚。

レベル7の「冥府の使者カイエントークン」にレベル1《グローアップ・バルブ》をチューニング！」

☆7+☆1=☆8

「集いし鋼が、新たな命となって動き出す！ 光さす道となれ！！シンクロ召喚、生誕せよ、《スクラップ・ドラゴン》！！」

《スクラップ・ドラゴン》 星8/地属性/ドラゴン族/攻2800/守2000

「さらにデッキトップのカードを一枚墓地へ送ることで墓地の《グローアップ・バルブ》を特殊召喚。

そして《スクラップ・ドラゴン》の効果発動！

1ターンに1度、自分及び相手フィールド上に存在するカードを

1枚ずつ選択して互いに破壊する事ができる！」

「な、なんだと!？」

明らかにうろたえだす不良。

「僕が選択するのは《グローアップ・バルブ》と…その伏せカードだ！」

ダストブレイズ！」

《スクラップ・ドラゴン》からくず鉄混じりのブレスに巻き込まれ、《グローアップ・バルブ》と伏せカードが砕け散る。

砕けた伏せカードは…ミラーフォース!？」

「やっぱりミラーフォースを伏せてたね…」

「お前…なんで分かった!？」

「手札がゼロなのにその余裕の表情から、それが強力な『何か』だってことは分かってたよ。

そこでなんであろうと潰せる体制を整えたんだ。

《奈落の落とし穴》のような召喚起動型のトラップなら《スクラップ・ドラゴン》を犠牲にするつもりだった。

そうならそうで、通常召喚が残ってるからね。

でも《スクラップ・ドラゴン》は無事に召喚できた…それで、それがミラーフォースのような攻撃反応型のトラップ、または速攻魔法だとわかったのさ」

「くう…」

悔しそうに不良の顔が歪む。

「分かっていると思うけど、フオーリン・ダウン《墮落》の維持には場に「デーモン」と名のついたカードが必要。

現在、「デーモン」という名前のついたカードは《インフェルノクインデーモン》のみ。

そして身を守るトラップはもう無い」

その意味することは…

「バトル！ 《スクラップ・ドラゴン》で《インフェルノクインデーモン》を攻撃！ スクラップデスバーナー！！」

《スクラップ・ドラゴン》からのブレスが《インフェルノクインデーモン》を跡形もなく燃やしつくす。

不良リーダー

LP3200↓2300

「そして「デーモン」という名前のついたカードが無くなったことにより、フオーリン・ダウン《墮落》は破壊。

戻ってこい、ゴーズ！！」

「あ、あああ…」

黒いオーラを振り払ったゴーズが、ユウの元へと帰ってきた。それを見ながら不良が一步後ずさる。

「そしてゴーズの攻撃が残っている。ゴーズでダイレクトアタック！

冥府葬送斬!!」

「うわああああ!!」

不良リーダー

LP2300↓0

不良のリーダーはその衝撃で倒れる。

「さあ、約束通り奪ったカードたちを返してもらおう!」

「く! そんなの知るかあ!!」

飛び起きたリーダー格の男が拳を放つ。

危ない、ユウ!?

「はっ!」

だがユウは、殴りかかってきた拳を避けると逆に顎に拳を打ち込んでいた。

「:!!!?!」

声を上げる間もなく、リーダー格の男は崩れ落ちる。

あの様子だと、しばらくは気を失ったままだろう。

その様子を見ていた取り巻きたちは我先にと逃げ出してしまった。

「ああ、やっちゃった…この中から、あゆみちゃんのカードを見つけるのは結構骨だね」

巻き上げられていたカードの数々を前にユウはそう、少し困った顔で呟くのだった。

「ふう…」

私たちがマーサハウスへと帰って来たのは、日が暮れ始めてからだだった。

あの後、あゆみのカードを回収した私たちはすぐに治安警察（旧セキュリティ）に連絡した。

あれだけのカードたちを持ち主に返すには、私たちだけではどうしようもないからだ。

だが、そこで少し問題が起きた。

あの不良グループだが、かなり手広く悪いことをやっていたようで窃盗などの余罪が多数で私たちも事情を聞かれることになってしまったのだ。

おかげで帰るのが大幅に遅れてしまった。

「これを…」

「メグ姉？」

メメントモリーから降りた私は手島に一枚のカードを差し出した。
そのカードは《アンデット・スカル・デーモン》 …… あゆみの奪わ
れたカードだ。

「手島からあゆみに渡して…」

「だって…取り戻したのは遊兄とメグ姉じゃんか。俺、何にも役
に立ってない…」

そう言って下を向く手島の頭を、私は撫でる。

「ううん、手島は立派だった…」

あゆみのために立ちあがって、たった一人であいつらに立ち向か
って行った…」

「だって…取り戻さなきゃ、あゆみのやつが可哀想じゃんか…」

「そう思っても、みんな行動出来ない。やっぱり手島は立派…」

「そうだよ、僕だって君くらいの歳じゃそんなことできない。手
島くんは立派だよ。」

だから、このカードは君からあゆみちゃんに返してあげるんだ」

「遊兄、メグ姉…」

手島は私とユウの顔を交互に見ると、やがて頷いた。

「ただいま…」

私たちがマーサハウスに帰ってくると、あゆみが弾かれたように弾かれたように走ってきてきて手島に抱きついた。

「お、おい」

「し、心配だったんです」

それだけ言うにあゆみが手島に抱きついたまま泣き始める。

あゆみが落ち着くまで何も言わなかった手島は、あゆみが落ち着いたのを見計らって《アンデット・スカル・デーモン》のカードを差し出した。

「ほら、取り返してきてやったぞ」

「ひつく…あ、ありがとう…」

そっぽを向きながらカードを差し出す手島と、泣きながらカードを受け取るあゆみ。

「大事なカードなのにあんな奴らに奪われるし、どん臭くて見られないよ、お前」

「う、うん…ごめんなさい…」

シュンとするあゆみに、手島はそっぽを向きながら続ける。

「しょうがねえから…これからは俺様がいてやるよ」

「え、それって」

あゆみは言葉の意味が分からずに目をパチクリさせる。

その様子に、顔を真っ赤にした手島は大声で叫ぶように言った。

「あー、もう！ 守ってやつからこれからは俺様から離れんじゃねえぞ！ いいな！！」

きょんとしていたあゆみだが、その言葉の意味をゆっくり飲み込む。

そして、顔を赤くしながら頷く。

「う、うん。 ずっと傍にいるから、守って…」

「お、おう！」

お互いに顔を真っ赤にした手島とあゆみの姿に、私も自然と笑みが漏れる。

「一件落着だね」

「うん…」

「そろそろ僕たちも帰ろうか」

「うん…」

「ごちそうさまでした…」

「はい、恵ちゃん。 お粗末さま」

私は今、不動家で夕食を御馳走になっている。

あの後、ユウとマーサハウスから帰ったところアキおばさまと遊星おじさまに夕食に誘われ、御馳走になったのだ。

相変わらず、アキおばさまは料理が上手い。

夕食が終わり、ユウが部屋へ引き上げていく中、私は遊星おじさまに呼び止められた。

「何度も言っていることだが…俺は君を大事に思っている。大切な友人との約束だ。」

君を俺の家族として迎えたいと思っているのだが…」

「すみません、おじさま…。その話はお断りします」

「…理由は聞いてもいいか？」

「遊星おじさまは言わないけれど…私は自分の親について、予想がついている」

「!?!? まさかそのことで…」

遊星おじさまの驚いた顔に、私は首を振る。

「親は親、私は私…おじさまの提案を受けない理由は、ごく個人的な我が儘です…」

「我が儘？」

「だから遊星おじさまは気にしないで下さい。 私は今のままでも…幸せです」

そう言って私はユウを追って食堂から出て行こうとする。

そして、出て行く前に遊星おじさまに向き直ると一つ宣言した。

「安心して下さい、おじさま。 ユウの妹以外として…いつか家族になってみせますから…」

そう言って一礼すると、今度こそ私はユウを追って部屋から出て行った。

「…どういうことだ？」

俺は今、恵の言葉の意味を考えてみるがよく分からない。

「…なるほどねえ」

見ると妻のアキは納得したように、何度も頷いていた。

「わかったのか、今の言葉の意味が？」

「ええ。 まあ…女のこだわりということね」

「…遊輝の妹より、姉の方がいいという意味か？」

「いや、そうじゃなくて」

？

ますます意味が分からない。

だが、彼女が俺の家族に対して心を開いていることは分かる。
今はそれでいいだろう。

俺は居間の片隅に飾られた写真へと近づいて行く。
それはあのWRGPで優勝した時の俺達の写真だ。
そしてその写真の隣には壊れたサングラスが一つ…。
俺はそのサングラスを手に取り、語りかける。

「ブルーノ…アポリア…パラドックス…そして、ZーONE。」

お前たちの娘は…元気に育っているぞ」

No side

「遊星、私たちの娘をお願いします…」

「娘だと？」

「はい…。人類を再生させるための計画の一つ、それは人工的に人を産みだすことでした…」

「クローンの様なものか？」

「クローンのように寿命などに問題の無い、文字通り普通の人間です。」

ですが…資源も時間もなく、その計画は一人を生み出したただけで中止しました。

そこで生みだされた娘…その子は私たち4人の娘です。

しかし滅んだ未来に残しても、孤独な破滅が待っているだけ…。

私たち4人は時間転移装置で娘を過去へと飛ばしました。

未来を変えるこのアークレイドル計画の発生から十年後、未来の変わったこの世界で迎えに行こうと…」

「それじゃあ…」

「今から十年後、私たちの娘はこの世界に転移してきます。
しかし…私にはもはや迎えに行くことも育てる時間ありません。
だから…」

「…分かった。お前の、いやお前たちの娘は俺が必ず育ててみせる！」

「…ありがとう、遊星」

「それで、お前たちの娘の名前は？」

「名前は…」

それは何もかも滅んだ未来、絶望のみが残された4人に訪れた奇跡。
その子の笑顔は、まるで乾いた大地に降る恵みの雨のようで…4人の
心に染みわたっていた。
だから、その子の名前は…

「恵。 レイン＝恵です」

…To be continued

ゆま「ゆまと！」

恵「恵の…」

ゆま・恵「今回の最強カード」

ゆま「今回は予告通りメグちゃんの話でしたね…って、なんで部屋の隅に？」

恵「私…ゆまみたいに全然甘えられてない。何故？何がゆまと違うの…？」

ゆま「ほへ？」

ドタプーン

恵「…」

ペターン

恵「くっ…質量差が敗北要因だというの…!?!？」

ゆま「あ、でも今回はメグちゃんの出生についてとか設定が出る話で、そういうイチャイチャはまた今度ということで…」

恵「…仕方ない。今はこのコーナーを進める」

ゆま「今回のカードはこれですう!!！」

《冥府の使者ゴーズ》

効果モンスター（制限カード）

星7／闇属性／悪魔族／攻2700／守2500

自分フィールド上にカードが存在しない場合、

相手がコントロールするカードによってダメージを受けた時、

このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚に成功した時、受けたダメージの種類により以下の効果を発動する。

●戦闘ダメージの場合、自分フィールド上に「冥府の使者カイエン トークン」

（天使族・光・星7・攻／守？）を1体特殊召喚する。

このトークンの攻撃力・守備力は、この時受けた戦闘ダメージと同じ数値になる。

●カードの効果によるダメージの場合、

受けたダメージと同じダメージを相手ライフに与える。

ゆま「1キル封じのカードですね。 高い攻撃力に、強力なトークンを生み出す能力と、劣勢からの反撃の狼煙になるカードです」

恵「このカードのせいで場がガラ空きでも安心して攻撃に行けなくなった。」

ゆま「このカードを警戒して攻撃順も重要ですね」

恵「：攻撃力の高いモンスターから攻撃するのはNG。 攻撃力の低いモンスターから攻撃するというプレイングをいつも念頭に置いておくといい」

ゆま「後半の効果なんですけど…メグちゃん、発動したとこ見たことあります？」

恵「無い…」

ゆま「作者も見ただこと無いらしくて、どうにも評価できないみたいです」

恵「そこはおまけのようなものと割り切る…。正直前半の効果だけで十分強すぎる…」

ゆま「今回はここまでです！」

恵「また次回…」

第04話 親の存在（後書き）

というわけで、恵ちゃんの素姓についてでした。

ここまですが導入編の第一部となります。

書き溜めていたのはここまでなので、また書き溜めてから投稿します。

閑話 人物紹介

人物紹介

不動 遊輝（15）……本作品主人公。不動遊星と十六夜アキの一人息子。

父と母の才能を正しく受け継ぎ、絆を大切にするように真っ直ぐ育った。

生きた伝説である父を尊敬している反面、『英雄の息子』ということで有名になり過ぎなかなか同年代の友人が出来なかったことから疎ましく思っていることも。

性格はおとなしく、一人称は僕。

父親へのコンプレックスのためちよつと気弱で、一言で言うところの外見のAIBO。

ただ、守るもののためには恐れず突き進む強さを持つ。

エースモンスターはスクラップドラゴン。他にも切り札になりえるモンスターたちを多数所持している。

機械いじりにデュエルの腕前、Dホイール運転技術などなどチートな才能を誇る。

だが、父がそれ以上にチートのため自分の才能に自信が持てない。誕生日に父遊星から贈られたDホイールと、母から贈られたカードが宝物。

使用デッキ…『ジャンクドッペル』

Dホイール名…遊輝号

宮田ゆま（15）……本作ヒロイン1号。タッグフォースキャラの一人。

伝説のデュエリストであり、不動遊星とも繋がりがあった『遊城十

代』の孫娘。

不動態とは家族ぐるみでの付き合いであり、幼いころから遊輝と共に過ごしていた。

天然でボケボケしているが、正義感が強く、どんな人物も改心させてしまうような不思議な魅力の持ち主。

祖父から貰ったとてつもないカードを所持しているのだが…。

使用デッキ…『属性E・HERO』

Dホイール名…トライハート（未完成）

レインⅡ恵（15）……本作ヒロイン2号。タッグフォースキャラの一人。

無口で静かな少女。無表情が基本であり、彼女が顔色を変えることを見たことがある人間は少ない。

遊輝たちの幼馴染の一人。物心ついたときから家族はおらず、幼少期は孤児院で過ごしていた。

遊星は彼女に何かと世話を焼き、後継人になっている。

遊星は何度も彼女を養子として引き取ろうとしたが、彼女自身に断られた。

実は彼女の親は『彼ら』であり、本人はその出生になんともなく気付いているようだ。

使用デッキ…『アンデット』

Dホイール名…メメントモリー

第05話 廃部危機！？ 開催、部活対抗トーナメント（前書き）

今回から第二部、学園物の王道、トーナメント大会に入ります。
タッグフォースキャラが次々登場予定。
お楽しみに。

第05話 廃部危機！？ 開催、部活対抗トーナメント

S i d e ? ?

私はライディングデュエルが大嫌いだ。

その名前を聞くだけで虫酸が走る。

だから、ライディングデュエル部などこの手で潰してやった。

だと言うのに…何故今年になって同好会が出来ているの！？

顧問は…ケイトⅡモヘア教官？

成程…2年前の意趣返しというわけ。

いいわ、何度だって潰してあげる！

ライディングデュエルなどこの学園には必要無いのよ！！

S i d e o u t

S i d e ケイト

「ちい！」

アタイは肩を怒らせながら校内を歩いていた。

あー、イライラする！

ここが家だったらビールを一気におおって暴れまわりたいぐらいだ。それと言うのも、ついに『あいつ』が動き出したからだ。

「あいつ、またライディングデュエルを潰そうってのかい…」

その姿勢は2年前とちっとも変わっていない。

「どうしようかねえ…？」

自問してみるが、どうするもこうするもない。

すでに決定事項、賽は投げられた後だ。

となれば、後はその賽の出目で博打に勝つしかない。

だが、あの3人はその博打に勝つことが出来るだろうか…？

「とにかく、早いところボウズたちに教えてやらないと…」

アタイは部室棟の一番隅、ライディングデュエル同好会のドアをバシッと開け放った。

「あんたたち、揃ってるね！ 実は…」

そこまで言って、アタイの目は点になった。

何故なら、目の前ではあの3人が重なるように倒れていたからだ。

遊輝のボウズがゆまと恵の2人を押し倒すように覆いかぶさっていた。

ボウズはヤバツという顔でアタイを見てるが、ご丁寧なことに右手

はゆまの、左手は恵の胸をしっかり掴んでいるあたり言い訳出来る状況でもない。

ゆまと恵の方も、何かを期待するように目を瞑って心なしか唇を突き出してる。

「…おい、学校内で何やってるんだエロガキども…」

「ち、違っ！」

「『クリボーが勝手に』とか訳分んないことでもほざくつもりかい？」

「いやそんなこと言いませんよ！ これには訳が…！」

「男が2人も女押し倒して胸揉みしだく、正当な訳なんざあるわけないだろ…！」

ゆっくりとアタイは3人に近付く。

「この…バカガキどもがあ…！！！」

3つほど軽快な音が夕方の学園に響き渡った。

S i d e o u t

「痛いですう…」

「痛い…」

ゆまと恵が叩かれた頭を涙目で抑えている。
僕も泣きそうだ。

「こんなときにバカやってるんじゃないよ、全く…」

そう言われても事故で偶然倒れかかって、二人が支え切れなかった
っただけでやましいことは何にもしてないのに。

「とにかく、真面目な話があるんだ。

全員、心して聞きな」

そう言って話し出したケイト先生の話は…とんでもないことだった。

「僕たちのライディングデュエル同好会が…廃部!？」

「その可能性が濃厚だってことだ」

そう言ってケイト先生は事情を説明しはじめる。
いわく、生徒会からの陰謀だという。

部費は各部活動のこれまでの活動内容や部員数によって基本的に決

まる。

だから新参で実績が無く、人数の少ない同好会である僕らライディングデュエル同好会は部費が少ないのは仕方ない。

だが、ライディングデュエル同好会の部費はそれを考えても少なすぎだった。

どうやら、生徒会が『学生にライディングデュエルは好ましくない』などの理由でライディングデュエル同好会の部費を操作したらしい。そのため、このままではこの部室の維持費すら捻出できなくなり事実上の廃部となってしまうということだ。

「今年度の部費はいくら…？」

「ほら、これだよ」

恵に何やら数字の書かれた書面をケイト先生が渡す。

僕とゆまも、その書面を覗き込んだ。

そこに書かれていた数字は…。

「はう…この金額じゃ、どう節約したって無理ですう…」

「それ以前に、来月の維持費すら危ういんだけど…」

僕とゆまは揃って頭を抱えた。

どうしたらいいんだろう？

アルバイトでもしてそれを部費として入金していけばいいのかな？

僕は同好会を存続させる方法をあれやこれやと考える。

しばらくして、何かを考え込んでいた恵が口を開いた。

「ケイト先生、単刀直入に聞きたい。 私たちはもうおしまい…？」

その言葉を待っていたかのように、ケイト先生はニヤリと口をゆがめた。

「方法が一つだけある。正規に認められた方法で、部費を大幅に増やす方法がね」

「本当ですか！」

「ああ、但しここにいる全員が勝たなきゃならない分の悪い賭けになるよ」

「構わないです！ 教えてくださいです、ケイト先生！」

「分かった。実は…」

ケイト先生の話はこうだ。

今から一週間後、新入生歓迎イベントである部活対抗トーナメントというデュエル大会が校内で開催される。

その大会で上位の成績を収めれば、特典として『特別部活動予算』という部費がでるらしい。

デュエリストを育てるデュエルアカデミアらしく、デュエルでの勝利で得られるこの『特別部活動予算』と言うのはかなりの金額のようだ。

「これなら全校生徒の前で実力を示した上で受け取れる。

新参だの実績が無いだの、いらん横槍で減額することもできないだろうね。

ただし、ここでの成績が悪ければ問答無用で早晚廃部決定。ちよっとした博打ってわけだ」

そう言ってケイト先生が肩を竦める。

「しかも悪いことに、今後使うだろう部費を試算してみたが、こりや優勝しないと遅かれ早かれ予算切れで廃部だろうね」

「つまり僕らが存続するためには…優勝するしかない？」

「そういうことだ」

立ちあげ早々に廃部の危機、いくらなんでも急展開に過ぎる。それを乗り切るためにはデュエルに勝たないと…。

「あ、もしかしてケイト先生が言ってた、『強くないとライディンググデュエルできない』って言うのはこのことなんですか？」

以前ケイト先生が言っていた言葉を思い出して聞くと、ケイト先生は頷いた。

「まあね。あんたたち、この学校に以前ライディンググデュエル部があったって知ってるかい？」

「ええ、文化祭の公開デュエルを見たことありますから」

「それが今無いのはなんでだと思う？」

「まさか…」

何かを思い当たった恵に、ケイト先生は頷いた。

「同じさ、予算の都合が出来なくなって2年前の部活対抗トーナメ

ントで廃部になったんだ。

当時は部活対抗戦のルールが違ってね、バトルロイヤル形式だったんだ。

勝った部が負けた部の部費の一部を奪えるってアンティルールだね」

「でも、それだと弱い部活は一方的に部費が盗られちゃうじゃないですか…」

「参加しない、って選択も出来る。

でも過酷なライディングデュエルをしようって部活だ、参加しないなんて選択はない。

そして…当時のライディングデュエル部はたった一人に根こそぎ部費を取られて廃部に追い込まれたのさ…。

アタイは当時、ライディングデュエル部の顧問だった…。

その全てを間近で見ていたんだ」

そんな風にケイト先生はしんみりと語る。

なるほど、だから『顧問は2度目』と言っていたのか…。

それにしても、ライディングデュエル部をたった一人で廃部に追い込んだデュエリストか…。

とんでもないデュエリストだ。

「一体誰なんですか？ その当時のライディングデュエル部を廃部に追い込んだデュエリストは？」

僕の問いに、ケイト先生は一呼吸置いてはつきりと答えた。

「現生徒会長にして学園最強の異名を持つデュエリスト、天宮照子。このライディングデュエル同好会を潰そうとしている張本人さ」

ケイト先生から廃部の危機を聞かされてから一週間後、今日はライディングデュエル同好会の運命の決まる部活対抗トーナメント開催日だ。

今日僕たちの運命が決まると思うと緊張してしまう。

「はわわ…きつと大丈夫です、ユウくん…」

「ゆまも緊張で顔、引きつってるじゃないか」

「ユウもゆまも落ち着くべき…」

「そういうメグちゃんだって制服のボタンかけ違えてますう」

「むう…」

どうやら、僕たち3人はこの大一番に随分緊張してしまっているようだ。

「おい、おまえら調子はどうだい…?」

「あ、ケイト先生…」

やってきたケイト先生は、僕たちの様子を見るなり呆れ顔になって

いた。

「おいおい、何だい何だい。 全員揃ってブルっちまってるのかい？」

「仕方ないじゃないですか、このトーナメントに同好会の運命がかかってるんですから」

「だからってブルってたら実力がでないだろうが。 ほら、気合い入れな！」

「痛っ！」

ケイト先生にお尻をバシンと叩かれた。

ちよっと手加減して欲しいくらいだったけど、おかげで緊張はほぐれた。

ここで改めて今回の大会のルールを思い出す。

今回の戦いはトーナメント戦だ。つまり一回負けたら即ゲームオーバーだということである。

さらに出場選手には制限があり、同じ選手は少なくともその後2戦は戦ってはいけないというルールがある。

つまり、強い選手一人がいる部活が勝ち上がるというわけではないのだ。

僕たちの目指すものは優勝、トーナメント表によれば優勝するには4戦を戦って勝つ必要がある。

僕たちの場合には全員が一度ずつ勝ち、さらに一戦目に出た選手が決勝で勝利する必要がある。

出場順については3人で話し合って決めていた。

一回戦目が僕、二回戦目がゆま、三回戦目が恵で、決勝戦が再び僕

という順番だ。

しかし…本当に僕たちは勝てるんだろうか？

トーナメント表を見たが、僕たちがおそらく戦うだろう相手は強敵揃い。

ケイト先生の話では、生徒会…もつと言ってしまえば会長の天宮照子さんが僕たちを潰すために刺客として組んだという話だ。

どうしてそこまで僕たちを目の敵にするのか分からないが、その執念は本物である。

大丈夫なんだろうか…？

すると、ケイト先生に今度は背中を叩かれた。

「い、痛っ！」

「ボウズ、お前がブルってどうするんだい？ あんたはこのアタイ、元プロデュエリストのケイトⅡモヘアに勝ったんだ。

胸を張りな、自信を持ちな！ 自分を信じられないデュエリストにはカードたちは応えてはくれないんだよ！」

「ケイト先生…」

そうだ、ケイト先生の言う通りだ。

まずは胸を張ろう。そしてみんなの、カードたちの想いに答えよう。

「そろそろ一回戦だ。行って来い、ボウズ！！」

「いってらっしゃい、ユウくん」

「ユウ、頑張って…」

「うん！　いつてくるよ！！」

僕はみんなの声に答えると、胸を張って会場へと歩いて行く。
もうさっきまでの緊張はない。

ケイト先生には感謝だ。やっぱり、立派ないい先生なんだなあ。

「…ところでケイト先生に質問がある。　部費が全額消えていたけど、行方を知りませんか…？」

「ああ、全額生徒が隠れてやってるトトカルチョにつき込んだ。
うちの部の優勝にな」

「えう！？　ま、不味いですよケイト先生。　先生はそういうの取り締まる立場なんじゃ…」

「アタイは固いことは言わないんだよ。　それに優勝できなきゃどうせ廃部なんだ。　いいじゃないか」

ぜ、前言撤回…。　やっぱり少し問題ある先生かも…。

僕は後ろから聞こえてくる先生のカラカラ笑う声に、強烈な頭痛がして頭を抱えるのだった…。

「あら、誰かと思えば不動博士の息子さんじゃありませんか？」

一回戦の会場へと着いてみると、そこにいたのは知っている人だった。

「ああ、一回戦の相手は喜多嬉さんだったんですか」

一回戦の相手は社交ダンス部所属、メイⅡ喜多嬉さん。この街でかなりの財力をもつ家のお嬢様だ。

父さんが色んな晩餐会などに招かれることもあり、そういった席で彼女とは何度か顔を合わせたことがある。

「あなたも運のないことですわね。一回戦目からこのわたくしと戦うことになるんですから。」

まあ、庶民から這い上がってきた家系ですから、その雑草のようなしぶとさで精々わたくしを楽しませてみなさい」

特徴的な金の縦ロールの髪を振りながら高飛車に宣言する喜多嬉さん。

いや、父さんはトップス出身だし、母さんの家系は名門政治家揃いだし、家系的には悪くないと思うんだけど…。

普通は不快に思うところなんだろうけど、この人の場合、一片の曇りもなく本気でそう思ってるっていうのが伝わってきて何故か悪い感情が持てないんだよね…。

しかも、言うだけの実力を持ってるし…。

「あ、あはは…よろしく願います、喜多嬉さん」

「と・く・べ・つに、お相手して差し上げるわ!」

「「デュエル!!」」

遊輝↓LP4000

喜多嬉↓LP4000

「身の程を知らなさい! わたくしのターン、ドロー!」

そういえば晩餐会で何度か戦ったことがあるけど、確かこの人のデ
ッキって…。

「手札から、《黒魔術のカーテン》を発動! わたくしはライフを
半分払ってデッキから《ブラック・マジシャン》を特殊召喚します
わ!」

喜多嬉

LP4000↓2000

《ブラック・マジシャン》 星7／闇属性／魔法使い族／攻250
0／守2100

でた、初代デュエルキング、武藤遊戯さんのエースカードとして有

名な《ブラック・マジシャン》だ。

そう、喜多嬉さんのデッキは《ブラック・マジシャン》とそのサポートで戦う《ブラック・マジシャン》デッキなのだ。

「わたくしはカードを1枚伏せてターンエンド」

「僕のターン、ドロー！ 手札から魔法発動、《ブラック・ホール》！」

フィールドにブラックホールが発生して、《ブラック・マジシャン》が砕け散った。

よし、攻撃力の高い《ブラック・マジシャン》は処理できた。ただ、僕の手札に伏せカード除去はない。だが：防御のトラップカードは手札に十分、ここは攻めよう。

「僕は《カードガンナー》を攻撃表示で召喚します」

《カードガンナー》 星3／地属性／機械族／攻 400／守 400

「《カードガンナー》の効果発動、デッキトップから墓地へ3枚のカードを送り、エンドフェイズまで攻撃力を1500ポイントアップ」

《カードガンナー》 攻撃力400↓1900

墓地に落ちたカードは：《ダーク・アームド・ドラゴン》に《カオス・ソルジャー ―開闢の使者―》に《冥府の使者ゴーズ》。
：ありえない運の悪さだ。

僕の切り札的なカードが3枚も墓地に落ちちゃったよ。

というか《ダーク・アームド・ドラゴン》！ 君は毎回毎回、墓地に落ちすぎだよ！

もはや墓地が定位置になってるよ！

：あまりのことに若干めまいを覚えたけど、とりあえずここはバトルを続行しよう。

「バトル！ 《カードガンナー》でダイレクトアタック！」

「トラップカードオープン！ 《正統なる血統》！！

墓地から《ブラック・マジシャン》を復活させますわ！」

伏せていたのは蘇生カードだったのか。

「《カードガンナー》の攻撃は中止、バトルフェイズを終了させます。僕は2枚のカードを伏せてターンエンド」

「わたくしのターン、ドロー！」

さて：どうするつもりかな？

僕の伏せカードは《次元幽閉》に《砂塵の大竜巻》だ。

攻撃してきたら二度と蘇生できないように《ブラック・マジシャン》を次元の彼方へ葬れる。

万全の体制のはずだが…。

「手札から魔法発動！ 《黒・魔・導》ブラック・マジック！！！」

あなたの場の魔法・トラップをすべて破壊しますわ！」

そうだ、忘れていた。

《ブラック・マジシャン》の真価…それは数々のサポートカードにあることを。

「くう！ その効果にチェーンしてトラップ発動！」

《砂塵の大竜巻》！ 《正統なる血統》を破壊する！」

こちらの《次元幽閉》は破壊されてしまったが、代わりに《ブラック・マジシャン》を再び葬れた。
これで…。

「手札から魔法発動、《死者蘇生》！」

墓地から《ブラック・マジシャン》を復活させますわ！」

「また蘇生！？」

「バトル！ 《ブラック・マジシャン》で《カードガンナー》を攻撃！」

ブラック・マジック！！」

黒い波動に巻き込まれ、《カードガンナー》が粉々に砕け散った。

「くう！？」

遊輝

LP4000↓1900

「ターンエンドですわ」

「僕のターン、ドロ。僕は裏守備表示でモンスターを召喚。カードを2枚伏せてターンエンド」

「わたくしのターン！ ドロー！！ …ふふっ！」

笑った？

「これで終わりですわ！ 手札から《千本ナイフ》サウザンド発動！
そのモンスターを破壊しますわ！！」

！？

《ライトロード・ハンター ライコウ》が！？

「そして手札から魔法発動！ 《黒・魔・導》ブラック・マジック！！！！
あなたの場の魔法・トラップをすべて破壊しますわ！」

二枚目の《黒・魔・導》ブラック・マジック！！？
マズい、これが通ったらガラ空きだ！？

「速攻魔法発動！ 《月の書》！！
《ブラック・マジシャン》を裏守備表示にする！！」

伏せていた《聖なるバリアーミラーフォース》は粉々に碎け散るが、なんとかギリギリで防ぐことは出来た。

「くっ、運のいいこと！ わたくしはターンエンドですわ」

「くう…」

正直戦況は悪い。

こちらの場はガラ空きであちらの場には裏守備表示とはいえ強力な《ブラック・マジシャン》。

おまけにこちらは防御用のトラップの多くと、切り札の数々を失っている。

相手は豊富な蘇生カードを持っていることから、トラップが伏せられていない今が恐らく最大のチャンスだ。

このターンで《ブラック・マジシャン》を突破し、押しきる。次のドロロー、これに賭けるしかない！

「僕のターン、ドロオオオオー！！」

僕は気迫と共に引いたカードを見る。

そのカードは…。

「来た！ 魔法発動、《おろかな埋葬》！！

デッキの《グローアップ・バルブ》を墓地に送ります」

これで準備は整った。

母さん、使わせてもらおうよ！

「手札から《ジャンク・シンクロン》を通常召喚！

効果によって墓地の《ライトロード・ハンター ライコウ》を特殊召喚！

同時に、墓地からの特殊召喚が成功した場合、《ドッペル・ウオリアー》を手札から特殊召喚！

レベル2の《ライトロード・ハンター ライコウ》とレベル2の《ドッペル・ウオリアー》に、

レベル3の《ジャンク・シンクロン》をチューニング！」

☆2＋☆2＋☆3＝☆7

「冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の花よ、開け！
シンクロ召喚！現れよ、《ブラック・ローズ・ドラゴン》！」

《ブラック・ローズ・ドラゴン》 星7／炎属性／ドラゴン族／攻
2400／守1800

「な、何故そんなレアカードをあなたが！？ わたくしですら持っていないのに！」

喜多嬉さんが悔しそうに声を上げる。

父さんはこの街を救った英雄になった。

そんな父さんとその仲間を記念して、実は父さんたちのエースモンスターたちは数枚づつ生産され、世の中に出回っているのだ。

だが、これはそのとき量産されたものではない。

誕生日に母さんから贈られた、オリジナルのカード：真正正銘の母さんのエースカードだ。

誰もが現れた黒い薔薇の華麗なる龍の美しさに見とれる。

だが綺麗な薔薇には棘がある。

特にこの黒薔薇龍の棘は特大だ。

「《ブラック・ローズ・ドラゴン》の効果発動！

1ターンに1度、自分の墓地に存在する植物族モンスター1体をゲームから除外する事で、相手フィールド上に存在する守備表示モンスター1体を攻撃表示にし、

このターンのエンドフェイズ時までその攻撃力を0にする！」

「な、なんですって!？」

「墓地の《グローアップ・バルブ》を除外し、効果発動! ローズ・リストリクション!!」

《ブラック・ローズ・ドラゴン》から茨の触手が伸び、裏守備状態だった《ブラック・マジシャン》を縛り上げ、強制的に表側攻撃表示にした。

苦しみ悶える《ブラック・マジシャン》の攻撃力が0になる。

《ブラック・マジシャン》 攻撃力2500↓0

「バトル! 《ブラック・ローズ・ドラゴン》で《ブラック・マジシャン》を攻撃!

ブラック・ローズ・フレア!!」

「きゃああああ!!」

喜多嬉

LP2000↓0

ワアアアアアア——

「ありがとうございました。楽しいデュエルでした」

そう言って頭を下げると、尻もちをついた喜多嬉さんへと手を差し伸べる。

「ふ、ふん！ いまのは…負けて差し上げたのです！！
感謝することですわね！！」

赤くなりそっぽを向きながら、喜多嬉さんは僕の手を取って立ちあがった。

「ま、まあ、わたくしも楽しめましたわ。
褒めてあげてもよくってよ」

「あ、あはは…」

この人のどんな時でも変わらない姿勢には見習うところがあるかもしれない。

「それじゃ、僕はこれで…」

「お待ちなさい、不動遊輝」

会場から下がろうとしていた僕に喜多嬉さんが声をかけてきた。

「なんですか？」

「不動遊輝、生徒会は…いえ天宮照子はあなたの作ったライディングデュエル同好会をどうあっても潰すつもりですわ。」

全ては個人的な八つ当たりために…」

八つ当たり？

どういうことだろうか？

「わたくしも面白そうということでああなたの相手を受けましたが、わたくしに勝った以上、他の有象無象に負けることなど許さなくてよ！」

いいですわね!!」

おそらく、これがこの人流の精いっぱいの励ましなのだろう。

「ありがとうございます、喜多嬉さん。」

大丈夫、僕は負けません」

そうお礼を言って僕は会場を後にした。

これで一回戦突破、でもまだまだ四分の一を超えたにすぎない。

僕たちライディングデュエル同好会の、長い一日は始まったばかりだ。

…To be continued

ゆま「ゆまと！」

恵「恵の…」

ゆま・恵「今回の最強カード」

ゆま「いきなりの急展開！ 学園物の王道、部費争奪トーナメントが始まりましたね、メグちゃん」

恵「次回はゆまの戦いになる…ゆま、ふぁいと」

ゆま「はい！ 今から次回が楽しみです！！」

恵「…敵は恐らく今までの中で最強の敵らしいけど（ボソッ）」

ゆま「へ？ なんですか、メグちゃん？」

恵「何でも無い…。それより今回の最強カードは…これ」

《ブラック・ローズ・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター

星7／炎属性／ドラゴン族／攻2400／守1800

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、

フィールド上に存在するカードを全て破壊する事ができる。

1ターンに1度、自分の墓地に存在する植物族モンスター1体をゲームから除外する事で、

相手フィールド上に存在する守備表示モンスター1体を攻撃表示にし、

このターンのエンドフェイズ時までその攻撃力を0にする。

ゆま「アキおさんのエースカードですう！」

恵「出た瞬間、場をリセットできるのは強力。さらに召喚制限も緩く、シンクロ召喚を使用するデッキならほぼ間違いない入っているカード…」

ゆま「後半の効果は以前は植物族以外ではめったに使われなかったんですが、

《グローアップ・バルブ》、《スポーア》、《ローンファイア・ブロッサム》、《ダンディライオン》などデッキを選ばない優良カードが増えて、結構色んなデッキで見れるようになりました！」

恵「《冥府の使者ゴーズ》や《バトルフェーダー》のように、

ダイレクトアタックで効果を発動するモンスターの存在から、通常戦闘の方が都合がいい場合もある。

そんなとき今回のようにフィニッシャーになることも…どちらにしる良カード」

ゆま「今回はここまでです！」

恵「また次回…」

第05話 廃部危機！？ 開催、部活対抗トーナメント（後書き）

遂に出ました、シグナードラゴン。

アキさんは非シンクロ型植物族になり、ブラックローズは遊輝にプレゼントされました。

ちなみに遊輝の保有しているシグナードラゴンはこれだけです。

間違っても星屑龍とかは入っていませんのでご安心を。

第06話 ゆま、危機一髪（前書き）

何度テストプレイしても、デュエルがこれ以上長くならない…。
アニメみたいに長々戦うのは難しいなあ…。

第06話 ゆま、危機一髪

Side ??

ふふふ、あれが私の相手ね。

生徒会長に相手をしろって言われた時には、正直乗り気じゃなかったわ。

だって英雄の息子だって言っても、男だもん。

男なんて臭くって不潔でサイテー！

そんな汚いものなんかとデュエルなんかしたくない。

でも、実際に私の相手になるのは、何とも私好きな可愛い女の子。

天然ボケ巨乳っ子なんて、すっごく好み！

うん、これはもう、うちの部に連行：いやいや監禁：もとい保護するしかないわね！

そうとなれば、すぐにあの汚らしい男の魔の手からすぐに救い出してあげるからね。

待っててね、ゆまちゃん！

Side out

Side ゆま

「はう！？」

何でしょう、今ぞわって背中に悪寒が走りましたぁ！

「？ どうしたの、ゆま？」

「な、何でもありません、ユウくん」

心配そうに私の方を見てくるユウくん、私は愛想笑いを返すけど嫌な予感がひしひしとする。

そう、何か大切なものが狙われているような、すごい嫌な予感。

「ゆま、もう時間…」

「あ、はい！」

メグちゃんに言われて私は会場の方へと歩いて行きます。

今度の相手は女子テニス部部长、三年生の大庭ナオミ先輩です。

とっても強いって有名な人らしいんで、気を引き締めないと負けちゃいます。

「よし！ 行って来ます、ユウくん、メグちゃん、ケイト先生！！」

「頑張って、ゆま！」

「ゆま、応援してるから…」

「負けるんじゃないよ、ゆま！」

ユウくんたちの声援を背に、私は会場へと歩いて行きました。

「来たわね、ゆまちゃん」

「はい、お待たせしましたあ」

会場では、すでにナオミ先輩が待っていました。

仁王立ちで何やら自信満々…これは強そうです。

さっそくデュエルディスクにデッキをセットして準備に入ります。
すると、

「ねえ、ゆまちゃん。私と賭けをしない？」

「ほえ？　賭け、ですか？」

私は何のことか分からず、首を傾げる。

「生徒会長から聞いているわ。あなたたちのライディングデュエル同好会はこのトーナメントで優勝しないと廃部なんですよ？」

なら、この勝敗で賭けをしないかしら？

あなたが勝ったら…そうね、郊外のカイバーシーランドの年間フリーパスをあげるわ。

そのかわりあなたが勝ったら、私の女子テニス部に入部すること。

どうかしら？」

その言葉に、私は考えてしまいます。

この賭け、私に損がどこにもないのです。

カイバーシーランドの年間フリーパスはとっても魅力的ですし、このデュエルに負けたらライディングデュエル同好会は続けられない。だからその後、女子テニス部に入部というのも無理な話ではないです。

でも…。

（あう…何だか、すっごく嫌な予感がします…）

ナオミ先輩の視線がさつきからものすごく…こう、絡みつくみたいです。なんです。

でも魅力的な話だし…。

（助けて、私のHERO!）

そう心の中で叫ぶと、どこからか声が聞こえた気がした。

（ここで退いたら女がすたる!!）

女の子のHEROから、そんな声が聞こえた気がします。

「分かりました！ その賭け受けて立ちますです!!」

「OK、そうこなくっちゃ!」

私はデッキをデュエルディスクにセットする。

「デュエル!!」

ゆま↓LP4000

ナオミ↓LP4000

「先攻は私です! ドロー!」

あうう…手があんまり良くない…。

でも行くしかない!

「《E・HERO エアーマン》を通常召喚!」

《E・HERO エアーマン》 星4／風属性／戦士族／攻180
0／守 300

「《E・HERO エアーマン》の効果発動、デッキから「HERO」と名のついたモンスター1体を手札に加えます!

手札に加えるのは《E・HERO オーシャン》!

そしてターンエンド!」

「あら、伏せカード無し？ 手加減してあげようか？」

ナオミ先輩が鼻で笑います。

うう…そう言われても無いものはどうしようもないですう…。

「私のターン、ドロー！ 私は手札から《ライトロード・パラディン ジェイン》を通常召喚！」

《ライトロード・パラディン ジェイン》 星4／光属性／戦士族
／攻1800／守1200

「バトルよ、ジェインでそこの空気男を攻撃！」

く、空気男って…。

「ジェインは相手モンスターに攻撃する場合、ダメージステップの間攻撃力が300ポイントアップするわ！」

《ライトロード・パラディン ジェイン》 攻撃力1800↓2100

「ライトスラッシュ！！」

「あう！？」

ゆま

LP4000↓3700

ジェインの剣によってエアーマンが切り倒されてしまいました。
ごめんなさい、エアーマン。

「私は手札を2枚伏せターンエンド！ エンドフェイズ時、ジェインの効果によってデッキの上からカードを2枚墓地へ送る」

墓地に送られたカードは《ライトロード・プリースト ジェニス》
に《ライトロード・レイピア》。

「私はデッキから《ライトロード・レイピア》が墓地に送られたため、《ライトロード・レイピア》を「ライトロード」と名のついたモンスター1体に装備。ジェインに装備よ！

ターンエンド！！」

《ライトロード・パラディン ジェイン》 攻撃力1800↓2500

この一連の動きを見て、私はすぐにナオミ先輩のデッキが分かりました。

（はう！？ ライトロードですう！？）

ライトロード…光属性で統一されたシリーズモンスター群で、デッ

キから墓地にカードを送ることで強力な効果を発揮したり、モンスターを維持したりします。

デッキのカードがすごいスピードで墓地に落ちるため短期決戦用なのですが、まさに『やられる前にやる』デッキです。

考え方を変えると、墓地を肥やしてくれるカードなので色んなデッキでそのパーツが使われており、ユウくんも《ライトロード・マジシャン ライラ》と《ライトロード・ハンター ライコウ》を使っています。

確かメグちゃんも使っていたような…。

それだけ優秀なカードたちであり、それを操るナオミ先輩はとんでもない強敵です。

お願い、いいカードが来て！

「私のターン。 ドロー！ …ほえ？」

「何？ 変なカードでも引いたの？」

いえ、変と言うより…。

「手札から今引いた魔法カード《大嵐》を発動ですう」

「なっ！？ このタイミングで引いたの！」

ナオミ先輩が驚きの声を上げますが、私だってびっくりです。

本当にいいカードが来ちゃいました。

ナオミ先輩の2枚の伏せカードと、《ライトロード・レイピア》が砕け散ります。

《ライトロード・パラディン ジェイン》 攻撃力2500↓18

00

砕けた伏せカードは《ライト・パニッシュ》と《ライトロード・バリア》だった。

ふう…よかったです。

そして…私はフェイバリットカードが召喚出来ます！

「行きます！ 手札から魔法発動、《融合》！

手札の《E・HERO ネクロダークマン》と《E・HERO オーシャン》を融合！

来て、私のフェイバリット！ 《E・HERO アブソルートZero》！」

《E・HERO アブソルートZero》 星8／水属性／戦士族
／攻2500／守2000

瞬間、私のフィールドに現れたのは氷を纏ったHEROでした。
氷のようにクールで、熱い激情を心に秘めたそのHEROが静かに私の隣に降り立ちます。

「バトル！ アブソルートZeroでジェインに攻撃！
瞬間氷結！！」

アブソルートZeroから放たれた絶対零度の吹雪が、ジェインを粉々に砕きました。

ナオミ

LP4000↓3300

「私はカードを1枚伏せてターンエンドです」

「くっ…結構強力なモンスターじゃないの！ 私のターン、モンスターを裏守備表示で召喚、さらに1枚カードを伏せてターンエンドよ！」

「ナオミ先輩のエンドフェイズに私はトラップ発動！ 《リビングデッドの呼び声》で《E・HERO エアーマン》を特殊召喚です！そして《E・HERO エアーマン》の効果発動、その伏せカードを破壊します！」

「な、なんですって！？」

砕けた伏せカードは…ミラーフォース！？
危なかったです。でもこれで心おきなく攻撃出来ます。

「私のターン、ドロー！ 《E・HERO プリズマー》を攻撃表示で召喚！」

《E・HERO プリズマー》 星4／光属性／戦士族／攻170
0／守1100

「《E・HERO プリズマー》の効果発動、エクストラデッキから融合モンスター1体を相手に見せ、そのモンスターにカード名が

記されている融合素材モンスター1体を自分のデッキから墓地へ送って発動。このカードはエンドフェイズ時まで墓地へ送ったモンスターと同名カードとして扱う。

私は《E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン》を見せ、その融合素材の《E・HERO スパークマン》を墓地に送り、このターンの間プリズマーはスパークマンとして扱います。

リフレクト・チェンジ！！

そしてバトルです！

プリズマーで裏守備モンスターに攻撃！

プリズムレイ！」

「く…このカードは《ライトロード・ドルイド オルクス》よ」

《ライトロード・ドルイド オルクス》 星3／光属性／獣戦士族
／攻1200／守1800

「あう…」

ゆま

LP3700↓3600

失敗しました。プリズマーでは防御を突破出来ません。

先にアブソルートZeroで攻撃をしておくべきでした…。

「ではアブソルートZeroでオルクスに攻撃！

瞬間氷結！！

さらにエアーマンでダイレクトアタック！ エア・プレッシャー
！！」

「くう…」

ナオミ

LP3300↓1500

「私はターンエンドです！」

「くう、なんなのよそのうざいモンスターたち！ インチキ、イン
チキよ！！」

ナオミ先輩が劣勢のためかHEROたちをインチキ呼ばわりしてき
ます。

ライトロードは十分インチキの部類に入る強さだと思っています。
それでどの口がインチキと言いますですか…。

それにデュエリストとして、ちよつと感心出来ないう…。

「私のターン、ドロオオオー！！」

そんな風に私の中でナオミ先輩の評価がダダ下がりなのですが、ナ
オミ先輩がカードをドロした瞬間に、背中にゾクリと悪寒が走り
ました。

はう！　　すごくマズイ予感が…。

「私は手札から《光の援軍》を発動。デッキの上からカードを3枚
墓地へ送って、手札に《ライトロード・パラディン ジェイン》を

加える！

これが勝負所よ！」

そう言ってデッキから墓地に落ちて行くカードは《ライトロード・モンク エイリン》に《ライトロード・エンジェル ケルビム》、そして《死者転生》です。

それを見て、ナオミ先輩は笑いました。

「私は賭けに勝った！」

墓地の「ライトロード」と名のついたモンスターが4種類以上存在する今、私の切り札が召喚できる！

手札から《裁きの龍》ジャッジメント・ドラグーンを特殊召喚！」

《裁きの龍》ジャッジメント・ドラグーン 星8／光属性／ドラゴン族／攻3000／守2600

146

閃光が走り、光の中から一体のドラゴンが現れます。
その神々しさに私は思わず、怯んじやいました。

「ライフを1000ポイント払い《裁きの龍》ジャッジメント・ドラグーンの効果発動！！

《裁きの龍》以外のフィールド上に存在するカードを全て破壊する！ ラスト・ジャッジメント！！」

ナオミ

LP1500↓500

瞬間、《裁きの龍》ジャッジメント・ドラグーンの咆哮に答えるように、稲妻が降り注ぎます。

その直撃を受けて私のHEROたちが砕け散って行きました。
でも：私のHEROたちはタダではやられません！

「《E・HERO アブソルートZero》の効果発動！

フィールド上から離れた時、相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊するです！

砕け散れ、エターナルアイスブリザード！！」

効果、のモンスター相手は死ぬ、ですう！

絶対零度の猛吹雪に巻き込まれ、凍りついた《裁きの龍》ジャッジメント・ドラグーンがバリんと音をたてて砕け散りました。

「でもこれですっきりしたわ！ 私は手札から《ライトロード・パラディン ジェイン》を通常召喚！」

《ライトロード・パラディン ジェイン》 星4／光属性／戦士族
／攻1800／守1200

「バトルよ、ジェインでダイレクトアタック！！」

ゆま

LP3300↓1500

「そしてターンエンドよ。 エンドフェイズ時、ジェインの効果によってデッキの上からカードを2枚墓地へ送る」

墓地に送られたカードは《ライトロード・ハンター ライコウ》に
《ライトロード・ドラゴン グラゴニス》。

「あう…」

一気にライフを詰められてしまいました。

これで私も、ナオミ先輩の射程圏内に入ってしまった。

とはいえ、私の2枚の手札は《Eーエマーゲンシーコール》に《
パレル・ワールド・フュージョン
平行世界融合》。

これなら次のターンで決められそうで…。

そこまで考えた時、私はゾクリと背中に悪寒が走るのを感じました。
ナオミ先輩が1枚手札を残している…。

この土壇場なら使えない罫も魔法も、伏せればブラフにはなります。
そうしないところをみるとあれはモンスターカード。

でもそれで一体、なんでこんなにイヤな予感が…？

そこまで考えて、私はハッと気付きました。

そうです、ライトロードは『光属性』で統一されたシリーズ。
いるじゃないですか、光属性の強力サポートカードで、手札にいな
いと意味の無いモンスターカードが…。

…ダメです、あの最後の手札が私の考えている通りなら、この2枚
の手札だけじゃ勝てません。

次のドロ―、これが運命の分かれ道です。

私は祈る思いで、カードに手を伸ばします。

「おじいちゃん、私に力を…ドロオォー、ですうー!!」

そして引いたカードは…。

S i d e o u t

S i d e ナオミ

ふう：一時はどうなる事かと思ったけど、勝ちが見えたわね。

ゆまちゃんのデッキは明らかなパワーデッキ、ジェインを戦闘で破壊して突破を試みるだろう。

だがそれならこっちのもの、そのパワーをそっくりお返しするまでだ。

私の最後の手札：それは《オネスト》だ。

手札に《オネスト》がある以上、私に戦闘での敗北はありえない。

ジェインに攻撃をしかけて来た時：それでゲームエンドよ。

そうすれば晴れて、ゆまちゃんは私のハーレム：じゃなかった、女子テニス部に入部だ。

さあ、ゆまちゃん、男なんてばっちいものより、綺麗で清潔な女の子のほうがずっといいって言うことをこれから手とり足とり教えてあげるわ。

「私に力を：ドロオオー、ですう！！」

ゆまちゃんがカードをドロースるけど、無駄よ無駄。

そうそうこの状況を突破できるカードなんて引けるはずが…。

「やったあ！　ありがとうございます、おじいちゃん！」

ゆまちゃんが引いたカードを手に満面の笑み。

まさか…この状況で勝利のキーカードを引いたというの！？
何よ、そのドロー運！　インチキ、インチキよ！！

S i d e o u t

S i d e ゆま

「やったあ！　ありがとうございます、おじいちゃん！」

引いたカードは今を打開してくれる勝利のカードでした。

祈りを聞き届けてくれたおじいちゃんに感謝、です。

あ、ちなみにおじいちゃんは別に元気ですよ。

田舎で今でも近所の子供たち相手にデュエルしてます。元気すぎるって、明日香おばあちゃんが呆れてました。

「私は手札から《Eーエマーシェンシーコール》を発動させます。
この効果で《E・HERO　エッジマン》を手札に加えます」

「この状況で最上級モンスターを手札に？」

ナオミ先輩は訳が分からないようです。

確かにリリースが2体必要になる最上級モンスターを、このタイミングで手札に加えても普通意味はありません。

でも：それを墓地にいる《E・HERO ネクロダークマン》が意味をもたせます。

「墓地の《E・HERO ネクロダークマン》の効果によって、1度だけレベル5以上の「E・HERO」と名のついたモンスター1体をリリースなしで召喚する事ができます。

《E・HERO エッジマン》を通常召喚！」

《E・HERO エッジマン》 星7／地属性／戦士族／攻2600／守1800

攻撃力満点の、巨躯を誇るHEROエッジマンが場に現れます。これで勝利のための全てのピースが揃いました。私はさっき引いたカードを発動させます。

「私は手札から魔法発動、《ミラクル・フュージョン》ですう！」

《ミラクル・フュージョン》は自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、「E・HERO」という名のついた融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚します」

そう、だからこそ《E・HERO エッジマン》を場に召喚する必

要があつたんです。

そしてこの状況を突破するHEROは…。

「場の《E・HERO エッジマン》と墓地の《E・HERO スパークマン》を除外。

来て私のHERO！ 《E・HERO プラズマヴァイスマン》
ですう！！」

《E・HERO プラズマヴァイスマン》 星8／地属性／戦士族
／攻2600／守2300

「《E・HERO プラズマヴァイスマン》の効果発動です。手札を1枚捨てる事で相手フィールド上の攻撃表示モンスター1体を破壊します」

「な、なんですって！」

「手札の《パラレル・ワールド・フュージョン平行世界融合》を捨て、《ライトロード・パラディンジェイン》を破壊します！
スパークヴァイス！！」

プラズマヴァイスマンから放たれた雷撃が、ジェインを押しつぶしました。

私の思っているとおり、手札が《オネスト》なら単体では何の役にも立ちません！

これでナオミ先輩を守るものは何もないはずです！

「バトル！ 《E・HERO プラズマヴァイスマン》でダイレク

トアタック！

プラズマエッジ！！」

「ぎゃああああ！！！！」

ナオミ

LP500↓0

「やったあ！ ラッキーでした！！」

本当にラッキーでした。最後にあの引きが出来なかったら恐らく負けていたと思います。

「く、くやしいい。 私の計画が…」

ナオミ先輩は心底悔しそうです。

やっぱりデュエリスト、自分の信じたデッキが負けたから悔しいんだと思います。

「ナオミ先輩、ありがとうございました。

それと…」

私はぺこりと頭を下げ、そしておじいちゃんから教わったあの言葉

を言います。

「ガッチャ！　楽しいデュエルでした！」

そう言うのと、悔しそうにしていたナオミ先輩は毒気が抜けたような顔を見せた後、コロコロと笑いました。

「ふう…やっぱりあなた、私が見込んだだけあって憎めないわね」

「あはは、ありがとうございますです」

「約束通り、今度フリーパスはあげるわ」

そう言って手を振りながら会場から去って行こうとするナオミ先輩。その途中、ナオミ先輩は思い出したかのように振り向きました。

「そうそう、女子テニス部への入部はいつでも大歓迎だから、ライディングデュエル同好会が潰れることになったらいつでも来なさい。無論、それ以外でも来ていいわよ。

掛け持ちだって大歓迎。

私、あなたのことますます気に入っちゃったから」

そう言ってニヤリと笑うナオミ先輩に、何故かぞくりと悪寒が走りました。

「…女子テニス部に近付くのはやめた方が良さそうです」

そんな風に私は心に決めたのでした。

……To be continued

ゆま「ゆまと!」

恵「恵の…」

ゆま・恵「今回の最強カード」

ゆま「初デュエルを勝利で飾り、今なら誰にも負ける気がしねえ!
って感じのゆまですう」

恵「ゆま、それは負けフラグ…」

ゆま「ほえ?」

恵「それより今回の最強カードの紹介…」

ゆま「そうでした! 今回の最強カードはこれですう!」

《E・HERO アブソルートZero》

融合・効果モンスター

星8／水属性／戦士族／攻2500／守2000

「HERO」と名のついたモンスター＋水属性モンスター
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードの攻撃力は、フィールド上に表側表示で存在する

「E・HERO アブソルートZero」以外の

水属性モンスターの数×500ポイントアップする。

このカードがフィールド上から離れた時、

相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

恵「…トドメをさしたカードじゃないけど、いいの？」

ゆま「はい、この子が私のフェイバリットカードですう！」

恵「…そのフェイバリットの出番が敵を巻き込んで退場、トドメを
他に任せるといふのはどうなの？」

ゆま「はう！？ まあ、今回は仕方なしですう」

恵「…まあいい。 このカードは強力な効果を持つ属性HEROの
中でも特に強力」

ゆま「擬似的とはいえ、あの禁止カード《サンダー・ボルト》の効
果は凄いですう！

しかも墓地に落ちた時じゃなく、『フィールド上から離れた
時』なので除外だろうとバウンスだろうと効果が発動します！

《亜空間物質転送装置》や《パラドックス・フュージョン》
なんかと抜群に相性がいいです」

恵「…攻撃力の上昇効果も悪くない。 水属性は優良なカードに恵
まれてる」

ゆま「あと今回はできませんでした。が、《M・HERO ヴェイパー》に繋げるのもいい感じです。

ダイレクトアタック後、《マスク・チェンジ》で《M・HERO ヴェイパー》に変えて合計4900ダメージとかお得です」

恵「…伝統的な主人公モンスターの攻撃力2500のステータス、強力な効果、そして外見…まさに最強のHERO」

ゆま「私のお気に入りですう！」

恵「今回はここまで…」

ゆま「次回はメグちゃんの試合です。メグちゃん、がんばって！」

恵「うん…」

第06話 ゆま、危機一髪（後書き）

遊輝がシンクロによる柔軟な戦術なら、ゆまは融合による爆発力と祖父譲りのドロール力で戦うタイプ。

HERO、ライロともにパワーカードで決まる時は一瞬になってしまうのでデュエル展開を考えるのが大変でした。

HEROは選択肢がたくさんある分、考える事が多くて：正直今までで一番難儀したデュエルです。

次回はずっと頭抱えるデュエルです。

第07話 それぞれの戦う理由（前書き）

今回は恵ちゃんの初陣です。

第07話 それぞれの戦う理由

Side ??

ちくしょお、生徒会長のヤロー！

ライディングデュエル同好会に勝たなきゃ、あいつの部活が廃部だあ！？

好き勝手言ってくれやがって！！

：ちい！ 気にくわねえけど、やるしかない。

ライディングデュエル同好会のやつらも、どうやら優勝できなきゃ廃部らしい。

同じような境遇で同情はしてやるが、どうあっても勝たせてもらうぜ。

でも：生徒会長、テメエの思い通りに行くと思うなよ！

ライディングデュエル同好会をぶっ潰したら、次はテメエだ！！

決勝戦の舞台で、必ず吠えづらかかせてやる！！

Side out

Side 恵

「…問題ない」

そろそろ準決勝の時間。

私は最終確認をしたデッキをデュエルディスクへセットする。

ユウもゆまも勝った。

私も勝って繋げなければならない。私たちライディングデュエル同好会の存続への希望の道を…。

「恵、頑張って」

「メグちゃん、ファイトですう！」

「負けんじゃないよ、恵！」

「大丈夫…任せてほしい…」

私は頷くと、大会会場へと歩き始めた。

相手は二年生でも最強ランクに位置する紬紫先輩率いる茶道部だ。

でも…負けない。倒してみせる。

そう思いながら会場へと到着した私を出迎えたのは、意外な人物だった。

「…来やがったな、ライディングデュエル同好会」

「…?」

そこには赤い野球帽をかぶった女子の姿があった。
制服の学年を表すラインから、二年生だとわかる。

鋭い目つきと言葉遣いから、ボーイッシュというより男らしいと言った方がしっくりくる。

この人は確か…。

「…ジャッカルⅡ岬?」

「先輩を付けな、一年!」

私の言葉に、岬先輩は機嫌を悪くしたように吠える。

…これは悪いことをしたかもしれない。

「…失礼しました、岬先輩」

「わかりやいいんだよ、わかりゃ」

そう言って帽子を深く被りなおす岬先輩。

彼女、ジャッカルⅡ岬は、この学園でも有名な人だ。

自称『デュエルアカデミアの女番長』。口調も性格も荒っぽく、ケンカっ早い。

デュエルの腕も凄まじく、二年の中では紬紫先輩と並び最強の一人として数えられている人だ。

しかし…。

「…質問?」

「なんだよ？」

「…私たちの相手は…茶道部のはず。 …茶道部？」

「合わない、ってか？」

「はい。 どう鼻屑目に見ても茶道部に合わない…」

「はっきり言うな、一年」

私の言葉に、岬先輩は苦笑する。

「安心しな、俺にもその自覚はある。

紫とはダチでな、俺は人数合わせの部員だよ。

紫は身体が弱くてな、かわりに俺がお前らライディングデュエル同好会をぶっ潰すことになった！」

「岬先輩も…生徒会からの刺客？」

「…ああ」

目をそらすように目深に帽子を直しながらのその言葉に、私は眉をひそめる。

伝え聞いた彼女の人柄とは違う。彼女は曲がったことが嫌いで、それに助けられた生徒も多く一年生の間で人気がある。

今回の生徒会からの圧力は彼女の言うところの『曲がったこと』だろう。

それに静観するのならまだしも、協力するというのはいくらなんでもおかしい。

「とにかく、お前の相手はこの俺だ。悪いがブツ潰させてもらおうぜ！」

どっからでもかかってこいやー!!」

「…私も…負けられない。

勝敗を…!!」

「「デュエル!!」」

恵↓LP4000

岬↓LP4000

「…私の先攻、ドロー。…モンスターを裏守備表示。カードを1枚伏せターンエンド」

「俺のターン、ドロー! 手札からチエーンソー・インセクト《電動刃虫》を召喚!」

チエーンソー・インセクト《電動刃虫》 星4／地属性／昆虫族／攻2400／守 0

私はそれを見て眉をひそめる。
チエーンソー・インセクト

《電動刃虫》は上級モンスター並みの攻撃力を持つが、ダメージス

テップ時に相手プレイヤーにドロローを許すデメリットを持つカードだ。

通常のデッキに入るモンスターではないが…。

「シメてやるよ…バトル！　チェーンソー・インセクト《電動刃虫》で裏守備モンスターに攻

撃！

スタッグチェーンソー！！」

「裏守備表示モンスターは《ライトロード・ハンター ライコウ》。
…効果により墓地にデッキトップから3枚のカードを送りチェーンソー・インセクト《電動刃虫》を破壊する…」

墓地へ落ちたカード…《馬頭鬼》に《リビングデッド呼び声》に…
《オネスト》。

《馬頭鬼》が落ちたのはうれしいが、戦闘能力が低い私のデッキの切り札である《オネスト》が落ちたのはいただけない。

「さらにチェーンソー・インセクト《電動刃虫》の効果で私はカードをドロロー…」

「ちい…俺はカードを二枚伏せターンエンドだ」

「…そちらのエンドフェイズ時、伏せカード発動、《サイクロン》
…右側のカードを破壊…」

砕け散る伏せカード。それは…。

「…《スキルドレイン》」

そのカードを見て、私は彼女のデッキを悟る。
彼女のデッキ、それは《スキルドレイン》によって攻撃力のあるデ

メリットアタッカーのデメリットを無効化し、相手を圧倒するデッキだ。

除去カードが少なく、効果によって戦う私のデッキでは相性が悪い。

（《スキルドレイン》発動前に決着を…！）

私は若干の焦りを持ちながら自分のターンを開始した。

「私のターン、ドロー。手札から魔法カード、《死者蘇生》を発動…」

「させるかよ！ カウンター罠《魔宮の賄賂》！ 《死者蘇生》を無効だ！」

伏せカードは《魔宮の賄賂》だった…運がいい。

最初の《サイクロン》で《スキルドレイン》を破壊出来ていなかったら、除去は困難なものになっていただろう。だがこれで後顧の憂いなく攻められる。

「《魔宮の賄賂》の効果によって私はカードを1枚ドロ…。
手札から《闇竜の黒騎士》ブラックナイト・オブ・ダークドラゴンを通常召喚…」

《闇竜の黒騎士》ブラックナイト・オブ・ダークドラゴン 星4／光属性／アンデット族／攻1900／守1200

「バトル、《闇竜の黒騎士》ブラックナイト・オブ・ダークドラゴンで攻撃…大きいの…」
「くう!？」

岬

LP 4000 ↓ 2100

「だがこの瞬間、俺は手札から《冥府の使者ゴーズ》を特殊召喚するぜ！」

《冥府の使者ゴーズ》 星7／闇属性／悪魔族／攻2700／守2500

「さらに効果によって「冥府の使者カイエントークン」を召喚！」

「冥府の使者カイエントークン」 星7／光属性／天使族／攻1900／守1900

「むう…」

ゴーズを召喚してしまった。全体的に戦闘能力が低く、除去の少ない私のデッキにとってこのクラスの攻撃力のモンスターはかなり強大だ。

「…私はカードを2枚伏せ、ターンエンド…」

「俺のターン、ドロー！ 来やがったぜ、俺のエース！」

手札から《神獣王バルバロス》を召喚！

このカードは最上級モンスターだが攻撃力を1900にすることでリリースなしで通常召喚する事ができる！」

《神獣王バルバロス》 星8／地属性／獣戦士族／攻1900／守1200

これ以上モンスターを増やされるのはまずい。

「…トラップカード発動、《激流葬》。

フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する…」

私の《闇竜の黒騎士》ブラックナイト・オブ・ダークドラゴンも破壊されるが、相手のモンスター3体を破壊出来た。

これなら…。

だが、岬先輩はニイっと凶悪な笑みをもって私の自信を打ち消した。

「読んでたぜ、手札から魔法発動《死者蘇生》！

墓地の《神獣王バルバロス》を復活だ！」

《神獣王バルバロス》 星8／地属性／獣戦士族／攻3000／守1200

墓地からの特殊召喚のため、攻撃力が通常の3000の状態でバルバロスが復活してきた。

「さらに最後の手札、装備魔法《愚鈍の斧》をバルバロスに装備、攻撃力を1000ポイントアップ」

《神獣王バルバロス》 攻撃力3000↓4000

「!？」

一撃必殺の攻撃力圏内!？

「オラ！ この一撃で終わりだ！ 《神獣王バルバロス》でダイレクトアタック！

トルネード・シェイパー!!」

「速攻魔法発動、《収縮》…。《神獣王バルバロス》の攻撃力を下げる…」

《神獣王バルバロス》 攻撃力4000↓2500

「それでも十分だ！ ぶっ飛べ、オラァ!!」

「くっ…痛い…」

恵

LP4000↓1500

「俺はこれでターンエンドだ」

「私のターン…」

私は焦りを含みながらカードへと手をかける。

私のデッキは墓地からの特殊召喚がしやすいアンデット族を大量展開し、相手を倒すデッキだ。

だが、アンデット族には除去系の効果を持つモンスターはほぼ皆無…その弱点を補うため《ライトロード・ハンター ライコウ》などの相性のいい除去カードを加えている。

だが、除去カードの絶対数は他のデッキよりも少ない。引き当てられるだろうか…？

「ドロー…」

引いたカードは…ダメ、除去系カードじゃない…。

「モンスターを裏守備表示で召喚…ターンエンド…」

「ハーン…俺のエースに手も足も出ないみてえだな…俺のターン、ドロー…！」

俺はスタンバイフェイズに《愚鈍の斧》の効果で500ポイントのダメージを受ける！」

岬

LP 2100 ↓ 1600

「へへっ…これで終わりだ！」

《ゴブリン突撃部隊》を召喚！」

《ゴブリン突撃部隊》 星4／地属性／戦士族／攻2300／守0

「攻撃力2300…」

「バトル、《神獣王バルバロス》で裏守備モンスターに攻撃！
トルネード・シェイパー！」

あっさりと破壊されたカードは《ネクロ・ガードナー》だ。
これでこのターンを凌ぐ。

「続けて《ゴブリン突撃部隊》の攻撃！」

「墓地の《ネクロ・ガードナー》を除外し効果発動…。
相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする。

この効果で《ゴブリン突撃部隊》の攻撃を無効にする…」

私に向かって突撃をしかけてきたゴブリンたちは、私のそばに影のように現れたネクロ・ガードナーの不可視の盾によって防がれていた。

「運のいい奴だな…《ゴブリン突撃部隊》を効果によってバトルフェイズ終了時に守備表示に変更、これでターンエンドだ」

「私のターン…」

私にはすでに後が無い。

そう何度も4000を超える攻撃力を凌ぐことはできない。

そう思ってた札を見るが、除去のカードなどは無く単純に壁の役割しかこなせないものばかり。

今回のようにモンスターカードを引かれ、2体で攻撃されればどうしようもない。

しかし…今の手札でも、あのカードを引くことができれば勝利できる。

私のアンデットデッキを中核を成すあのカードを…。

「どんなカードを引こうが、勝つのは俺だ。

茶道部は俺が守る！」

茶道部を守る？

岬先輩の良く分からない言葉に、私はそのまま聞き返した。

「岬先輩…どういうこと？」

「…こっちもお前らと同じだ。生徒会長のヤツにお前らに勝たなきゃ廃部を言い渡されてんだよ。

紫はな、身体が弱くて学校に来ても保健室とを行ったり来たりだ。そのせいで留年だってしちゃってる…。

茶道部はな、そんな紫の学校での心許せる数少ない場所なんだよ。その場所を俺は守る！！」

「…」

「生徒会長のヤツのやり口は気に入らねえ。でもあいつの居場所を守るためなら…俺は汚れ仕事だって請け負ってやるさ。」

だから…ライディングデュエル同好会、お前らを潰す！

お前らも、生徒会長もぶっ潰してあいつの居場所を守ってやるんだよ！」

…そうか。このトーナメントに何かを賭けているのは私たちだけではなかったのか…。

それぞれの理由と、それぞれの訳…それがこのトーナメントには入り組んでいる。
でも…。

「私は…退かない…！」

そう、私はユウとゆまが繋げたものを無駄にできない。

ユウとゆまと、楽しく語り合ったライディングデュエルの世界を旅したい。
だから…。

「俺だって退けるかよ。だからデュエリストらしく全力でかかってこい。」

俺のエースを踏み越えられるもんならな…！」

「超えて見せる、このドローで…！」

これがラストドロー。

カードたちよ…私の声に応えて…！

「最後に…ドロー…！」

私は決意と共にカードを引いた。そのカードは…。

「…来てくれた」

私の願いに応えてくれたカードたちに、少しの笑みがもれる。
そして私は真っ直ぐに岬先輩を見ながら言った。

「岬先輩…あなたのバルバロスを倒す…！
手札から《邪神機一獄炎》ダークネスギアを召喚…！」

《邪神機一獄炎》ダークネスギア 星6／光属性／アンデット族／攻2400／守1400

「このカードはリリースなしで召喚する事ができる。但し、この方法で召喚したこのカードは、エンドフェイズ時にフィールド上にあるこのカード以外のアンデット族モンスターが存在しない場合、墓地へ送られる。」

この効果によって墓地へ送られた時、私はこのカードの攻撃力分のダメージを受ける…」

「成程、バルバロスと同じ妥協召喚能力か…。
でもバルバロスの攻撃力の足元にも及ばないぜ」

確かにそう。今のままでは、バルバロスには勝てない。
だが、今引いたこのカードを使えば話は違う。

「私は手札からフィールド魔法を発動…！」
アンデットワールド

瞬間、周囲の景色が変わる。
そこにあるのは毒の沼に、骨。屍の山に、漂う瘴気。

死者の世界がそこにはあった。

「なんだこりゃ!？」

「…ようこそ先輩。死人の世界へ。」
アンデットワールド

ここは不死者だけが存在を許される、禁じられた世界。

その効果によってアンデット族以外のモンスターのアドバンス召喚をする事はできず、フィールド上及び墓地に存在する全てのモンスターをアンデット族として扱う」

「はん、何か思えば種族変更のカードか。そんなもんでこの状況が変わるはずが…」

「いいえ、変わる…。それを…今、証明する。」

墓地の《馬頭鬼》の効果を発動。このカードをゲームから除外する事で、自分の墓地からアンデット族モンスター1体を選択して特殊召喚する…。

《アンデットワールド》の効果によって、お互いの『墓地』に存在する全てのモンスターはアンデット族として扱っている…。

不死者として…蘇れ《オネスト》!」

《オネスト》 星4／光属性／アンデット族／攻1100／守1900

そう、そのために墓地にいるモンスターの種族すら変更する《アンデットワールド》が必要だったのだ。

アンデットは墓地からの復活がかなり容易な種族だが、除去カードが少ないことと戦闘能力が低いという弱点がある。

それを補うのがこの《オネスト》だ。
低い攻撃力を補い、《オネスト》をアンデット族専用の蘇生カード
で使い回す…それが私の『光アンデット』デッキのコンセプトだっ
た。

「そして《オネスト》の効果によって、《オネスト》は私の手札に
戻ってくる。

来い、《オネスト》」

手札に戻った《オネスト》と、場にいる光属性の《邪神機一獄炎》ダークネスギア。
これならば攻撃力の差など関係無い。

「バトル！ 《邪神機一獄炎》ダークネスギアで《神獣王バルバロス》に攻撃。
カオスヘルフレア！」

「迎え撃て、バルバロス！ トルネード・シェイパー！」

獄炎の放つ炎の中を、バルバロスが意にも介さず一直線に駆け抜け
抜ける。

「ダメージステップ時、《オネスト》を墓地に捨て効果発動。
獄炎の攻撃力をアップする！」

炎を吐き散らす獄炎の背後に、後光とともにオネストが現れる。
そしてオネストの後光と共に獄炎の炎が勢いを増した。

《邪神機一獄炎》ダークネスギア 攻撃力2400↓6400

炎を突き進んでいたバルバロスの歩みが止まる。
そして勢いを増した業火はバルバロスを打ち砕いた。

「俺の…負けか」

岬

LP1600↓0

「負けちゃったか…」

「…」

息を吐く岬先輩に、私は何も告げられないでいた。私たちに勝たなかったら、茶道部は廃部だという。
私は…。

「あん？ そんな辛気臭い顔してんじゃねえぞ、一年」

いつの間にか近寄ってきた岬先輩は、私の顔を覗き込みながらそんなことを言う。

「こいつは公平なデュエルの結果だ。俺だってデュエリスト、デュエルの結果には従うよ。」

…あいつの茶道部を守ってやれなかった、ってのは残念だけだな」
そう言って空を仰ぐ岬先輩。

「まあ、よく考えればあいつとの絆がこれでなくなるわけじゃねえんだ。

茶道部が無くたって、あいつの落ち着ける場所と一緒に探してやるさ…」

そう清々しく言う岬先輩だが、その顔はどこか悔しそうで…。
だから、私は思わず言ってしまった。

「先輩…あなたたちの分まで…ユウが生徒会長に手痛い一撃を届けてください。

だから…」

「おいおい、慰めかい、一年？」

「…」

「だがまあ…俺に勝ったお前がそこまで信じる男だ。
任せるよ」

そう言って岬先輩は被っていた野球帽をポンと私にかぶせた。

「頼むぜ。あの生徒会長をギャフンと言わせてやれ」

「はい、必ず…」

岬先輩の言葉に私は強く頷いた。

その答えに納得したのか、岬先輩は私の頭をポンポンと叩くと、後ろ手に手を振りながら舞台から降りて行く。

「じゃあな、一年。次は勝たせてもらうぜ」

「…私も負けません」

ゆっくりと去っていく岬先輩の背中に、私は頭を下げる。

それぞれに、それぞれの戦う訳がある。

私たちは今、誰かの戦う訳を押しつけてこの場所に立っている。だから、負けられない。

そして…この集う想いをユウなら形にしてくれる。

私も会場を後にすることにした。

託されたものをしっかりとその胸に感じながら…。

…To be continued

ゆま「ゆまと!」

恵「恵の…」

ゆま・恵「今回の最強カード」

ゆま「メグちゃん、初デュエル勝利おめでとーですう！」

恵「ありがとう、ゆま…。でも…本音を言うと不完全燃焼。

スキルドレインデッキ相手なのにスキルドレインが発動していなのはどうなのだろう…？」

ゆま「それですが作者曰く、

『何度TFでテストプレイをしてもスキルドレインを本気で発動したら勝てん！』

…ということでこうなったみたいです。

実際に組んだデッキで戦うと、今回みたいにメグちゃんが《オネスト》使い回して勝つか、愚鈍+バルバで一撃死かという状態だったみたいですよ、LP4000ルールだと」

恵「…やはりLP4000だと戦闘の短期化が問題になる…」

ゆま「それは作者も頭を悩ませてるみたいです。それじゃ今回のカード、これですう…！」

《オネスト》

効果モンスター（制限カード）

星4／光属性／天使族／攻1100／守1900

自分のメインフェイズ時に、フィールド上に表側表示で存在するこのカードを手札に戻す事ができる。

また、自分フィールド上に表側表示で存在する光属性モンスターが戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを手札から墓地へ送る事で、

エンドフェイズ時までそのモンスターの攻撃力は、

戦闘を行う相手モンスターの攻撃力の数値分アップする。

ゆま「あの…メグちゃんのデッキって『アンデット』ですよ？

いいんですか、この子紹介しちゃって？」

恵「いい。 3人の中でこのカードを使うのは私だけだし、どう考えても今回の最重要カードはこの子…」

ゆま「メグちゃんがいいならいいですが…。

この子はどうでもなく強力な効果を持っています」

恵「このカードのおかげで、どんな光属性モンスターでも戦闘勝利が可能になる…。

デュエルで《月明かりの乙女》にこれを使ってきた猛者を、作者は現実に見たことがある…。

恐らく計算を狂わされるカード、ナンバーワンに輝くと思う…」

ゆま「前半の効果も、今回のように蘇生から手札というように容易に手札に戻って再利用が可能ですよ」

恵「光属性…ただそれだけで攻撃をためらわせる…。

まさに悪魔のカード…」

ゆま「いえ、天使ですけど」

恵「…今回はここまで。 次回遂に決勝戦…ユウ、頑張っ…」

ゆま「また次回ですよ！」

第07話 それぞれの戦う理由（後書き）

デュエルはちよつと不完全燃焼気味。

恵の『アンデット』も岬の『スキルドレイン』も上手く表現できてない気がする…。

精進が必要ですね。

第08話 その憎悪を砕け（前編）（前書き）

第二部、部費争奪トーナメント編の最終決戦。
思ったより長くなったので前後編です。

第08話 その憎悪を砕け（前編）

S i d e 麗華

私は生徒会長である、天宮照子先輩を：いや、照子お姉さんを尊敬している。

子供のころから私を導いてくれた、やさしい近所のお姉さん。

私にとっては姉のような存在だ。

真面目で品行方正、その正しい生き方はいつだって私の見習うべき手本だった。

だが：そんな照子お姉さんを、5年前のあの事故が変えてしまった。そのせいでライディングデュエルに強い拒絶反応を示すようになったしまい、ライディングデュエル同好会を潰そうと、生徒会長としての権限まで乱用するお姉さん：でも私では照子お姉さんを止められない。

デュエルで語り合おうにも、私程度の腕では照子お姉さんには敵わない。

でも：彼なら届かせられるかもしれない。

学園最強のお姉さんを相手に、その憎悪で固まった心をデュエルで解きほぐしてくれるかもしれない。

不動遊輝：信じてみる価値はありそうです。

S i d e o u t

Side 遊輝

「遂にここまで来たんだね…」

僕は感慨深く、トーナメントの対戦表を見やる。

ゆまも恵も勝ってくれて、ついに次は最後の決勝戦だ。

そして決勝戦の相手は生徒会…今回の廃部騒動の首謀者とも言える
天宮照子先輩との直接対決である。

「ユウくん…」

「ユウ…」

「…」

相手は今現在、この学園最強と言われている人…今の僕で勝てるかどうかは分からない。

でもゆまと恵が繋げてくれた希望だ。

それに…茶道部のことは恵から聞いている。

大なり小なり、誰もがこのトーナメントには理由を持って参加した。
勝ち進んだ僕たちは、敗北していった人たちの想いも背負っている。

「必ず勝つ…！」

そう言って僕は最後の調整を終えたデッキを、デュエルディスクへとセットした。

その時だった。

「失礼します。 ライディングデュエル同好会の控室はここですか？」

その言葉に僕たちは控室のドアの辺りを振り返ると、メガネをかけた少女が立っていた。

「あう…」

「…何の用？」

その少女をゆまは困ったように、恵は鋭い視線で見る。

彼女は僕たちのクラスの委員長、原麗華さんだ。

真面目でしっかり者、ついたあだ名はそのものズバリ『委員長』。同時に、生徒会書記でもある。

つまりこれから対戦する天宮照子先輩側の人間だということだ。

「一体何の用ですか？」

「不動遊輝さん、実は少し話があるのですが…お時間を頂けませんか？」

これから戦う相手チームに話？

さすがの僕も警戒心を隠せず眉をひそめながら聞き返す。

「どんな話を？」

「それは会長…照子先輩があなたたちライディングデュエル同好会を潰そうとしていた、その訳を話します」

「その理由を知っているの？」

「はい…」

その話には僕は考える。

今回の廃部騒動、最初から天宮先輩の行動には疑問はあった。

僕たちに圧力をかけてきたことも、色々な部を使って僕たちを潰そうとしてきたことも相当の労力を必要とする。

それを成すだけの執念は一体どこから来るのか、ということだ。

当然、僕たち個人が恨まれていたとは思えない。何と言っても、僕たちは入学して間もない一年生だ。生徒会長に個人的に恨まれるような時間はない。

それに、それなら2年前に執拗にライディングデュエル部を潰そうとした理由にならない。

そうなればライディングデュエルに関する何かだろうとは踏んでいたんだけど…。

「わかったよ。その理由を教えて欲しい」

「では場所を変えましょう」

そう言って外へと促す委員長。

「ユウくん…」

「ユウ…」

ゆまと恵が心配そうに目配せをするけど、僕はそれを手で制すると黙って委員長について行くことにした。

「この辺りでいいでしょう…」

委員長に連れられてやってきたのは会場裏だった。

会場はトーナメントで賑わっているが、裏のここは裏方すら通らない。

秘密の話をしたいたならもってこいの場所だ。

「今から話すのは天宮照子先輩：照子お姉さんの話です。

私と照子お姉さんは家が近所で、子供のころから私はあの人に良くしてもらっていました。

優しく、曲がったことが大嫌い。

真面目で誠実で：いつだって正しく綺麗な、真っ直ぐなお姉さん。私はデュエルについてもあの人に学び、あの人のことを実の姉のように思っています。

そんなお姉さんですが：昔はライディングデュエルが大好きでした」

「ライディングデュエルが？」

「はい：。今の様子からは想像もつかないと思いますが、将来はDホーラーになりたいと語っていたんですよ」

とてもじゃないけど、今のライディングデュエル同好会を執拗に潰

そうとしている姿からは想像もつかない。

「お姉さんが変わってしまったのは5年前：『ドミノの悲劇』の時です」

『ドミノの悲劇』：その名称には聞きおぼえがある。

当時行われていたサイドカー型Dホイールによるタッグ形式のデュエル大会で起こった事故だ。

予選周回遅れの1台のチームがクラッシュ。それに巻き込まれる形で何台ものDホイールがクラッシュし、何人もの死傷者を出す大惨事になった大会だ。

WRGP以降、ライディングデュエルの大会ではマニュアルモードが基本になっているため、クラッシュするDホイラーは多くなっているが、死傷者を出すほどの大惨事はそう無い。

あの時は優勝候補だった親子プロデュエリストが事故死したはず。たしか…。

「西日本リーグを制した、光と闇の天宮プロ親子：『天宮』？」

僕の言葉に、委員長は頷いた。

「そう、照子お姉さんのお父さんとお兄さんです。」

照子お姉さんは大好きだった2人の家族をあの大大会の事故で失いました。

しかし、それだけでは済まなかったんです。

残されたお母さんの方もショックによって倒れ、それ以後体調を崩しがちになりました。

そして：照子お姉さんはあれだけ好きだったライディングデュエルを嫌悪するようになっていたんです…。

照子お姉さんはたくさんの大事なものを失って、『何か』を憎悪

せずにはいられなかった…。

そうしなければ自分を保つことが出来なかった…。

でも、あの事故の発端となった人も死亡していて、憎悪の矛先がどこにも存在しなかったんです。

そしてその矛先を…照子お姉さんは『ライディングデュエル』というものに向けました…」

「…何故、その話を僕に？」

語られる生徒会長の過去に、僕は何とかそれだけを言えた。

「照子お姉さんが、あなたたちライディングデュエル同好会に圧力をかけていたのは知っています。無論、それが不当な圧力であることも。」

でも…私の言葉も、デュエルも…照子お姉さんには届かないんです。

だから…お願いします。

今、照子お姉さんと分かり合える可能性を持っているのはあなただけです。

どうか…デュエルで照子お姉さんの心に語りかけて下さい。

どうかお願いします！」

そう言って委員長は深々と僕に頭を下げたのだった。

「来たわね、ライディングデュエル同好会…不動遊輝」

僕が決勝の舞台へと上がると、すでに彼女はそこで僕を待っていた。腰までの艶やかな茶色の髪に、吸い込まれそうな翠瞳。腕を組み立つ姿からは確かな威圧感を感じる。

彼女こそ今現在このデュエルアカデミアで最強の名を冠する女帝、天宮照子生徒会長だ。

「お待たせしました」

「構わないわ。…どうせ、そう長引かせるつもりはないから」

そう言って、彼女はデュエルディスクにカードをセットする。

そんな彼女に、僕は決意を込めて言った。

「天宮先輩。僕は…いえ、僕たちはライディングデュエルが大好きです！」

その僕の言葉に、天宮先輩の形のいい眉がピクリと跳ね上がった。

「…そう。でも私は嫌い、大嫌いよ！」

まるで吐き捨てるように答える天宮先輩。

「風の中にあるデュエル、そこにあるワクワクする瞬間…そのために…あなたを倒して僕はライディングデュエル同好会を存続させます…！」

そう宣言して、僕はデュエルディスクを構えた。

「そう…なら…全力で潰すわ！ ライディングデュエルなんて…この学園のどこにも必要無いのよ…！」

そう言って天宮先輩は女帝の威厳をもって、デュエルディスクを構える。

これがこのトーナメント、最後の戦いだ！

「デュエル…！」

遊輝↓LP4000
照子↓LP4000

「先攻は私から、ドロ…！ …私は手札から永続魔法《神の居城—ヴァルハラ》を発動！」

途端に、神々しいまでの光を放つ神殿が現れた。

『ヴァルハラ』ということは天宮先輩のデッキは天使族デッキだろうか？

「《神の居城—ヴァルハラ》の効果によって手札の《堕天使アスモディウス》を特殊召喚するわ」

《墮天使アスモディウス》 星8／闇属性／天使族／攻3000／
守2500

いきなり攻撃力3000の大型モンスターの召喚！？
この突破は簡単な話じゃないぞ。

「アスモディウスの効果で、私はデッキから《墮天使スペルビア》
を墓地に送り、カードを一枚伏せてターンエンドよ」 手札残り3枚

「僕のターン、ドロー。僕は手札から《サイクロン》を発動、そ
の伏せカードを破壊する！」

砕けたカードは《サンダー・ブレイク》。悪くないカードだ。

除去効果を持つモンスターの少ない天使族デッキでは、汎用性の高
い除去は重宝するのだろう。

「さらに、僕は手札から《ワン・フォー・ワン》を発動。手札の《
グローアップ・バルブ》を墓地に送り、デッキから《レベル・ステ
イラー》を特殊召喚」

《レベル・ステイラー》 星1／闇属性／昆虫族／攻 600／
守 0

「手札から《ジャンク・シンクロン》を通常召喚。レベル1の《レ
ベル・ステイラー》に、レベル3の《ジャンク・シンクロン》を
チューニング！」

☆1+☆3+☆4

「深遠の闇が、全てを包む黒となる！ 光さす道となれ！ シンク
ロ召喚、《漆黒のズムウォルト》！！」

《漆黒のズムウォルト》 星4／闇属性／悪魔族／攻2000／守
1000

現れたのは黒い外套を着た悪魔だ。
通常、3000の攻撃力はなかなか突破出来ない。
だが、こいつなら破壊ができる！

「バトル！ 《漆黒のズムウォルト》で《堕天使アスモディウス》
を攻撃！

ダーク・ドラッグ・ダウン！」

攻撃力で圧倒的に低いモンスターで攻撃を仕掛けることは自爆に等
しい。

だが、この《漆黒のズムウォルト》なら話は違う。

「《漆黒のズムウォルト》の効果発動！ 攻撃対象モンスターの攻
撃力がこのカードの攻撃力よりも高い場合、攻撃対象モンスターの
攻撃力をバトルフェイズ終了時までこのカードと同じ数値にする。

《堕天使アスモディウス》の攻撃力をダウン！

ダーク・フォールダウン！！」

《墮天使アスモディウス》 攻撃力3000↓2000

そう、この効果と戦闘で破壊されない効果の二つを持ったズムウォルトはどんな相手でも必ず一方的に戦闘破壊出来るのだ。

「《墮天使アスモディウス》撃破！そして効果発動、このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、相手のデッキの上からカードを3枚墓地へ送る」

落ちたカードは《大天使クリスティア》に《サイクロン》、そして《奈落の落とし穴》。
どれも嫌なカードだ。

「やるわね…でも、この瞬間《墮天使アスモディウス》の効果発動、自分フィールド上に「アスモトークン」1体を攻撃表示で、「ディウストークン」1体を守備表示で特殊召喚するわ」

「アスモトークン」 星5／闇属性／天使族／攻1800／守1300

「ディウストークン」 星3／闇属性／天使族／攻1200／守1200

トークンが2体召喚されてしまった…。

でも攻撃力はズムウォルトの方が上、よしんば強力なモンスターが

来てもズムウォルトならもつだろう。

「僕はカードを1枚伏せてターンエンド」 手札残り1枚

「私のターン、ドロロー!」 「ディウストークン」をリリースし、《墮天使ディザイア》を通常召喚」

《墮天使ディザイア》 星10／闇属性／天使族／攻3000／守2800

「《墮天使ディザイア》は最上級モンスターながら、天使族モンスター1体のリリースでアドバンス召喚する事ができる。

そして《墮天使ディザイア》の効果発動。このカードの攻撃力を1000ポイントダウンし、相手フィールド上に存在するモンスター1体を墓地へ送る事ができる。

私はこの効果で《漆黒のズムウォルト》を墓地に送る」

《墮天使ディザイア》 攻撃力3000↓2000

「!?!」

しまった。ズムウォルトは戦闘耐性はあるけど効果での除去には無力だ。

為すすべなくズムウォルトは碎け散る。

「バトル、ディザイアでダイレクトアタックよ!」

「トラップ発動、《次元幽閉》！」

発生した次元の狭間に《堕天使ディザイア》が消えていく。

「くっ、味な真似を…でも、これで真正銘のガラ空きよ。」「ア
スモトークン」でダイレクトアタック！！」

遊輝

LP 4000 ↓ 2200

「でも、この瞬間僕は手札から《冥府の使者ゴーズ》を特殊召喚します！」

《冥府の使者ゴーズ》 星7 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻2700 / 守2500

「さらに効果によって「冥府の使者カイエントークン」を召喚！」

「冥府の使者カイエントークン」 星7 / 光属性 / 天使族 / 攻1800 / 守1800

「やるじゃない…カードを2枚伏せてターンエンドよ」

「僕のターン、ドロー！ デッキトップのカードを一枚墓地へ送ることで墓地の《グローアップ・バルブ》を特殊召喚」

墓地に送られたのは…《ネクロ・ガードナー》、いいカードだ。

「レベル7の「冥府の使者カイエントークン」に1《グローアップ・バルブ》をチューニング！」

☆7+☆1=☆8

「集いし鋼が、新たな命となって動き出す！ 光さす道となれ！！
シンクロ召喚、生誕せよ、《スクラップ・ドラゴン》！！」

《スクラップ・ドラゴン》 星8/地属性/ドラゴン族/攻2800/守2000

「墓地の《レベル・ステイラー》の効果発動、《冥府の使者ゴーズ》のレベルを1つ下げて、場に特殊召喚する」

《冥府の使者ゴーズ》 星7↓星6

「そして《スクラップ・ドラゴン》の効果発動。1ターンに1度、自分及び相手フィールド上に存在するカードを1枚ずつ選択して互いに破壊する事ができる。」

僕を選択するのは《レベル・スティーラー》と…」

さてここが重要なところだ。

「アスモトークン」は戦闘でないと破壊できない。そうなれば破壊するのは2枚の伏せカードのうちどちらかだ。

上手いこと先輩の防御用カードを破壊できればいいけど…。

「僕はその右の伏せカードを破壊します！ ダストブレイズ！」

《スクラップ・ドラゴン》からくず鉄混じりのブレスが、《レベル・スティーラー》と伏せカードが碎け散る。

伏せカードは…《サイクロン》。

外した…。

どうしよう。攻撃か、それとも再び除去が出来る次のターンまで待つか…。

…仕方ない、先輩にも有利になるけどこれで除去カードを引けることを祈ろう。

「リバーiscardオープン、《メタモルポット》」

《メタモルポット》 星2／地属性／岩石族／攻 700／守 600

「お互いの手札を全て捨てその後、お互いはそれぞれ自分のデッキからカードを5枚ドロウします」

手札が現在0の僕にとっては5枚のドロウだ。
だが先輩にとっても5ドロウは同じこと、先輩の有利になることだ

ってありうる。

見れば先輩が捨てていたカードは《トレード・イン》だった。
あっちもあまり手は良くなかったようだ。

「ドロー！」

僕の5枚ドローの結果だが…トラップの除去はない。

悩んでも仕方ない、攻撃しよう。

「墓地の《レベル・スティーラー》の効果発動、《冥府の使者ゴーズ》のレベルを1つ下げて、場に攻撃表示で特殊召喚」

《冥府の使者ゴーズ》 星6↓星5

《レベル・スティーラー》 星1／闇属性／昆虫族／攻 600／
守 0

「バトル！ 《冥府の使者ゴーズ》で「アスモトークン」を攻撃！
冥府葬送斬！！」

照子

LP 4000↓3100

攻撃が通った。これで決まるか！？

「続けて、《レベル・スティーラー》と《メタモルポット》で攻撃

「！」

照子

LP3100↓2500↓1800

「《スクラップ・ドラゴン》でダイレクトアタック！ スクラップ
デスバーナー！！」

「トラップ発動、《ドレインシールド》。その攻撃を無効にし、
そのモンスターの攻撃力分の数値だけ自分のライフポイントを回復
するわ」

照子

LP1800↓4600

やはりそう甘くはないか…。

「僕はカードを2枚伏せてターンエンドです」

デュエルはまだまだ続きそうだ…。

……To be continued

第08話 その憎悪を碎け（前編）（後書き）

後編へ続きます。

第09話 その憎悪を砕け（後編）（前書き）

最終戦、後編です。

第09話 その憎悪を砕け（後編）

Side ゆま

「はう…」

目の前で繰り広げられるすごいデュエルに、誰もが釘付けになっています。

私やメグちゃんだってそう。

「すごいですう…」

「うん…」

私の言葉に、メグちゃんが頷きます。

「さつきから生徒会長のデッキ、次から次に大型モンスターが出てきてますよ」

「それがヴァルハラへの怖いところ。あれだけの大型モンスターたちを実質コスト無しで召喚している…。

ヴァルハラを早く壊したいところだけど…ユウもその暇が無く苦しんでいる…」

確かに、ユウくんのデッキはシンクロによるスピードと柔軟性には優れているけど、正面切ったのパワーでは分が悪いです。

どうにかして突破していかないと、パワーに押し切られユウくんのデッキが先に息切れを起こしちゃいます。

「でも…」

あの二人…なんて楽しそうにデュエルしてるんだろう…。
ちよっと…うらやましいですう…。

S i d e o u t

S i d e 恵

生徒会長のデュエルの腕は、噂に違わぬものだった。
圧倒的な攻撃力と、厄介な効果の天使たち…あのユウが凄まじく苦しめられているのがわかる。

（ユウ…負けないで…）

私はそっと眼を閉じ呟く。

今の私に出来る事はただこれだけだから…。

でも…なんだろう？

ユウの戦っている生徒会長は私たちのライディングデュエル同好会を潰そうとする、いわば敵。

ユウから彼女のことは聞いたが、私は茶道部のことを知っている手

前、あまり同情は湧かない。
だが：ユウの何て楽しそうなことか？
あんないい顔、私たちにも滅多に見せないのに…。
それに生徒会長の方も本当に楽しそうだ。
これが私たちの敵であるなど、信じられないくらいである。
わだかまりを超え、ただ純粹にお互いの力をぶつけ合う二人に、チ
クリと私は僅かな嫉妬を覚えた…。

S i d e o u t

S i d e 照子

(すごい…すごいわ、この子！)

私は目の前の少年に、本当に感心していた。
このデュエルアカデミアで最強などと呼ばれるようになってから、
久しく楽しめなかった本気のデュエルだ。
他の子なら、すでに2回は叩き潰している。
なのにこの子は凌ぐ。どんな強力な天使を出しても、それを凌ぎ反
撃をしかけてくる。
次は何をやってくるのか？
それを思うだけで胸がワクワクする。

(楽しい！ 本当に楽しい！！！)

そんな風に思っていると、彼は私に話しかけてきた。

「天宮先輩、僕は楽しいです。こんなに強い人とデュエルが出来る」

「私もよ。 あなたは本当に強いわ、だから私も楽しい」

そう返してから、私はハッと思い出した。

彼は敵だった。私の大嫌いな、ライディングデュエルというものを愛する…敵！

そんな私の心境の変化を見透かしたのか、彼は少し悲しそうに切り出してきた。

「先輩、僕はデュエルが大好きです」

「私もよ。 でも…ライディングデュエルだけは別！
あれだけは…あれだけは！！！」

そう、大好きだった父さんと兄さんの敵とも言えるライディングデュエル。

あれだけは認められない！

「実は…僕は先輩がライディングデュエルにこだわる理由を知っています」

「…麗華ね？」

私の言葉に、彼は頷いた。

「それを知った上で、僕は言います。

ライディングデュエルだって、デュエルです。楽しい…デュエルなんです」

「違うわ、ライディングデュエルは危険な遊戯！ あんなもの、あんなもの！」

「確かに先輩の言うように危険はあります。それは事実です。

でも…それと同じくらいの、ワクワクがああ風の中に広がる世界にはあるんです！

きつと…先輩のお父さんとお兄さんも同じだったと思います」

「…」

風の中に広がる新しい世界…確かに眼をキラキラ輝かせながら、父さんも兄さんもそんなことを言っていたっけ。

でも…認めない、認められない！

認めたら…私は何を、誰を憎めばいいの！？

「…デュエルの続きよ。

私はどうあってもライディングデュエルを認めない。

あなたはライディングデュエルを愛してる。

互いの考えが分かり合えないなら…あとは戦うだけ。

言いたいことは、私に勝ってからいいなさい！！」

「…わかりました、あとはデュエルで語りましょう、先輩！」

「ええ、行くわ！ 私のターン！！」

S i d e o u t

S i d e 遊輝

「私のターン、ドロー!! 手札から魔法発動、《ブラック・ホール》!」
場のモンスターを全滅させるわ」

「何!?!」

ブラックホールが発生して、僕のモンスターたちを飲み込む。
あれだけ磐石だった場がガラ空きだ。
やはりこの人はすごい。ワクワクする。
でも僕だって負けられない!

「《神の居城―ヴァルハラ》の効果によって、私は手札の《墮天使ゼラート》を特殊召喚するわ」

00 《墮天使ゼラート》 星8／闇属性／天使族／攻2800／守23

「バトル、《墮天使ゼラート》でダイレクトアタック！」

「トラップ発動、《聖なるバリアーミラーフォース》！」

僕の目の前に現れた光の壁に攻撃を弾かれ、逆にゼラートが崩れ落ちていく。

「くう：伏せていたのね。」

裏守備表示でモンスターを通常召還しターンエンドよ」

「僕のターン、ドロー！ 魔法カード《貪欲な壺》発動。

墓地の《スクラップ・ドラゴン》、《漆黒のズムウォルト》、《メタモルポット》、《ジャンク・シンクロン》、《冥府の使者ゴーズ》をデッキに戻し、カードを2枚ドロー」

やってきたカードは…。

「よし！ 僕は手札から《ジャンク・シンクロン》を通常召還！

《ジャンク・シンクロン》の効果によって墓地の《グローアップ・バルブ》を特殊召喚！

同時に、墓地からの特殊召喚が成功した場合、《ドッペル・ウォリアー》を手札から特殊召喚！

レベル2の《ドッペル・ウォリアー》にレベル3《ジャンク・シンクロン》をチューニング！」

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！シンクロ召喚！

いでよ、《ジャンク・ウォリアー》！」

《ジャンク・ウォリアー》 星5／闇属性／戦士族／攻2300／守1300

「《ジャンク・ウォリアー》の効果発動！

《ジャンク・ウォリアー》のシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする。

さらに《ドッペル・ウォリアー》の効果発動！

《ドッペル・ウォリアー》がシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた場合、自分フィールド上に「ドッペル・トークン」2体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

《ドッペル・ウォリアー》、《ジャンク・ウォリアー》の順で効果は発動します！」

場に現れる2体のドッペル・トークン。

「ドッペル・トークン」 星1／闇属性／戦士族／攻400／守400

「パワー・オブ・フェローズ！」

《ジャンク・ウォリアー》 攻撃力2300↓3200

「さらにレベル1ドッペル・トークンにレベル1の《グローアップ・バルブ》をチューニング！」

☆1+☆1⇐☆2

「集いし願いが新たな速度の地平へ誘う。光さす道となれ！シンクロ召喚！希望の力、シンクロチューナー、《フォーミュラ・シンクロン》！」

《フォーミュラ・シンクロン》 星2／光属性／機械族／攻 20
0／守1500

「《フォーミュラ・シンクロン》を守備表示で召還。効果によってカードを1枚ドロー！」

墓地の《レベル・ステイラー》の効果発動、《ジャンク・ウォリアー》のレベルを1つ下げて、場に攻撃表示で特殊召喚」

《ジャンク・ウォリアー》 星5↓星4

《レベル・ステイラー》 星1／闇属性／昆虫族／攻 600／

守 0

「バトル、《ジャンク・ウォリアー》で裏守備モンスターに攻撃。
スクラップ・フィスト!!」

あっさり碎けたカードは《ダーク・ヴァルキリア》、ただの壁モンスターだったようだ。

「続けて「ドッペル・トークン」と《レベル・ステイラー》でダイレクトアタック!!」

照子

LP 4600 ↓ 4200 ↓ 3600

「僕はカードを一枚伏せてターンエンド」

「そして私のターン、ドロー! ここで決めてあげる。」

《神の居城ーヴァルハラ》の効果によって手札の《アテナ》を特殊召喚!」

《アテナ》 星7 / 光属性 / 天使族 / 攻2600 / 守 800

「そして…フィールド魔法《死皇帝の陵墓》発動!!」

途端に、おどろおどろしい祭壇が現れる。

「私はライフを2000払い、手札から^{ライトニングギア}《光神機一轟龍》を通常召喚！！」

照子

LP3600↓1600

^{ライトニングギア}《光神機一轟龍》 星8／光属性／天使族／攻2900／守1800

「轟龍が召喚されたことにより、《アテナ》の効果発動！
相手ライフに600ポイントダメージを与える。

ホーリーバーン！！」

「ぐっ！？」

遊輝

LP2200↓1600

「さらに《アテナ》の効果発動！ 轟龍を墓地へ送る事で、墓地に存在する天使族モンスター1体を選択して特殊召喚する。

来なさい、《堕天使スペルビア》！！」

《堕天使スペルビア》 星8／闇属性／天使族／攻2900／守2400

「《墮天使スペルビア》が召喚されたことで再び《アテナ》の効果発動！

ホーリーバーン！！」

遊輝

LP1600↓1000

「《墮天使スペルビア》の効果発動。

このカードが墓地からの特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「墮天使スペルビア」以外の天使族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。

来て…《大天使クリスティア》！！」

《大天使クリスティア》 星8／光属性／天使族／攻2800／守2300

「《アテナ》の効果発動！

ホーリーバーン！！」

遊輝

LP1000↓400

並び立つ大天使と墮天使と女神。

その神々しさと圧倒的な威圧感が、物理力を伴うように僕に押し寄せる。

そんな僕に照子さんは語りかけてきた。

「私の勝ちね。」

大方、《フォーミュラ・シンクロン》の効果で私のターンにシンクロ召喚をして攻撃力の低いトークンと《レベル・ステイラー》を処理するつもりだったんでしょけど、《大天使クリスティア》の効果によって特殊召喚は出来ないわ。

あとはその伏せカードだけど…」

そう言って僕の伏せた2枚の伏せカードを見る。

「ミラーフォースは使用済。」

今までの消費から見て、防御用のトラップがあっても恐らく1枚。墓地の《ネクロ・ガードナー》を使用したとしても攻撃を防げるのは2回が精々と言ったところでしょうね。

3体で攻撃を仕掛ければ一撃は入るはず。

その一撃があれば十分。あなたの負けよ」

「…」

…正解。

僕の伏せカードは《次元幽閉》と《リビングデッドの呼び声》。

先輩の言う通り、墓地の《ネクロ・ガードナー》を使っても攻撃を防げるのは2回だけだ。

でも…。

「天宮先輩…一つ忘れていませんか？」

「何を忘れてるっていうの？」

「デュエリストにとって手札は可能性。僕には…まだ可能性があることを！」

「何を言っているの？ あなたはこのターンを凌げないのよ。可能性があったところで次が無い！」

「いいえ、あります。」

僕にはこんな可能性が！！

僕は手札から《エフェクト・ヴェーラー》を墓地に送り効果発動！相手のメインフェイズ時、相手フィールド上に表側表示で存在する効果モンスター1体を選択して、その効果をエンドフェイズ時まで無効にする。

この効果で僕は《大天使クリスティア》の効果を無効にする！！

「な、なんですって！？」

「これによってエンドフェイズ時まで《大天使クリスティア》の特殊召喚ができないという効果は無効になりました。

そして…《フォーミュラ・シンクロン》の効果発動！

相手のメインフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードをシンクロ素材としてシンクロ召喚をする事ができる。レベル4《ジャンク・ウォリアー》とレベル1《レベル・ステイラー》に、レベル2《フォーミュラ・シンクロン》をチューニング！」

「冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の花よ、開け！シンクロ召喚！」

現れよ、《ブラック・ローズ・ドラゴン》！」

《ブラック・ローズ・ドラゴン》 星7／炎属性／ドラゴン族／攻
2400／守1800

「《ブラック・ローズ・ドラゴン》の効果発動！」

このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に存在するカードを全て破壊する事ができる。

ブラック・ローズ・ガイル！！」

吹き荒れる黒い薔薇の花弁が、周囲の全てを破壊し、砕く。

この薔薇の暴風の前には天使も堕天使も関係ない。等しく全てが塵となる。

これが母さんのエース、《ブラック・ローズ・ドラゴン》が司る破壊の力だ。

その力によって場の全てのカードが崩れていく様を茫然と見る天宮先輩。

「全…滅…。私の天使たちが…」

…カードを1枚伏せ、ターンエンド」

「僕のターン！！ドロー！！！」

これが正真正銘のラストターンだ！

「手札から魔法発動《死者蘇生》！」

墓地の《ブラック・ローズ・ドラゴン》を復活。

そして手札から《スポーア》を通常召喚。

レベル7の《ブラック・ローズ・ドラゴン》に、レベル1の《スポーア》をチューニング！」

これが最後！ 僕のエース、この戦いに終止符を！！

☆7+☆1=☆8

「集いし鋼が、新たな命となって動き出す！ 光さす道となれ！！」

シンクロ召喚、生誕せよ、《スクラップ・ドラゴン》！！！」

《スクラップ・ドラゴン》 星8／地属性／ドラゴン族／攻280

0／守2000

「墓地の《レベル・スティーラー》の効果発動、《スクラップ・ドラゴン》のレベルを1つ下げて特殊召喚」

《スクラップ・ドラゴン》 星8↓星7

《レベル・スティーラー》 星1／闇属性／昆虫族／攻600／
守0

「《スクラップ・ドラゴン》の効果発動！

1ターンに1度、自分及び相手フィールド上に存在するカードを1枚ずつ選択して互いに破壊する事ができる！

この効果で僕は《レベル・ステイラー》とその伏せカードを破壊する！

ダストブレイズ！」

砕けた伏せカードはミラーフォースだった。

さすがだ、この土壇場でも逆転の一手を伏せていたなんて…。でも…これでもはや彼女を守るものはない！

「これで終わりです！

《スクラップ・ドラゴン》でダイレクトアタック！

スクラップデスバーナー！！！」

「ぎゃあああああ！！？」

スクラップ・ドラゴンがその身体を震わせながら、最大火力のブレスを放つ。

彼女に、もはやそれを止める術は残されていない。

その火炎に巻き込まれ、天宮先輩のライフは遂にゼロになった。

照子

LP1600↓0

ワアアアアア——

「先輩、大丈夫ですか？」

鳴りやまない歓声を聞きながら、僕は天宮先輩に手を差し出した。

「久しぶりに負けたわ…完敗よ」

フツと笑うと、天宮先輩は僕の手を取り立ちあがった。

「でも、どうしてかしらね。

負けたっていうのに、何だか清々しい気分よ。

きつと…このデュエルが楽しかったからかしら」

そう言って天宮先輩は会場から去って行こうとする。

「不動くん、私はやっぱり、ライディングデュエルを好きにはなれないわ」

「…」

「でも…そこには誰かの夢があって、そこに信念を賭けている人がいる…。

そのことをあなたから思い出させてもらったわ…。

約束してあげる、今後私…生徒会からあなたたちへの圧力がかかることは無いわ。

危険には気を付けて、デュエルを楽しむことね」

「ありがとうございます」

去っていく天宮先輩の背中に、僕は静かにお礼を述べたのだった…。

S i d e o u t

S i d e 照子

「照子お姉さん…」

会場から出ると、そこには麗華ちゃんが立っていた。

「ごめんなさい、照子お姉さん。私、お姉さんのことを彼に話してしまいました…」

どうやら私の過去を彼に話したことを気に病んでいるようだ。まったく…この子は少し、真面目すぎる。

「いいのよ。おかげで…いいものを思い出せたから」

そう言って私は麗華ちゃんの頭をなでる。

そう、私は思い出した。

父さんと兄さんがよく語っていた、あのライディングデュエルへの真っ直ぐな想い。

彼の想いはそれにそっくりで、おかげで思い出した。

あの事故があつてからライディングデュエルを憎んだ私は、父さんや兄さんのそんな真っ直ぐな想いを語った、楽しい思い出すら憎悪の中に埋めて忘れ去っていたのだ。

「不動遊輝…あなたのおかげで救われたわ。

行くわよ、大会の運営も片付けもまだまだ仕事はいっぱいよ」

「は、はい、照子おねえさん！」

ライディングデュエルを認めるのは難しい。そう簡単に5年間もの間続いた思考は変わらない。

でも…少なくとも、ただ嫌悪し憎悪することだけは終わりにしよう。

私はそう決意し、麗華ちゃんを連れて歩き出した…。

S i d e o u t

S i d e ケイト

とうとうやった。

あいつら、本当にトーナメントを優勝しちまいやった！
生徒会の組んだトーナメントは、どれも有名な強豪ぞろいの激戦だった。

それをあいつら、勝ちぬきやった！

教え子が期待に応える姿ってのは、いつ見てもうれしいもんだね。頑張ったあいつらに、せめてご褒美にメシぐらい奢ってやるか…。そう思って3人を探しているんだけど、どうにも姿が見えない。おかしいねえ、表彰式までは全員いたはずなんだけど。そう思って同好会にやって来てみると、部室のドアが少し開いていた。

「ん？」

中を覗いてみると、そこには3人の姿があった。

ボウズが二人を抱え込むように座ってるんで、すわ不純異性交遊かと一瞬焦ったけど、そうじゃなかった。

壁にもたれかかって眠ったボウズと、ボウズに身体を預けるようにして幸せそうに眠る二人。

それを見てアタイは静かに、部室のドアを閉めた。

「…タメシはもうちょつと後にしようかね」

今は少し休ませてやろう。

あいつらは今日一日、本当に良くやったからね。

ポリポリ頭を掻きながら、アタイは残った仕事をこなすために職員室へ向かうことにした。

S i d e o u t

S i d e 遊輝

あれから…部活対抗トーナメントから2週間が過ぎていた。

部活対抗トーナメントに優勝した僕たちのライディングデュエル同好会は順調、かなりの額の『特別部活動予算』が支給され廃部の危機は免れた。

ちよつと『特別部活動予算』の額が試算していたのよりも多くて首を捻ったけど、そのことは委員長から教えてもらった。

何でも本来ライディングデュエル同好会に来るはずだった費用が上乘せされているらしい。

「今回の件は、生徒会の不当圧力でしたから是正をしたまでです。

照子お姉さんも丸くなってくれましたし」

というのは委員長の談。

どうやら、天宮生徒会長もライディングデュエルを眼の敵にするようなことは無くなったようだ。

あのデュエルで、天宮先輩と少しは分かり合えたんだと僕は思う。

僕たちと同じように廃部の危機にたたされていた茶道部は、存続が決まったらしい。

表向きは部活対抗トーナメントで素晴らしいデュエルを見せた、紬紫先輩とジャッカルⅡ岬先輩の所属する部を潰すのは惜しいとの理由だが、これも天宮生徒会長が圧力をやめた結果のようだ。

「いつでもいらっしゃってください。お待ちしております」

「おう、いつでも来いよ。一年ども！」

この間茶道部にお茶を御馳走になったが、そう言って先輩たちは僕らを出迎えてくれる。

恵はちよくちよく顔を出してるみたいだ。

ゆまはあのトーナメントの後、ナオミ先輩に熱心に女子テニス部に勧誘されるようになった。

「ゆまちゃんみたいな子は、きっとテニスが似合うのよ。」

だから私と契約して、テニス部員になってよ！」

そう言って、ニコニコ笑いながら入部届けをゆまに差し出してくるナオミ先輩。

ゆまはちよっとボケっとしてるところもあるけど運動神経いいし、テニスも上手くできるかもしれないけど…。

なんだろう、僕にはナオミ先輩が笑顔で差し出してくる入部届けが悪魔との契約書みたいに見えた。

ゆまもあれ以来、女子テニス部の入っている部室棟には近付かなくなったり、そばを通る時には何か震えながら僕の影に隠れるようになった。

何かあったのかな？

メイ＝喜多嬉さんの社交ダンス部は一回戦敗退のため、『特別部活動予算』はほとんど出なかった。

しかし別段困ってはいないらしい。

普通練習スペースを借りたりで、部費は必要そうなんだけど…。

「練習場所？ そんなもの、ウチのダンスホールに決まってますわ。部費？ 足りなければポケットマネーから継ぎ足せば良いだけのことではありませんか」

聞いてみると、そう優雅に紅茶を嗜みながら答えられてしまった。どうにも、社交ダンス部にはそんなことは心配なくていいらしい。羨ましいかぎりだ。

そして僕たちは、ライディングデュエルの学生大会に向けて整備と練習の日々を送っている。
楽しい、充実した毎日だ。

夢に向かって歩き出した僕たちライディングデュエル同好会の部活動対抗トーナメントは、こうして幕を閉じたのだった…。

……To be continued

ゆま「ゆまと！」

恵「恵の…」

ゆま・恵「今回の最強カード」

ゆま「第二部、部費争奪トーナメント編が終わりましたね、メグちゃん！」

恵「うん…私たちもデュエル出来て、満足…」

ゆま「あう…私としてはおかしな先輩に眼を付けられちゃって困ってるんですが…」

恵「…ガンバレ」

ゆま「あうう！ メグちゃん人事だと思って…」

恵「それより今回の最強カード…」

ゆま「はう、そうでした！ 今回の最強カードはコレです！」

《漆黒のズムウォルト》

シンクロ・効果モンスター

星4／闇属性／悪魔族／攻2000／守1000

闇属性チューナー＋チューナー以外の昆虫族モンスター1体

このカードは戦闘では破壊されない。このカードの攻撃宣言時、攻撃対象モンスターの攻撃力がこのカードの攻撃力よりも高い場合、攻撃対象モンスターの攻撃力をバトルフェイズ終了時までこのカードと同じ数値にする。

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、相手のデッキの上からカードを3枚墓地へ送る。

ゆま「ダークシンクロ出身のカードです。感想でオススメされていたので、作者が採用したみたいですね。

：ユウくん、このカードをどこで手に入れたんでしょうか？」

恵「カードは拾うもの（キリッ

：遊星おじさまたちは、どんな顔でユウがこのカードを使うのを見てるのだろう：？」

ゆま「とにかくこのカードですが、ユウくんのデッキと何故か相性がいいです。

攻撃時だけとはいえ、どんなカードでも必ず一方的に戦闘破壊に持ち込めます」

恵「ユウのデッキはエースのスクラップ・ドラゴンの2800がほぼ攻撃力の最高ライン：。

3000クラスの攻撃力は効果破壊する必要があるけど、この子はレベル4の低燃費で戦闘破壊可能とお得」

ゆま「後半の効果ですが：正直、デメリットになることが多いです
う」

恵「墓地利用を考えたデッキは非常に多い。

それらの墓地肥やしを手伝ってしまうのは大きなデメリットと言えるけど…そこは必要経費」

ゆま「今回はここまでです！」

恵「次回からは新章に突入…」

ゆま「今度は世界の危機クラスの敵と私たち戦うことになるみたいですよ、メグちゃん！」

恵「『廃部の危機』から『世界の危機』…まるで訳が分からない…」

ゆま「まあ、『週一世界の危機』ぐらいの気楽さでいいって作者が言っていましたう」

恵「…それ何てF・E・A・Rゲー？」

第09話 その憎悪を砕け（後編）（後書き）

第二部はこれにて幕です。

ストックを使いきったので次回の更新までしばらく時間がかかると思います。

第三章 予告編

少年と少女たちの送る毎日。

「これで…完成だよ、ゆま！」

「ありがとうございますユウくん！　これが私のDホイール、『トライハート』！！」

「ユウ、メモントモリーのエンジン制御プログラムについて相談したいのだけど…」

平和な日常と楽しい日々。

それはいつまでも続く…はずだった。

だが、非日常は彼らのすぐ近くまで迫っていた。

「インチキ、インチキよ！？」

「何なんだ…何なんだよテメェはよお！？」

ネオドミノシティを覆う怪しい影。

「医学的には眠っているだけ。でも何故か目覚めないのよ。

まるで…魂を抜かれたみたいに…」

「これが…『ライフイーター』事件…！」

多発する怪事件に巻き込まれていく遊輝たち。

「ゆま…恵…お願いだから目を覚ましてよお…」

大切なものを傷つけられた怒りが、遊輝を戦いへと誘う。

「こんな粗悪なものじゃ『満足できねえぜ』ですう!!」
「私たちの欲望は、この程度じゃ満たされない…!!」

そして、絆と想いを胸にゆまと恵は戦う。

「冥魔神？」

事件の背後に見え隠れする、邪神の影。
そして、不動家に襲いかかる亡霊。

「久しぶりだね、アキ…」
「あなたまさか…!？」

果たして遊輝たちは、世界に忍び寄る影に打ち勝つことが出来るのか？

「ユウくん、負けないで！」

「ユウ、お願い、勝って…！」

二人の祈りを背負い、遊輝は戦う。

「…行こう、スクラップ・ドラゴン。」

あのカビの生えた神様を…スクラップにしてやろう…！」

遊戯王5D's After ㄋ子蟹冒險記ㄋ

第三章 『冥魔神編』

不定期更新予定

第三章 予告編（後書き）

次の更新までは時間がかかると思うので、とりあえず次回予告だけ投稿。

時間稼ぎともいう。

第10話 父と子 星屑龍VS鉄屑龍（前書き）

新章突入です。

今回は遂に登場、伝説の大いなる蟹。

第10話 父と子 星屑龍VS鉄屑龍

Side ナオミ

「インチキ、インチキよ!」

私の切り札、《裁きの龍》ジャッジメント・ドラゴンが成す術無く砕け散っていく光景に、私は思わず叫んでしまった。

今の攻撃で私のLPはゼロだ。

途端に、身体が重くなっていく…。

「何よ、これ…」

膝をついた私に、ゆっくりとデュエルの相手が近付いてくる。

黒いローブに、目深に被ったフード。

顔は見えない。だが、悲しそうな口元だった。

「…ごめんね」

そんな言葉が聞こえた気がしたけど、もう限界。

私は重苦しさに耐えきれず、意識を手放したのだった…。

Side out

Side 遊輝

「モーメントエンジン、出力安定。各部へのパワーコントロール正常。」

恵、そっちは？」

「ブレーキ及びその他駆動系チェック完了、オールグリーン…問題無し…」

パソコンから顔を上げ恵に声をかけると、恵もパソコンを操作しながら言葉を返してくる。

ここは僕の家のカレージ。

そして僕たちのパソコンとケーブルで接続された先には、一台のDホイールがある。

明るい赤と銀を基調とした、どこかヒーローめいた配色のDホイール。

やっと…完成だ！

僕はその様子を見ていたゆまに声をかけた。

「ゆま、完成だよ！」

その言葉にゆまは笑顔でDホイールに駆け寄る。

「これが私のDホイール…『トライハート』！」

そう感慨深そうにDホイールを撫でるゆま。

「ユウくん、メグちゃん、ありがとうございます！」

「いいんだよ、ゆま。 半分以上は僕の趣味だもん」

「私も：作ってて楽しかった：」

何かを作り終えた時特有の解放感に僕の頬が緩む。
見れば恵も同じように満足げにほほ笑んでいた。
その時だった。

「やっているみたいだな、遊輝：」

「あ、父さん」

ガレージに父さんがやってきた。

「お邪魔してます、遊星おじさん」

「遊星おじさま、お邪魔しています：」

ゆまと恵も父さんに慌てて頭を下げた。

「精が出てるな：。 調子はどうだ？」

「はい！ 今完成したですう！」

父さんの問いに、ゆまが嬉しそうに答える。

「そうか：」

そう言って、父さんは僕の操作するパソコンを覗き込んできた。

「…遊輝、このエンジン制御プログラムを組んだのはお前か？」

「そうだけど…」

そう答えると、父さんはじっと画面を凝視する。

やがて、父さんが画面を指差した。

「この部分…これをこう変更すれば、82から96までの工程が省略できる」

「あ、ほんとだ。でも、それだと最大出力が若干下がるような…」

「いや、お前なら最大出力重視でもいいだろうが、実際に扱うゆまちゃんはDホイールにそう慣れていない。

最大出力より機動性と立ち上がりを重視した使いやすいセッティングにすべきだと思う…」

「なるほど…」

「それと駆動系制御プログラムの方だが…」

そう言って今度は恵の方のパソコンを覗き込んだ。

「…ここだ。この場合、ターンバック時のタイヤの回転変更に若干のズレが生じる。

これなら、こう変更した方がズレは少ない」

「…本当。気付かなかった…」

父さんの指摘に恵はプログラムを修正していく。

僕の方も、父さんの指摘通り、一部を修正していった。
それにしても…。

「はう…おじさんすごいですう。一目でわかつちやうなんて」

僕の思っていた言葉を、ゆまが代弁してくれた。

僕の方も、恵の方もプログラムは会心の出来だったはずだ。

その改善点をひと眼で見抜いてしまうなんて…。

だが、父さんは何でも無いように言ってくる。

「昔、俺もやったミスだからな…。経験で分かるだけだ」

そう言って、今度はDホイール本体を触り、各部を見て回る。

「…いいDホイールだ。だが遊輝、このサスペンションが…」

「でも、それだと…」

僕は父さんと並んで、Dホイールをいじりながらお互いの意見を交換する。

「ユウくんとおじさん、そっくりですう」

「さすが親子…」

背中からどこか笑いを含んだ二人の声が聞こえてくる。
すると…。

「…あなた、一体何をやっているの？」

見れば入口に母さんが、呆れた顔で立っていた。

「…ああ、そうだった。忘れていた。」

お茶が入ったんで呼びに来たんだった。みんな、少し休憩でお茶にしないか？」

母さんの言葉に、父さんは少しばつが悪そうに言うのだった。

庭の片隅にあるテーブルで、僕たちはお茶の時間となった。

「ふふっ…今日の紅茶は最高級のサイバーエンド・グレイなのよ」

母さんの入れてくれたお茶は、何とも家計に響きそうな紅茶だった。具体的には一杯4000円位。

母さん、いいところのお嬢様だから結構金銭感覚がおかしいことがあるんだよね。

確かに美味しいんだけど…僕や父さんは悲しいかな安物のインスタントコーヒーをグイグイ飲むタイプなので、美味しい以上の感想が持てない。

「わあ、美味しいですう！」

「本当、美味しい…」

「ふふっ、こっちのキメラティック・マドレーヌも召し上られ」

これまた美味しそうだけど攻撃力…もといカロリーの高そうなお菓子が出てきた。

ゆまと恵は美味しそうに食べながら、母さんと楽しく話をしている。デュエルのこと、部活のこと…おもに話しているのは学校でのことだった。

父さんもその話を静かに聞きながら、時折頷く。

そんな風に話が進んでいると、二人の話はこの間の部活対抗トーナメントの話になっていた。

「ユウくんったらすごいんです！」

「ユウはすごかった…」

ゆまは興奮気味に僕のデュエルを語り、恵もしきりに頷く。

僕としてはライトロードを正面から粉碎したゆまや、相性の悪そうな相手に勝利した恵の方がすごいと思うんだけど。

「遊輝、すごい活躍したみたいじゃないの」

「母さんから貰った《ブラック・ローズ・ドラゴン》のおかげだよ」

母さんの言葉に、僕は肩をすくめながら答えた。

正直、母さんの《ブラック・ローズ・ドラゴン》がいなかったらあのトーナメント、どちらの戦いにも勝てなかったと思う。

「いや、そんなことはない…」

その時、静かに話を聞いていた父さんがはじめて言葉を発した。

「強いカードがあるから勝てるのではない。

カードとの絆を信じることで、デッキの力を最大限に発揮したデュエリストが勝利を掴むんだ。

その勝利はまぎれもなくお前の実力だ。

強くなったな、遊輝」

「父さん…」

日頃、余計なことは喋らない無口な父さんが、僕のことを褒めている。

そう思うと、何ともこそばゆい。

照れ隠しに頭を掻いていると、ゆっくりと父さんが立ち上がった。

「どうだ遊輝、これからデュエルをしないか？」

「父さんと…僕が？」

「ああ。親として、一人のデュエリストとして成長したお前の実力をこの目でみたくなった。

どうだ、遊輝？」

その言葉に、僕はゆっくり、だけど確かに頷く。

「分かった…父さん、デュエルだ！」

「…」

僕はゆっくりとデッキをデュエルディスクにセットする。

目の前には、同じようにデッキをセットする父さん。

ゆまと恵、そして母さんは椅子に座りながら僕たちのことを見ていた。

「…」

目の前で対峙する父さん…それは、この街、そして世界の誰に聞いても、世界を代表するデュエリストの一人として名前があげられる存在。

今では研究職に専念しているが、その実力が衰えていないことは僕が良く知っていた。

そんな生きた伝説が、今、僕の目の前に敵として存在している。

こんなに…こんなにワクワクすることはない！

はつきり言って、僕は今まで父さんにデュエルで勝ったことは無い。でも、僕だって成長をしている。

今度こそ…！

「始めるか、遊輝」

「ああ、いつでもいいよ、父さん！」

「「デュエル!!」」

遊輝↓LP4000
遊星↓LP4000

「俺のターンだ、ドロー！俺は手札から魔法カード、《手札抹殺》を発動！」

お互いの手札を全て捨て、それぞれ自分のデッキから捨てた枚数分のカードをドローする」

いきなり先攻1ターンで《手札抹殺》：父さんのデッキも、僕のデッキと同じで墓地利用の割合が高い。

落ちるカードによってはとんでもないことになりそうだ。

見ると父さんの落ちたカードは《ボルト・ヘッジホッグ》、《クイック・シンクロン》、《チューニング・サポーター》、《ソニック・ウォリアー》、《レベル・ステイラー》…。

うん、思った通りとんでもないことになってる。

若干の頭痛を覚えたものの、僕の方もかなりいいカードが墓地に落ちた。

《ライトロード・ハンター ライコウ》に《ネクロ・ガードナー》、《グローアップ・バルブ》に《冥府の使者ゴーズ》と《クリッター》。

《ライトロード・ハンター ライコウ》と《冥府の使者ゴーズ》が落ちたのは痛いけど、モンスターしかいない事故気味だったし手札

が交換できたことは大きい。
次に父さんがどう動くかだが…。

「俺は手札から、《シンクロン・エクスプローラー》を召喚」

《シンクロン・エクスプローラー》 星2／地属性／機械族／攻
0／守 700

「その効果で墓地の《クイック・シンクロン》を特殊召喚！
レベル2《シンクロン・エクスプローラー》をレベル5《クイック・シンクロン》でチューニング！」

☆2＋☆5＝☆7

「集いし思いがここに新たな力となる。光さす道となれ！シンクロ
召喚！

燃え上がれ、《ニトロ・ウォリアー》！」

《ニトロ・ウォリアー》 星7／炎属性／戦士族／攻2800／守
1800

「カードを2枚伏せてターンエンドだ」

「僕のターン、ドロー！」

さすが父さん、先攻1ターン目から高攻撃力の《ニトロ・ウォリアー》を召喚か…この突破は簡単じゃない。

それに伏せカード2枚…墓地が肥えてからが本領発揮の、言ってみれば遅効性のデッキである父さんのデッキには《くず鉄のかかし》を始めとした防御系カードの割合が高めだ。

あの伏せカードも恐らく、というか間違いなく防御用のトラップだろう。

どうやって攻めるべきか…？

…よし、これで行こう。

「僕は手札から《ジャンク・シンクロン》を通常召喚。

その効果で墓地の《ライトロード・ハンター ライコウ》を特殊召喚。

レベル2の《ライトロード・ハンター ライコウ》に、レベル3の《ジャンク・シンクロン》をチューニング！」

☆2+☆3=☆5

「氷の静寂が、全てを冷たく凍らせる！ 光さす道となれ！

シンクロ召喚、《氷結のフィッツジェラルド》！！」

《氷結のフィッツジェラルド》 星5／水属性／悪魔族／攻2500／守2500

現れたのは氷の悪魔だ。

攻撃力は2500とこのままでは《ニトロ・ウォリアー》を倒せないが、それなら他のカードで援護してやればいい。

「手札から速攻魔法発動、《月の書》。

《ニトロ・ウォリアー》を裏守備表示にする!!」

「何…?」

《ニトロ・ウォリアー》の攻撃力は2800だが、守備力は1800。

《氷結のフィッツジェラルド》の2500で十分突破できる。

「バトル! 《氷結のフィッツジェラルド》で《ニトロ・ウォリアー》を攻撃!

《氷結のフィッツジェラルド》の効果によってダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動する事ができない!」

これが《氷結のフィッツジェラルド》を召喚した最大の理由だ。

《氷結のフィッツジェラルド》なら伏せてあるものが防御のトラップだろうと関係なしに攻撃できる。

「ブリザード・ストライク!!」

《氷結のフィッツジェラルド》の放った極寒のブリザードに、守備表示の《ニトロ・ウォリアー》が破壊される。

「僕はカードを1枚伏せてターンエンド」

「俺のターン、ドロー! ダブル・サイクロン 手札から速攻魔法を発動!

自分フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚と、相手ファイ

ルド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して破壊する。

俺の伏せカード1枚と、お前の伏せカードを破壊だ」

「く!？」

伏せていた僕のミラーフォースが碎かれる。

でもなんで使いにくい《ダブル・サイクロン》を…?

その答えはすぐに分かった。

「俺が《ダブル・サイクロン》で破壊したカードは《リミッター・ブレイク》。

その効果で俺はデッキから《スピード・ウォリアー》を攻撃表示で特殊召喚する」

《スピード・ウォリアー》 星2／風属性／戦士族／攻 900
／守 400

…なるほど、伏せていたカードの片方はブラフだったのか。
これで父さんは特殊召喚と、僕の伏せカード除去を同時に行ったことになる。

「手札から《ジャンク・シンクロン》を通常召喚。

その効果で墓地の《ソニック・ウォリアー》を特殊召喚。

自分フィールド上にチューナーが表側表示で存在する場合、《ボルト・ヘッジホッグ》は特殊召喚することが出来る、《ボルト・ヘッジホッグ》を守備表示で特殊召喚!」

《ジャンク・シンクロン》 星3／闇属性／戦士族／攻1300／
守 500

《ソニック・ウォリアー》 星2／風属性／戦士族／攻1000／
守 0

《ボルト・ヘッジホッグ》 星2／地属性／機械族／攻 800／
守 800

一瞬にして、父さんの場が整って行く。
この状況なら…恐らくあのカードが来る!?

「レベル2 《ソニック・ウォリアー》に、レベル3 《ジャンク・シンクロン》をチューニング!」

☆2+☆3=☆5

光の中で、モンスターの姿が輝く光へと変わっていく。

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ! シンクロ召喚!

いでよ、《ジャンク・ウォリアー》!」

《ジャンク・ウォリアー》 星5／闇属性／戦士族／攻2300／
守1300

現れたのはやはり、父さんが信頼をよせる鋼鉄の戦士だった。

「《ソニック・ウォリアー》の効果発動、このカードが墓地へ送られた時、自分フィールド上に表側表示で存在するレベル2以下のモンスターは500ポイントアップする。

この効果で《スピード・ウォリアー》と《ボルト・ヘッジホッグ》の攻撃力をアップ！」

《スピード・ウォリアー》 攻撃力900↓1400

《ボルト・ヘッジホッグ》 攻撃力800↓1300

「さらに《ジャンク・ウォリアー》の効果発動！」

《ジャンク・ウォリアー》のシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする。

パワー・オブ・フェローズ！」

《ジャンク・ウォリアー》 攻撃力2300↓5000

「攻撃力…5000!?!」

「バトル! 《ジャンク・ウォリアー》で《氷結のフィッツジェラルド》に攻撃!

スクラップ・フィスト!?!」

「ぐっ!？」

鋼鉄の拳が、フィッツジェラルドを正面から叩きつぶす。

遊輝

LP 4000 ↓ 1500

大幅にライフを削られたけど、まだ凌げる。

墓地の《ネクロ・ガードナー》は温存しておくべきだろう。

「《氷結のフィッツジェラルド》の効果発動、戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合手札を1枚捨てる事でこのカードを墓地から表側守備表示で特殊召喚する。

手札の《ゾンビキャリア》を墓地に捨て、《氷結のフィッツジェラルド》復活!」

《氷結のフィッツジェラルド》 守備力2500

「俺はこれでターンエンドだ」

「僕のターン、ドロー!!! 手札を1枚デッキトップに戻し、墓地の《ゾンビキャリア》の効果発動。

《ゾンビキャリア》を特殊召喚!」

《ゾンビキャリア》 星2／闇属性／アンデット族／攻 400／
守 200

「よし、レベル5《氷結のフィッツジェラルド》にレベル2《ゾンビキャリア》をチューニング！」

☆2＋☆2＋☆3＝☆7

「冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の花よ、開け！
シンクロ召喚！現れよ、《ブラック・ローズ・ドラゴン》！」

《ブラック・ローズ・ドラゴン》 星7／炎属性／ドラゴン族／攻
2400／守1800

「《ブラック・ローズ・ドラゴン》の効果発動！」

このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に存在するカードを全て破壊する事ができる。

ブラック・ローズ・ガイル！！」

吹き荒れる黒い薔薇の花弁が、父さんの場を包み込む。

その中で父さんのモンスターと伏せカードが砕け散った。

伏せカードは…《強制終了》。やはり防御系のカードだった。

「僕は魔法カード《貪欲な壺》発動。

墓地の《ブラック・ローズ・ドラゴン》、《氷結のフィッツジェラルド》、《ジャンク・シンクロン》、《冥府の使者ゴーズ》、《クリッター》をデッキに戻し、カードを2枚ドロ―。

そして手札から、《デブリ・ドラゴン》を召喚」

《デブリ・ドラゴン》 星4／風属性／ドラゴン族／攻1000／
守2000

「《デブリ・ドラゴン》の効果発動。このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する攻撃力500以下のモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる。」

《ライトロード・ハンター ライコウ》を特殊召喚！

さらに、墓地からの特殊召喚が成功した場合、《ドッペル・ウオリアー》を手札から特殊召喚！」

これで準備は整った。

「レベル2の《ドッペル・ウオリアー》とレベル2《ライトロード・ハンター ライコウ》にレベル4《デブリ・ドラゴン》をチューニング！」

☆2＋☆2＋☆4＝☆8

「集いし鋼が、新たな命となって動き出す！ 光さす道となれ！！シンクロ召喚、生誕せよ、《スクラップ・ドラゴン》！！」

《スクラップ・ドラゴン》 星8／地属性／ドラゴン族／攻280
0／守2000

「来たな…遊輝、お前のエースモンスターが…」

「さらに《ドッペル・ウォリアー》の効果発動！

《ドッペル・ウォリアー》がシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた場合、自分フィールド上に「ドッペル・トークン」2体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる」

場に現れる2体のドッペル・トークン。

「ドッペル・トークン」 星1／闇属性／戦士族／攻400／守400

「バトル、ドッペル・トークン2体で父さんにダイレクトアタック
！！」

「ぐっ…」

遊星

LP4000↓3600↓3200

「そして《スクラップ・ドラゴン》でダイレクトアタック！

スクラップデスバーナー!!」

「うおおお!？」

《スクラップ・ドラゴン》がその身体を震わせながら、最大火力のブレスを放つ。

その炎が父さんのライフを大幅に削った。

遊星

LP 3200↓400

父さんの残りライフは400。

このまま削り切りたいけど、僕に追撃の手段はない。

「僕はターンエンド」

僕の残り手札は1枚。

でも父さんだって残り手札は1枚、次のドローを合わせても2枚だ。場が全滅状態で、たった2枚で戦況を変えられるとは思えない。

なら、次の僕のターンで決着を着けられるはず。

そう思っていたけど、それは甘かった。

「俺のターン、ドロー！」

…俺は手札から魔法カード《戦士の生還》を発動。

墓地から《ジャンク・シンクロン》を手札に加える。

《ジャンク・シンクロン》を通常召喚、その効果によって《チェーンング・サポーター》を墓地から特殊召喚する。

そして…」

父さんが最後の手札に手をかけた。

「手札から速攻魔法発動、《地獄の暴走召喚》！」

「なあ！？」

このタイミングで！？

「《地獄の暴走召喚》は相手フィールド上に表側表示でモンスターが存在し、自分フィールド上に攻撃力1500以下のモンスター1体が特殊召喚に成功した時に発動する事ができる。

その特殊召喚したモンスターと同名モンスターを自分の手札・デッキ・墓地から全て攻撃表示で特殊召喚する。

相手は相手自身のフィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、そのモンスターと同名モンスターを相手自身の手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。

俺はその効果でデッキから残り2枚の《チューニング・サポーター》を召喚」

「くっ…僕は何も召喚出来ない…」

当然ながらトークンには対応していないし、エクストラデッキは範囲外だ。

そもそも、僕の《スクラップ・ドラゴン》は1枚だけ。

一方的に父さんだけが召喚できることになる。

しかも《チューニング・サポーター》…ドロー加速カードだ。

挙句、この状況で行うシンクロと言えば…アレしかない。

「レベル1《チューニング・サポーター》とレベル2になった《チ

ユーニング・サポーター≫2体を、レベル3《ジャンク・シンクロン》でチューニング!!」

☆1＋☆2＋☆2＋☆3＝☆8

「集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます。光さす道となれ!

シンクロ召喚! 粉碎せよ、《ジャンク・デストロイヤー》!!」

《ジャンク・デストロイヤー》 星8／地属性／戦士族／攻260
0／守2500

「くっ!？」

やっぱり《ジャンク・デストロイヤー》か!？

「まず《チューニング・サポーター》がシンクロ召喚に使用されたことで、俺はカードを合計3枚ドロウする。

そして《ジャンク・デストロイヤー》の効果発動、シンクロ召喚に成功した時、このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数までフィールド上に存在するカードを選択して破壊する事ができる。

チューナー以外のモンスターは《チューニング・サポーター》3枚、よって3枚のカードを破壊する。

破壊するのは2体のドッペル・トークンと《スクラップ・ドラゴン》だ!

タイダル・エナジー!!」

《ジャンク・デストロイヤー》から放たれたエネルギー弾が、2体のドッペル・トークンと《スクラップ・ドラゴン》へ直撃する。

「スクラップ・ドラゴン!?!」

《スクラップ・ドラゴン》はその鋼鉄の身体に幾筋ものヒビが入ったかと思うと、大爆発を起こした。
これで僕の場合は全滅だ。

「《ジャンク・デストロイヤー》でダイレクトアタック!
デストロイ・ナックル!!」

巨大な魔神の拳が迫る。
でも、まだまだ!

「墓地から《ネクロ・ガードナー》を除外し効果発動!
相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする。

この効果で《ジャンク・デストロイヤー》の攻撃を無効にする!
!」

僕に襲い来る攻撃を、僕のそばに影のように現れたネクロ・ガードナーが、不可視の盾によって防いでくれた。

「バトルを終了する」

よし、凌いだ。

《ジャンク・デストロイヤー》の効果はシンクロ召喚に成功した時だけ。

それ以降は攻撃力2600のバニラモンスターと変わらない。

それなら巻き返しようはある。
しかし…。

「メインフェイズ2、俺は手札から魔法カード《シンクロキャンセル》を発動。

《ジャンク・デストロイヤー》をエクストラデッキに戻し、このモンスターのシンクロ召喚に使用したモンスター一組が自分の墓地に揃っていれば、この一組を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

《ジャンク・シンクロン》と3体の《チューニング・サポーター》を特殊召喚」

再びシンクロ召喚が可能な状態になってしまった。

そして…この状況なら間違い無く父さんのエースモンスターが来る！

「レベル1《チューニング・サポーター》とレベル2になった《チューニング・サポーター》2体を、レベル3《ジャンク・シンクロン》でチューニング！！」

☆1+☆2+☆2+☆3=☆8

「集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ！
シンクロ召喚！ 飛翔せよ、《スターダスト・ドラゴン》！！」

それは、光と共に舞い降りた。

「綺麗…」

それは観戦していたゆまか恵か、はたまた僕の眩きだったのか。
《スターダスト・ドラゴン》：その名の通り、星の輝きを宿す龍。
世界を救った英雄、不動遊星のエースにして象徴たるドラゴンだ。

「《チューニング・サポーター》がシンクロ召喚に使用されたことで、俺はカードを合計3枚ドロースる。

そしてカードを1枚伏せてターンエンドだ」

僕の状況は限りなく悪い。

僕のエース、《スクラップ・ドラゴン》はすでに碎かれ、場はガラ空きなうえ手札は残り1枚。

父さんの場には恐らく防御用と思われる伏せカード。

そして：目の前には父さんのエース、《スターダスト・ドラゴン》。圧倒的に不利な状況で、しかも厄介な効果を持つ《スターダスト・ドラゴン》が目の前にいる。

息子である僕はいつだって、《スターダスト・ドラゴン》の輝きを間近で見っていた。

でも：今日こそ僕は、この輝きを超えて見せる！
このドロローに賭ける！！

「僕のターン、ドロオオオオー！！」

気迫と共に引いたそれは…。

「手札から魔法発動！ 《死者蘇生》！
墓地の《スクラップ・ドラゴン》を復活！！」

僕の隣に、再び《スクラップ・ドラゴン》が降り立つ。

壊れたガラクタたちが集まった鉄屑龍。僕のエースモンスター。

《スターダスト・ドラゴン》の輝きとは逆に、鋼鉄の武骨さを感じ

させる《スクラップ・ドラゴン》。

『英雄』という輝きを持つ父さんと、何も輝きを持ち合わせない僕。
完成された輝きを放つ龍と、スターダスト・ドラゴン不格好で歪な龍。スクラップ・ドラゴン

思えば…《スクラップ・ドラゴン》は、僕に似ているのかも知れない。

輝きに憧れ、それを持ち合わせていない僕に…。

でも…今日こそ届かせる！

あの『輝き』を超えてみせる！！

《スクラップ・ドラゴン》、僕の相棒よ…僕に力を！！

「最後の手札、行くよ、父さん！！

魔法発動、《地砕き》！

相手フィールド上に表側表示で存在する守備力が一番高いモンスター1体を破壊する。

父さんの場にいるのは《スターダスト・ドラゴン》のみ。

よって《スターダスト・ドラゴン》を破壊する！！」

「《スターダスト・ドラゴン》の効果発動！

「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。

ヴィクテム・サンクチュアリ！！」

《スターダスト・ドラゴン》が光の粒子となり、自身を破壊しようとしていた《地砕き》を防ぐ。

でも、これで！

「デッキトップのカードを一枚墓地へ送ることで墓地の《グローアップ・バルブ》を特殊召喚。

そして《スクラップ・ドラゴン》の効果発動！1ターンに1度、

自分及び相手フィールド上に存在するカードを1枚ずつ選択して互いに破壊する事ができる！

選択するのは《グローアップ・バルブ》と伏せカードだ！
ダストブレイズ！」

《スクラップ・ドラゴン》から放たれるくず鉄混じりのブレスで、
《グローアップ・バルブ》と伏せカードが碎け散る。

碎けたカードは《くず鉄のかかし》、父さん愛用の防御トラップだ。
でもこれで父さんの場合はガラ空きだ！

「これでラストだ、《スクラップ・ドラゴン》でダイレクトアタック！
クー！！

いけえ！ スクラップデスバーナー！！」

《スクラップ・ドラゴン》からの最大火力のブレスが父さんに迫る。
ついに…父さんに勝った！

だが、そう思った瞬間だった。

「手札からモンスター効果発動！ 《速攻のかかし》！！

このカードを手札から捨てて、その攻撃を無効にしバトルフェイズを終了する」

《スクラップ・ドラゴン》のブレスは、父さんの前に割り込んできたブースター付きのかかしによって防がれていた。

必勝と思われた攻撃を防がれ、手札もない。

「僕は…ターンエンド…」

僕にはエンド宣言をする以外に道はなかった。

「エンドフェイズ時、《スターダスト・ドラゴン》は自身の効果によって墓地から自分フィールド上に特殊召喚される。

戻れ、スターダスト!!」

父さんの言葉に応え、光と共に再び《スターダスト・ドラゴン》が舞い降りた。

「俺のターン、ドロー! 手札から《貪欲な壺》を発動。

《ニトロ・ウォリアー》、《ジャンク・ウォリアー》、《ジャンク・シンクロン》、《クイック・シンクロン》、《チューニング・サポーター》をデッキに戻し、カードを2枚ドロー。

そして魔法カード《調律》を発動。デッキから《ジャンク・シンクロン》を手札に加え、デッキをシャッフル、その後、自分のデッキの上からカードを1枚墓地へ送る。

《ジャンク・シンクロン》を通常召喚、その効果によって《チューニング・サポーター》を墓地から特殊召喚する。

レベル1《チューニング・サポーター》にレベル3の《ジャンク・シンクロン》をチューニング! 《アームズ・エイド》!!」

☆1+☆3=☆4

《アームズ・エイド》 星4/光属性/機械族/攻1800/守1200

「《チューニング・サポーター》の効果によりカードを1枚ドロー。さらに《アームズ・エイド》の効果発動、装備カード扱いとしてモンスターに装備、装備モンスターの攻撃力は1000ポイントア

ツプ。

《アームズ・エイド》を《スターダスト・ドラゴン》に装備!!」

《スターダスト・ドラゴン》 攻撃力2500↓3500

鋼鉄の義手が、《スターダスト・ドラゴン》へと装着された。

「バトル!

《スターダスト・ドラゴン》で《スクラップ・ドラゴン》に攻撃
!」

《スターダスト・ドラゴン》が構えた腕に、星のように輝く光が集
まっていく。

「行け、パワー・ギア・ソニック!!」

瞬間、突き出された《スターダスト・ドラゴン》の腕から閃光が奔
流となって放たれた。

「迎え撃て、《スクラップ・ドラゴン》!! スクラップデスバー
ナー!!」

僕の声に応え、《スクラップ・ドラゴン》が雄叫びと共に最大火力
のブレスを放つ。

《スターダスト・ドラゴン》の放つ閃光と《スクラップ・ドラゴン
》の放つ火炎が空中でぶつかり合う。

だが、拮抗したのは一瞬のこと。

《スターダスト・ドラゴン》の放つ閃光が、《スクラップ・ドラゴ

ン》の放つ火炎を押し返し、《スクラップ・ドラゴン》を押し包む。閃光の中で、ボロボロと崩れ去っていく《スクラップ・ドラゴン》。断末魔の雄叫びと共に《スクラップ・ドラゴン》は爆発した。

遊輝

LP 1500 ↓ 800

「《アームズ・エイド》の効果発動！

装備モンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える！」

崩れ落ちる《スクラップ・ドラゴン》が起こす爆風が、僕に襲いかかる。

それを見ながら、僕は自分の敗北を静かに受け入れた…。

遊輝

LP 800 ↓ 0

「負けた…」

僕はがくりと膝をつく。

カードたちは、僕にしっかりと応えてくれた。
でも…父さんには勝てなかった。

「いいデュエルだった、遊輝」

父さんはそう言って僕を立たせてくれた。

「ははは…父さんには敵わないや」

「そんなことはない。 お前は昔より、ずっと強くなっている。
いつかお前は俺よりずっと強くなるだろう」

「そんなの無理だよ…」

「無理なものか。

絆を信じ、進化をやめなければ、無理なことなどこの世に一つもない。

遊輝、進化を続けろ。 デュエリストとしても、人間としても。
お前なら…それが出来るはずだ」

そう言ってポンと僕の肩を叩くと、背を向け母さんたちの方へと歩いて行く。

その背中とはとても大きく大きい。

ああ、父さん…父さんはどこまで巨大な壁なんだ…。
すべてにおいて、僕はまだまだ父さんには敵わない。
でも…。

「いつか…いつか超えて見せる…！」

僕は決意を込め呟くのだった。

S i d e o u t

S i d e ゆま

ユウくんは遊星おじさんのデュエルは、ものすごいデュエルでした。どこがどうと聞かれると、全部！としか言いようがないです。

次から次にシンクロ召喚で呼び出されるモンスターたち。

戦況は優勢と劣勢をお互に行ったり来たり。

最後にはエースモンスター同士のぶつかり合い。

負けちゃったけど、本当にユウくんはすごかったですう！！

でも：私は最近、ユウくんの凄さを見ると、ちょっとだけ思うことがあるのです。

私はデュエルだってそれなり程度だし、機械とかにも強くないし、ユウくんみたいに凄くないです。

そんな私が：隣にいてもいいのかな？

私が隣にいて、ユウくんの邪魔になってるんじゃないかな？

ユウくんの持つ輝きを見るたび、その輝きの近くに私の居場所が本当にあるのかどうか：そんなことを思っちゃうのでした…。

Side out

Side 恵

遊星おじさまとユウのデュエルは凄まじいものだった。

残念ながらユウの敗北になってしまったけれど、それは仕方が無い。むしろ、世界でも最高ランクのおじさま相手に勝ってしまったら、それこそ一大事だろう。

ユウはおじさまに勝ったことが無いと嘆いていたけど、ユウの年齢と経験で『おじさま相手に善戦する』ということが十分驚異的だということに気付いて欲しい。

本当に：ただの凡人の私とは違う…。

ユウの凄さを見るたび、最近、ふと心の片隅で考える事がある。

私は：ユウの足枷になっているのではないだろうか？

ユウ一人の方が、何事も上手く出来るのではないだろうか？

はっきり言えば意味の無い不安だ。

ユウが私たちを邪魔だと思っていることなどありえない。

だが意味の無い不安だと分かっているけども：何故かこの思考が払拭できない。

私たち3人はいつも一緒だった。

だが：案外、その終わりが近付いているのかもしれない…。

S i d e o u t

S i d e 遊輝

父さんとのデュエルの後、再びお茶へと戻っていった僕たちなのだが、途中、父さんと母さんのPDAに連絡が入った。

どうやら急用が入ったらしく、父さんたちは足早にどこかに出かけて行った。

最近だけど、こんなことが多い気がする。

仕方なく、僕たちはガレージに戻り、Dホイールの調整作業に戻った。

「ユウ、メモントモリーのエンジン制御プログラムについて相談したいんだけど…」

「うん、どんなこと？」

「最大出力を重視した形にしたい。私はあまりコーナーは得意ではない…。」

なら、直線で巻き返せるようにしたい…」

「そうなるよ…うーん、制御プログラムの半分近くは見直すことになると思うよ。」

ちよっと時間かかるだろうし、その間メモントモリーは使えないけどいいの？」

「構わない、ここに置いてく。今日はどうせゆまが泊まりに来る。それほどの距離は無いし、歩いて家まで帰ればいい…」

「そうなの？」

「はい、今日はメグちゃんの家でお泊まり会ですう！」

嬉しそうなゆまの言葉に、恵もほほ笑む。

友達の家泊まりかあ…僕にはそう言う経験ないけど、女の子はこういうのが結構盛んみたいだ。

「父さんたちもいないし、面倒だから二人とも泊まっていけばいいのに…」

どうせ客室はいくつか空きがあるし、調整をやるんでも使う本人がいた方がいい。

僕は何の気なしにそんな風に言ったら、ゆまと恵が何だか真っ赤になりながら部屋の隅に移動してヒソヒソ話を始めた。

「これって、絶対アレなお誘いですよね！ メグちゃん…！」

「…不覚、今日のぬこプリントでは…勝負にならない…!?!」

「えう…私だって縞ですう…」

「とりあえず装備変更が必要…」

？ 一体何の話をしてるんだろ？

…ああ、そういうことか。

「大丈夫だよ、二人とも。

作業用のツナギなら予備があるから」

「つ、ツナギ！？ ユウくんはそういうのでいいんですか！？」

「もっと可愛いのがいいのでは…？」

「？ 整備用の格好で、可愛いのは…？」

僕が首を傾げながら尋ねると、何故か途端に二人の視線が冷たくなった。

え？ 何か僕、間違えた？

「…メグちゃん、もう帰ろうです」

「同感…もう帰る…」

「え、あ…二人とも」

明らかに不機嫌そうになった二人はそのままガレージから出て行ってしまった。

僕、何か気に障る事でもしたかな？

良く分からないけど、まあいいや。明日、二人には謝ろう。
それより、そろそろお腹減ったなあ。

「確かこの辺りに…あった、『爽やかスターダストソードル』」

カップラーメン大好きなジャックおじさんは、よく『ピリ辛レッドデーモンズヌードル』を勧めてくるけど僕はこっちの方が好きなんだよね。

そんなどうでもいいことを考えながら、僕は一人になったガレージでカップラーメンにお湯を注いだ。

…僕はこの後、二人を家に泊めなかったことを死ぬほど後悔することになる…。

S i d e o u t

S i d e ? ?

「何なんだ…何なんだよテメエはよお!？」

ボクのモンスターの攻撃でライフがゼロになった相手が、絶叫のような声を上げてガクリと倒れた。
ボクは手にしたカードを見る。

カードには倒れた相手の子の顔、そして『ジャッカルⅡ岬』というカード名が無地だったはずのカードに刻まれた。倒れた相手に、ボクは一言呟く。

「…ごめんね」

言ってから、ボクは自分で自分を『醜い』って思ってしまった。謝るくらいなら、最初からしなければいい。

本当はやりたくない、というのだって言い訳でしかない。悪いことだと知っていて、分かっているながら人を傷つけて…拳句傷つけた後に謝罪をするなんて、あまりにも醜い偽善だ。

でも…どうしてもボクはこの言葉を使うのをやめられない。パパのために続けなくちゃいけないってわかっているけど、偽善にすぎらないでいられるほどボクは強くないよ…。

「ごめんなさい。せめて…いい夢を」

そう言って背を向けた時、デュエルリーダーが音を発した。登録しているデュエリストが接近してきてる。数は2人。

リーダーには学園でも実力ある相手が登録されている。気を引き締めないと…。

「いくよ…」

そう自分に言い聞かせるように呟くと、ボクは変装用のローブのフードを深く被りなおしたのだった…。

S i d e o u t

S i d e 恵

「まったく、ユウくんは乙女の純情を踏みにじり過ぎですう！」

「私たちの覚悟を…返してほしい…」

隣で頬を膨らませプンプン怒るゆまに、私は同意する。

かく言う私も同じような顔をしていることだろう。

ユウにはいい加減、その辺りを是正して欲しい。

そんな風に思っていた時だった…。

ゾクッ！

「ッ！！？」

背中を何か嫌なものが駆け抜ける。

「えう…メグちゃん…」

見ればゆまが不安そうな顔で私を見ていた。

恐らくゆまも私と同じで何かを感じ取ったのだろう。

一息を付き、ゆっくりと辺りに視線を巡らせる。

そして、その違和感に気付いた。

ここは商店街にほど近い、住宅街の道だ。

大通りという訳ではないが、決して交通量が少ないという訳ではないはず。

なのに…何故不自然なように誰もいない？

「メグちゃん、あれ…」

ゆまの指さす方に視線を巡らすと、そこには人影があった。

背丈は小柄、私たちと同じか少し上程度。

全身の隠れるローブを身に纏い、目深にフードを被っているため詳細はまるでわからない。

その人影が声を発する。

『宮田ゆま、レインⅡ恵だな』

機械を通した声だ。性別も年齢も分からない。

その声ははっきりと私たちの名前を呼んだ。

「えう！？　　どうして私たちの名前を！？」

「…何者？」

警戒しながら問うと、おもむろにローブの人物はデュエルディスクを構えた。

『この私と、デュエルをして貰う』

「…断る。　　受ける意味がない…」

そう即座に答えるが、ローブの人物は言葉を紡ぐ。

『ふふ：お前たち2人はすでに逃げられない。この私にデュエルで勝たなければな』

「「!?!?」」

その言葉と共に、私とゆまを衝撃が襲った。
ソリッドビジョンではない、これは何か別のもの…。

「まさか：おじいちゃんたちが言っていた『闇のデュエル』!?!?」

「…今のを考慮すれば、その可能性はある…」

ゆまの言葉に私は頷く。

もし、本当に噂に聞く『闇のデュエル』だというなら、デュエルで勝たなければ逃げられないという相手の話も現実味を帯びてくる。

「ゆま、構えて。やるほか：なさそう…」

「そうみたいです…」

私たちはお互いに、鞆からデュエルディスクを取り出し構えた。

『やる気になったようだな…』

「無理矢理そうさせて、よく言うですう！」

「…倒す！」

「「デュエル!!!」」

…To be continued

ゆま「ゆまと!」

恵「恵の…」

ゆま・恵「今回の最強カード」

ゆま「ユウくん、負けちゃいましたね…」

恵「うん…でも遊星おじさま相手なら仕方ない…。

というかおじさまはラックが高すぎる…。

ランサー並の幸運度のユウは良く頑張った…」

ゆま「幸運度Eですね!」

恵「それより今回の最強カードを紹介する…」

ゆま「今回の最強カードは…もちろんコレです!」

《スターダスト・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター

星8／風属性／ドラゴン族／攻2500／守2000

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ

魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、

このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。

この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、

この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、

自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

ゆま「遊星おじさんのエースモンスターですう！」

恵「出しやすさと使える効果を兼ね備えた、ユウの《スクラップ・ドラゴン》と並ぶレベル8シンクロの代表選手…」

ゆま「主人公ステータスの2500の攻撃力はちょっと物足りないですが、汎用性に優れまくってます！」

恵「《スターダスト・ドラゴン／バスター》や《セイヴァー・スター・ドラゴン》、

《シューティング・スター・ドラゴン》といった進化系もあり、これらのデッキを組む時は必須になる。

シンクロ召喚を使うデッキなら、かなりの確率で投入されている…。

警戒はしたほうがいい…」

ゆま「今回はここまでです！ それにしても…何だか私たち大変な
ことになっちゃいますよ、メグちゃん」

恵「問題無い…（キュッ、キュッ）」

ゆま「あれ、なんでリップつけてるんですか、メグちゃん？」

恵「準備…。眠り姫を起こすのは王子のキス…これ、王道…」

ゆま「！？ その発想は無かったですう！

私もすぐやるですう！」

恵「ではまた次回…」

第10話 父と子 星屑龍VS鉄屑龍（後書き）

新章突入編の今回はイベント多め。

遊輝初の敗北。さらに遊輝、ゆま、恵の心情。

三人は他の誰かの『輝き』を前に、いらんことを考え始めました。
果たしてどうなる事やら…。

第11話 夢とうつつの朝（前書き）

今回はデュエル無しの、ちょっとしたイベント回。
正直読み飛ばしてもらっていい気がする…。

第11話 夢とつつの朝

Side ゆま

「はわっ!？」

私はベッドでパッと目を覚ましました。
今、とんでもないことが起こったような…。

「ほえ？」

そこまで考えてから私は、目の前の光景に違和感を覚えた。
まず目に写った天井は、私の部屋とは違う知らない天井でした。
それにこんなふかふかしたベッド、私寝たこと無いですよ!
それに、それに!

「な、なんでユウくんが同じベッドで寝てるですか!？」

見ればそこにいたのはユウくん。
どう思い出そうとしても、昨日の夜が思い出せないです。
も、もしかして私、一代イベントの記憶が無くなっちゃってるんですか!？

そこまで考えて、私はもう一つの違和感に気付きました。
ユウくんが…私の知ってるユウくんじゃない。
どう見ても20代半ば以上、大人なユウくんでした。
そしてふと鏡を見ると…そこには栗色の髪をセミロングに伸ばし、
淡いクリーム色のパジャマを着た大人の女性がいました。

「え？　これ、私ですか！？」

信じられなくて手を振ったりすると、鏡の中の女性も手を振ります。
間違い無く、鏡に映った私です。

「な、何が一体どうなってるんですか…？」

もう訳分らないことの連続に、私の思考回路はショート寸前です。

「う、ううん…」

そんな中、大人なユウくんが目を覚ましました。

「おはよう、ゆま」

そうやって笑顔を向けるユウくん。

「ゆ、ユウくん、何かおかしいです！？」

ユウくんが私と一緒にベッドで寝てて大人です！？」

「どうしたのさ、一体？　全然訳が分からないんだけど…？」

私は完全にパニックしちゃって、何を言ってるのか自分でも分からない状態です。

そんな中、さらに私をパニックに陥れる事態が起きました。

「ぱー、まー、おはよう！」

「おはよう！」

扉を突き破るようにして二つの影が入ってきて私に飛び付きました。双子の小さな女の子です。

ポニーテールを右で纏めているか、左で纏めているかぐらいしか差が分かりません。

「…ほえ？ ままどうしたの？」

「どうしたの？」

可愛らしく小首を傾げる双子の女の子に、私は目が点で言葉がでません。そんな中、ユウくんは女の子たちの頭をぽんと叩きながら言いました。

「ママはどうやらお寝坊さんみたいだよ、ゆき、まき」

「ぱぱ？ ままはお寝坊さん？」

「お寝坊さん？」

「そうだよ、ほら、ママを起こしてあげて」

「「うん！ まま、起きろお！！」」

元気に返事をした双子の女の子は、私に飛びかかるように抱きついてきました。

抱きしめた瞬間、何とも言えない幸せな気持ちが私の中に広がります。

「あ、あう…」

その感覚に私が戸惑っていると、近付いてきたユウくんが私に囁きました。

「どうしたんだい、ゆま？

ほら、娘たちだよ。僕たち夫婦の幸せの結晶」

その囁きは、私の中の何かを溶かして行きました。
これじゃさっきまで感じていた違和感の正体が…。

…あれ？ 違和感ってなんでしたっけ？
そんなことより！

「ほら、ゆきもまきもお顔洗って、朝ごはんにしようね。
幼稚園遅れちゃうですよ」

「ぶう。 お寝坊さんのままに言われたくない」

「言われたくない」

「ふふふ…ママとお顔洗いに行こうね」

「「うん！」」

左右の腕を小さな手でぶら下がるように掴む双子の娘に、私はほほ笑みながら洗面所に向かいます。

主婦の朝は戦場ですう！

子供たちに幼稚園の準備させて、朝ごはん作って、夫と子供たちを見送って…寝ぼけてなんていられないです！

そんな風に思いながら、私は朝の支度に向かうのでした。

S i d e o u t

S i d e 恵

「はっ!？」

私が目を覚ますと、そこにあつたのは知らない天井だった。身体を起こしてみると、整然とした部屋に優しい色の壁紙と実に私好みの部屋だった。

部屋を見渡そうとして、私は違和感に気付く。

胸が…重い？

視線を真下に下げると…そこにあつたのは確かに存在する二つの膨らみ。

そこに広がっていた大平原は、丘へと変化を遂げていた。

私は力の限りガッツポーズ。

これでゆまと下着を買いに行ったときに、恥ずかしい目に合わずに済む。

店員にキッズコーナーに案内された時の悔しさは、私は忘れていない。

だが…もはやその心配はない！ 私は勝者だ！

頑張った！ 感動した、私の胸！！

…いけない、落ち着こう。

冷静に考えて、胸がいきなり大きくなるということはありません。

残念ながら…誠に残念ながらあり得ない。

そうなれば、これには何かしらの原因があるはず。

そう思い、視線を隣へ向けると…。

「ユウ…」

私の寝ていたベッドには、私の隣にユウが寝ていた。

しかも私の知るユウでは無い。明らかに私の知るユウより10ほど年齢が上だ。

バツとベッドから飛び起きると、鏡台の前に移動し、鏡を凝視する。そこにいたのは腰までの長い髪を持つ、大人の女性だった。

「…私？」

信じられず指で唇をなぞると、鏡の中の女性も同じように唇をなぞる。

もう疑う余地はない、鏡の中の女性は私だ。

私もユウも…大人になっている？

「…どうということ？」

『タイムスリップ』という単語が私の脳裏をよぎる。

荒唐無稽に感じるが、破滅の未来からタイムスリップしてきた未来人に襲撃されたネオドミノシティに暮らす人間なら、タイムスリップが絵空事ではないことは良く言っている。

意識を失う前に『何か』があった。そして私たちは未来に飛ばされた…。

そんな仮説が私の頭の中で立っていく。

その時だ。

「オギャア、オギャア！！」

部屋の隅から突如聞こえ始めた鳴き声に、私はびっくりして身をすくませた。

すると、その声に反応して、ユウが起き上がる。

「あ…ああ、みゆ。 どうしたんだい？」

寝ぼけ眼で、それでもしっかりとした足取りで立ちあがったユウは部屋の片隅の小さなベッドから赤ん坊を抱き上げた。

「どうしたんだい、みゆ？ おむつ…じゃないね。 そうなると…」

泣きやまない赤ん坊に、ユウが考え込むようにすると、その時ユウが私に気付いた。

「あ、恵、起きてたんだ。　だったら、みゆを見てくれてもいいのに」

そう少し口を尖らせながら、ユウは私に近付いてくる。
するとユウの腕の中の赤ん坊はゆっくりと泣きやんでいき、私の方にその小さな手を伸ばしてきた。

「ああ、みゆはママを探してたんだね」

「…ママ？」

「はい」

そう言ってユウが、赤ん坊を差し出して来る。
私はそれを、ゆっくりと優しく抱きかかえた。
その瞬間、私の中を何とも言えない幸せな気持ちが駆け巡った。

「う、うあ…」

その甘い痺れに私が戸惑っていると、近付いてきたユウが私に囁く。

「あはは、やっぱり僕より恵の方がいいみたいだ。
こんなに笑って…」

ほら、恵も抱きしめてあげて、僕たちの娘を。
僕たち夫婦の幸せの結晶を」

その囁きが、私の中の何かを溶かしてゆく。
本能的に感じる。
不味い、このままだと何か取り返しのつかないことが…。

…うん、不味い。

このままだと、夫が仕事に遅れてしまう。

「…ごめんなさい、あなた。　すぐに朝食の準備を…」

「ああ、いいよ。　朝食ぐらいは僕が作るさ。

それより、恵はもう少しみゆを抱いていてあげて。

夜離れてるのが寂しかったみたいだからね」

そうほほ笑んで夫は、寝室から出て行く。

私はすやすやと安らかに寝息をたて始めた愛しい娘を、ほほ笑みながら抱きしめるのだった…。

S i d e o u t

S i d e ? ?

夢とうつつの境は一つ。

何をうつつとするのか、何を夢とするのか…それを決めるのは、その者の心だけ。

さあ、夢のように甘いうつつに酔いしれなさい、愚かな贅よ。

その命を、偉大なる冥魔神さまに捧げるのです。

そして、冥魔神さまの復活を！

…T o b e c o n t i n u e d

ゆま「ゆまと！」

恵「恵の…」

ゆま・恵「今回の最強カード」

ゆま「って、今回デュエル無かったじゃないですか！」

恵「うん…でも紹介していないカードもあるし、ここでその分を紹介するらしい…」

ゆま「まあ、良いんですけど…」

恵「そういうわけで、今回の最強カードを紹介する…。

最強カードは…これ」

《氷結のフィッツジェラルド》

シンクロ・効果モンスター

星5／水属性／悪魔族／攻2500／守2500

闇属性チューナー＋チューナー以外の獣族モンスター1体

このカードが攻撃する場合、

相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動する事ができない。

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、

手札を1枚捨てる事でこのカードを墓地から表側守備表示で特殊召喚する。

ゆま「前回活躍した、ダークシンクロ出身のカードです。

これも以前の《漆黒のズムウォルト》同様、感想でオススメされていたので作者が採用したみたいですね」

恵「ダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動する事ができないという、アンティークギアシリーズのような能力を持っている。

さらに自己再生能力持ち。

この能力が無かったら、ユウは前回が出た時点で負けていた…」

ジャンク・ウォリアー

ゆま「悪くは無いんですが、結構召喚制限がきついんです。

ただ、ユウくんのデッキならジャンクロン+ライコウという具合に簡単に出せます」

恵「本当に、何故ダークシンクロ出身のカードが合うのか謎使用…。ジャンドは鬼畜だから闇…ということ？」

ゆま「闇といえば私たち、不味いんじゃないですか？」

恵「うん、不味い…。これは明らかな闇行き決定モード…。

とはいえ、自力でどうにかなるかどうか疑問…。

ユウに期待するしかない…」

ゆま「そうですね！ やっぱり妻たるもの夫を信じないとです！」

恵「…ゆま、今回の話読んだ？ ユウは私の夫」

ゆま「あはは、何言ってるんですか？ ユウくんは、ゆまの旦那さんだったじゃないですか」

ゆま・恵「……………」

ゆま「メグちゃん、ちょっとお話があります。裏まで顔貸せ、ですう」

恵「…奇遇、私もゆまにO☆H A☆N A☆S H Iがあった。ちょっと来て欲しい…」

ゆま・恵「ではまた次回」

第11話 夢とうつつの朝（後書き）

ヤバいことになっていそうなゆまと恵。
現状については次回に。

今回で完全にストックが底をついたので、更新は遅れると思います
ので気長にお待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2883y/>

遊戯王5D's After ～子蟹冒険記～

2011年12月5日20時46分発行